

# 歯学部ニュース

令和元年度第1号（通算135号）

特集 入学を祝して  
歯学部生の活動

# 目 次

特集1 入学を祝して	1
学部長 前田 健康・副病院長 小林 正治	
<b>入学者のことば</b>	4
歯学科1年 藤井 孝仁	
歯学科1年 須田 遥香	
口腔生命福祉学科1年 加藤 舞	
口腔生命福祉学科1年 室橋 波菜	
小児歯科学分野大学院1年 清川 裕貴	
摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院1年 日野 遥香	
口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年 古田 彩佳	
口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年 石黒明日香	
<b>入学おめでとう 入学者名簿</b>	10
平成31年度 歯学部歯学科	
平成31年度 歯学部口腔生命福祉学科	
平成31年度 歯学部歯学科 2年次編入生	
平成31年度 歯学部口腔生命福祉学科 3年次編入生	
平成31年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻（博士課程）	
平成31年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻（博士前期課程）	
平成31年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻（博士後期課程）	
特集2 歯学部生の活動	12
<b>SSSV報告</b> 井波 茉子・蕨 萌華・本間 利奈	
<b>留学生紹介</b> Andrea Salazar・Orakarn Suebsamarn	
<b>歯学部生の今</b> 口腔生命福祉学科 2年 山田 麻矢	
口腔生命福祉学科 3年 金子 由依／口腔生命福祉学科 4年 柿崎麻友子	
歯学科 2年 小泉 瑠果／歯学科 2年 坂上 莉奈／歯学科 3年 田中 雅之	
歯学科 3年 島田 奏子／歯学科 4年 野口 雅史／歯学科 4年 井村 真美	
歯学科 5年 柏原 佳來／歯学科 5年 米山 実花／歯学科 6年 川田 里美	
歯学科 6年 滝澤 史雄	
<b>歯と口の健康フェアを終えて</b>	33
大藤南々帆	
<b>部活動紹介</b>	35
水泳部 新城 彩世・InDeVO部 林 幸穂	
<b>歯学部運動会を終えて</b>	37
今井 千尋	
<b>大学院へ行こう</b>	38
目黒 史也・鈴木 絢子・鈴木 裕希・竹内 涼子	
<b>学会受賞報告</b>	44
中島 努・岸本 直隆・井田 貴子・大島 邦子・野上有紀子・齋藤 一誠	
勝良 剛詞・大澤 知朗・坂上 馨・阿部 遼・永井 孝宏	
<b>新潟歯学会報告</b>	53
永田 昌毅	
<b>研修医プログラムを修了して</b>	54
田村 浩平・善本 佑	
<b>総務委員会だより</b>	56
前田 健康・田沼 順一	
<b>診療室・分野紹介</b>	65
口腔病理学分野 教授 田沼 順一	
顎関節治療部 准教授 荒井 良明	
<b>大橋 靖先生追悼文</b>	69
高木 律男	
<b>素顔拝見</b>	71
大川 純平・原 実生・齋藤 直朗・上野山敦士・永井 孝宏・野中由香莉	
<b>同窓会だより</b>	77
野内 昭宏・鈴木 利枝・松崎奈々香	
<b>教職員異動</b>	82
<b>平成31年度歯学部内委員会</b>	88
<b>歯学部各種委員会</b>	92
<b>編集後記</b>	93



## 入学を祝して

歯学部長 前田 健康

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新潟大学歯学部に入學された皆さんに、新潟大学歯学部の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。また保護者ならびにご家族の皆様の方々にも心からお慶び申し上げます。皆様方のご期待にそえるべく、新潟大学歯学部でその能力をさらに大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。昭和40（1965）年に設立された新潟大学歯学部は、歯学科に加え、歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスを取得可能な口腔生命福祉学科を有する国立大学法人歯学部です。我々教員ともに、日々進歩する歯科医学、口腔保健医療・福祉を学び、新潟大学歯学部の新しい歴史を築いていきましょう。

国立大学法人は第三期中期計画・中期目標期間に入り、今年度は第三期の4年目にあたります。緊縮国家財政が続く中、文部科学省は各大学、各大学の使命を明らかにするため、ミッションの再定義を行いました。その中で、私ども新潟大学歯学部の強みとして、「問題解決能力を持った歯科医師養成と国内外の人材養成モデルの構築」、「口腔のQOL向上を目指した基礎・臨床研究」、「有病・高齢者への対応や歯科再生医療の実践」があげられました。新潟大学歯学部では、包括的医療を行うことのできる有能かつ感性豊かな歯科医師の育成、歯科医学発展のために指導的な人材および保健・医療・福祉に貢献する専門職業人の育成を教育目標としています。この教育目標達成するために、さまざまな工夫を凝らしたカリキュラムが編成されています。特に、新潟大学歯学部では「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。君たちがこれから新潟大学歯学部で

学ぶ講義、実習の内容は社会に出てからのスタートラインに立つための内容でしかありません。歯科医療人、口腔保健・福祉医療人として長い人生を過ごすしていくには、日々進歩する学問を常に修得する必要があります。そのためには生涯学習という観点が必要で、生涯学習のためには、自ら学んでいくという態度が不可欠です。医療・福祉を目指すものにとっては、問題を発見し、自ら学習し、問題を解決していくという学修形態（問題発見・解決型学習）が望まれます。本学部では早くから課題解決能力の育成に取り組んでいます。課題解決能力の育成には「学習の主体は学生である」という考えのもとで「学生自身が自ら学ぶ」ということが重要です。新潟大学歯学部の教育の主役は、教員ではなくて、君たち、学生諸君です。自ら努力して勉強しなければ、皆さんが望む成果を得ることができません。自己の目標達成のために、切磋琢磨し、たゆまぬ努力をお願いします。

新潟大学歯学部では早くから教育改善を進め、全国歯科大学・歯学部の教育モデルケースとなっています。特に患者様を相手にした臨床実習は実践的な技能教育として高い評価を受け、臨床教育のフロントランナーとしての地位を得ています。さらに、大学院教育でも政府補助金に裏付けられた教育改善を進め、学部レベルから大学院レベルまで、高い教育の質を担保し続けています。研究面の評価の一つとして科学研究費補助金の採択があげられますが、この補助金の採択率も非常に高く、本学の中ではトップに位置しており、研究能力の高い教員が君たちの学修支援にあたります。また歯学部校舎改修に伴い、新たな実習設備が導入・整備され、学生諸君の技能教育に活用されています。各種教材の整備・充実にも努めており、

高い学修効果をあげるため、環境整備にも努めています。これらの素晴らしい教育環境を積極的に活用し、自分の能力をさらに高めるよう努力して下さい。

新潟市は、今年、開港150年を迎えた世界に開かれた海港都市で、進取の精神に基づいた町です。現代はグローバル社会となり、ボーダーレスな環境の中での人材育成が期待されています。私も新潟大学歯学部でも在学中から夏期、春期休暇を利用した学生の短期海外派遣を行い、毎年、約40名の学生が世界各国に出かけ、自己研鑽を行っています。是非、在学中にthe enterprising spirit of a port city opened to the worldを

持って、海外に旅立ち、広い視野を持って下さい。一步を踏み出す勇気が必要で、自発的な気持ちが必要であれば、意義のある大学生活を送ることはできません。

勉強の話ばかり致しましたが、20代前後のこの時期、勉強ばかりだけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、教養のある社会人となるよう人間性を磨いてください。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に、今年度新入生および保護者の皆様全員でまた朱鷺メッセで喜びを分かち合いたいと思っております。





## 歯学部入学おめでとう

新潟大学医歯学総合病院 副病院長 小林 正 治

歯学部歯学科ならびに口腔生命福祉学科に入学された令和元年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。難関を突破され、将来の歯科医療ならびに社会福祉を担うべく全国から集まってきた皆さんを心より歓迎いたします。

皆さんは今、大学入学という一つの目標を達成しました。大学での生活は、皆さんがこれからの人生を生きていくための基礎を固める大切な時期になります。高い志を持って、学業に励んでいたことはもちろんですが、サークル活動やボランティア活動など様々経験を通して、多くの人とかわっていただきたいと思えます。そして、哲学をしてほしいと思えます。哲学するとは何か？高名な哲学者の難しい本を読めということではありません。考えることが哲学です。人生とは何か？愛とは何か？医療とは何なのか？自分は何者になりたいのか？様々なことをこれからの学生生活の中でしっかりと考えてください。

私が20歳の時、もう40年も前になりますが、劇団四季の「この命誰のもの Whose life is it anyway?」という演劇を観ました。劇団四季といいますと「ライオンキング」や「キャッツ」などのミュージカルが有名ですが、「この命誰のもの」という演劇はストレートプレイ、いわゆる社

会派劇でありまして、テーマは尊厳死でした。20歳の私は、医療の何たるかもわからない学生で、また当時の尊厳死の概念も今とはだいぶ違っていました。生きるとは何か？死とは何か？ということ深く考えさせられました。これを観たことが、今でも私が大学病院で医療に関わっている理由の一つであると思っています。

新潟大学医歯学総合病院は、特定機能病院として地域の中核的医療及び高度医療を担う基幹病院であるとともに歯学部医学部の教育病院でもあり、多くの優秀な医療人を輩出してきました。本院の理念は、「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」というものであります。われわれは、優秀な医療人を育てたいと考え、様々な教育プログラムを用意し、全国モデルとなる充実した臨床歯学教育を実施しています。

是非、皆さんには、大学生活の中で様々なことにチャレンジをしてもらいたいと思えます。そして、考えてください。挫折も、人間を大きくします。これから皆さんが、大学での歩みの中で、良き友に巡り合い、良き師に恵まれて、自らの豊かな道を切り拓き、そして皆そろって卒業式の日を迎えることを願っています。

# 入学者のことば

## 入学者のことば

歯学科1年 藤井孝仁



みなさんこんにちは。もう入学してから4ヶ月も経ってしまい、必死に受験勉強をしていた日々が遠い昔のように感じられます。新潟大学前駅からの道のりはいつまでたっても遠いと

感じますが、大学にはだいぶ慣れてきました。

さて、入学者のことばということでお話をいただいて、入学してから今までを振り返ってみると仲間に支えられてやってきたことを実感します。私は長野県出身で、ほとんど初めての新潟。地元友達がいるわけでもなく、みんなとうまくやっていけるのかがまず目下の心配事でした。しかし、そんな不安は全く必要ありませんでした。歯学部のメンバーは皆話やすく、面白い人ばかり。私が、歯学部のガイダンスの昼食時に乾杯の音頭を取ったことなどもあって、すぐに溶け込むことができました。歯学部全体でもたった61人という高校のような少人数の学部だからこそ、繋がりやすさが求められてくると思いますが、私たちは出会って数ヶ月ながら、なかなかのつながりの良さを発揮していると思います。それは歯学部運動会でも感じました。運動会ではクラスTシャツを作るのですが、その発注が間に合わなくなりそうになる事件が起きました。そんな時、宅急便の配送センターまでTシャツを取りに行ってくれる人がいました。運動会後の食事会も遅れた僕に代わって仕切って進めてくれている人がいました。

私は幹事なので本来私がやるべき仕事ではあったのですが、至らない部分を友達が補ってくれたのです。本当に頼りになる友達ですし、本当に感謝しています。これから6年間という長い生活が続いていきますが、その中で関係を今まで以上に強固なものにしていき、充実した学生生活にしていきたいと思います。

そして外せないのは早期臨床実習の話です。もう病院内に出る実習は終わり、オールデンタルにも備える人が増えてくるまでになってしまいました。早期臨床実習では、病院見学、患者付き添い、患者役の三つの班に分かれました。病院見学では実際の治療現場を間近でみることができ、さらにはいくつかの材料も触らせてもらいました。これは良い経験になっただけでなく、歯科医師になるのだというモチベーションにもなりました。患者付き添いと患者役の実習では、患者さんの立場に立つことでその苦勞を感じることができました。待合室で待つのも、治療も長時間かかる患者さんもいて、とても大変だと思いました。歯科医師の立場からすれば待っている時間など、なかなか考えの回らない点だと思うので、細かい部分も患者さんを思いやる気持ちが必要になってくると感じました。これは、実際に治療をするようになってから生きていくことだと思います。

この原稿を書いているのは7月18日。26日にはこの早期臨床実習のまとめ発表があります。ここでもまた班のメンバーと協力することが必要になります。でもきっと持ち前のつながりの強さを生かせれば、良い発表になるでしょう。このつながりの良さをまめに、これからの6年間。口腔生命福祉学科のみんなとは4年間。思いっきり遊んで学んで楽しんでいきましょう！

## 入学者のことば

### 歯学科1年 須田 遥香



新潟大学に入学してから、早いもので3ヶ月以上が過ぎました。初めは、新たな場所での新たな仲間たちとの生活に、期待の反面不安を感じていた人も多いと思いますが、そんな不安は気づけば楽しみに置き換わり、今では毎日とても充実した日々を過ごしています。

入学を機に親元を離れ一人暮らしを始めた者、今までと変わらずに親のいる実家から通う者がほとんどですが、私は入学後、親と離れて、祖父母との生活が始まりました。自分で自分の身の回りのこと全てをやらなければならない子が多い中、私には、温かくてバランスの良い美味しい食事が朝晩出てきます。今までの生活とは全然違う、大学生の生活リズムに合わせてくれている祖父母にはとても感謝しています。祖父母との今の暮らしは、両親や姉と暮らす今までとはまた違い、日々発見があります。しばらくしたら一人暮らしを始めるので、それまでこの生活を満喫しようと思います。

さて、1年生の間は、教養を学ぶため、医療系以外の他の多くの学部生徒と同じ、五十嵐キャンパスで授業を受けます。五十嵐キャンパスには学食があり、昼食時には多くの学生が利用するため、大変賑わいます。期間限定での商品も多いため、どれにしようかと悩むのも五十嵐でしか味わうことのできない楽しみの一つです。時には、友人と大学周辺の飲食店に行ってみることもあります。注目しているお店がまだいくつかあるので、この1年で制覇したいと思っています。

また、ほとんどの歯学科の1年生は、旭町キャンパスが活動拠点である歯学部、もしくは医歯学合同の部活動に所属し、活動しています。部活動は、先輩方はもちろん、部活に属していなければ接点がなかったはずの医学部の一年生や、互いに話しかける勇気が出せずにいた、口腔生命福祉学

科の学生とも交流することの出来る、貴重な場所です。

歯学部先輩方からは、部活に関するだけでなく、学校生活へのアドバイスもたくさんいただくことができ、とても有り難く感じております。しかし、どの先輩からも、「今が一番楽しいから、思う存分遊んでおきな」というアドバイスをいただきます。また、部活や試合の合間を縫っては勉強をなさっている先輩の姿を今まで何度も目にしました。その度に、これから先への不安を抱くと同時に、今年1年を思う存分楽しもうという決意をもさせられます。2年次以降も先輩方のように、勉強、部活、遊びとどれにも一生懸命取り組んでいけたらいいなと思っております。

ここ新潟大学歯学部で、まだ出会ってから3ヶ月ちょっとであるのが信じられないほど、愛おしい仲間たちと、これから6年間多くの困難や幸せを共に過ごしていくのは、とても楽しみです。離れていても、いつも支えてくれている家族に感謝の気持ちを忘れずに、これから6年間充実した学生生活を送りたいと思います。

## 入学者のことば

### 口腔生命福祉学科1年 加藤 舞

新潟大学に入学し、早くも3か月が経ちました。この3か月は本当にあっという間でした。合格したときの嬉しさや、大学生活への期待とともに入学式をむかえたことを今でも覚えています。入学したばかりのころは、やることひとつひとつが高校の時とは違い、不安もありました。初めての履修登録や授業などでは戸惑いもありました。しかし今では、新しい友達もでき、大学生活にも慣れて、充実した楽しい日々を送っています。

4月からは、毎週金曜日に旭町キャンパスでの早期臨床実習が始まりました。早期臨床実習では、患者付き添い実習、患者役実習、治療見学実習を行っています。実際に病院という現場に立つことで、患者さん目線で接することは大切だと改めて感じました。患者さんからお礼を言われたとき、自分は歯科衛生士として見られているのだと

感じ、嬉しさとともに少しずつ意識も高まってきました。実習では、ユニフォームや白衣を着て病院に出ることで、将来自分が医療人として働くという実感がわきました。歯科に関する知識はほとんどなかったのですが、先生方の話を聞いたり、6年生や患者さんと実際に接したりすることで意欲がさらにわいてきました。実習を通して、理想の歯科衛生士に近づけた気がします。早期臨床実習はとても貴重な経験だと思いました。来年からはより大変になっていくと思いますが、向上心を持ち多くの経験をしていきたいです。

大学生活では、部活や歯学部での行事などとても充実しています。部活では、先輩方がみんな優しく、楽しく活動しています。歯学部の部活だからこそ、専門的な知識を得ることができます。歯学部の運動会では、いつも以上にみんなと協力し、仲が深まりました。歯学部は、歯学科と口腔生命福祉学科を合わせて約60人と人数が少ないので、そのぶん気持ちをひとつにみんなで頑張れると感じました。

1年生の間は、たくさん時間があると思うので、いろいろなことに挑戦していきたいです。

入学してからまだ3か月しか経っていないので、行うことがすべて新鮮です。この初心の気持ちを忘れずにこれからも頑張りたいです。これからは楽しいことだけではなく、つらいことや苦しいこともあると思います。ですが、理想の歯科衛生士になれるように日々精進していきたいです。1日1日を大切にさまざまな経験を積み、成長していけるようこれから4年間、仲間と協力し、努力していこうと思います。

## 入学者のことば

### 口腔生命福祉学科1年 室 橋 波 菜

新潟大学に晴れて入学し、早いことに3か月がたちました。わたしは、新潟出身なので慣れない環境での新生活とはなりませんでしたが、新しく始まる生活に少しわくわくしていました。そして今では、期待と不安を胸に出席した入学式がずっと昔のように思えます。最初のころは、90分間の

授業と課題はしっかりとこなせるか、履修登録はちゃんとできるか、新しい友達はできるかなど、たくさんの不安がありました。しかし、今では多くの友達ができ、大学生活にもすっかりと慣れ、毎日楽しく過ごすことができます。

入学式が終わり、すぐに新入生研修が行われました。まだ話したことのない人が多いなかで、自己紹介やグループ討議、お昼ご飯の時間を通じて、たくさんの人と話すことができ、仲良くなることができました。今年から宿泊での研修ではなくなってしまう少し残念でしたが、学科関係なく学部内で交流することができ、いい機会になったと思います。歯学部は61人と少ない人数ではありますが、協力し合いお互いにいい刺激を与えあえるような関係になれたらいいなと思いました。

わたしたちは毎週金曜日に、病院で早期臨床実習を行っています。はじめて病院内をまわったときに多くの患者さんを見て、「自分は患者さんを案内することは本当にできるのだろうか。」と不安になりました。初めての患者付き添い実習は緊張しましたが、最後にお見送りをした時には患者さんに「ありがとう。」と言ってもらい、とてもうれしかったです。患者さんと実際に近くで触れ合うことができ、とてもいい経験になりました。患者役実習では、6年生の先輩に自分の歯をみてもらい、歯磨き指導などをしていただきました。自分が患者側になることで、患者さんは普段どのような気持ちで施術をうけているか体感することができました。また、見学実習では患者さんが実際に治療を受けているところを間近で見ることができ、歯科医師の方や歯科衛生士の方がどのように接しているのかを学びました。病院内では、子供から高齢の方まで様々な患者さんがいます。そのなかで、コミュニケーションが大切だということに改めて感じました。歯科に関する技術は今後学んでいきますが、コミュニケーション能力は普段の生活からでも十分に身につけることができると思います。普段の学校生活の中で積極的にたくさんの人とコミュニケーションをとっていきたいです。

これから4年間、自分の理想の歯科衛生士になれるよう多くのことを学び、大学生のうちにしか



できないことをたくさん経験したいと思います。時にはつらいこともあると思いますが、仲間と助け合い、切磋琢磨し互いの将来の実現に向かい頑張っていきたいです。

## 入学者のことば

小児歯科学分野大学院1年 清川 裕 貴

時期は春も過ぎ、近々暑さも増している爽風の中、苦虫をかみつぶしたような顔で日々の大学院生活を過ごしております。

私は本年度より小児歯科学分野に入局させていただきまして、先生方からの優しくも厳しい叱咤を受けながらも臨床と研究に向き合っています。小児歯科はやや特殊な分野であり、患児を治療するのはもちろんのこと、患児と親の2方向へ教育を施していかなければならない点に困惑と困難を覚えています。昨年度は新潟大学の歯科総合診療部で1年間研修させていただき、どちらかという高齢者の治療を勉強させていただきました。それに比較して小児は成長・発育という将来に向けての段階をもっており、口腔衛生状態や食習慣の管理を行う必要があります。現状を改善するのではなく、将来の伸びしろを高めるお手伝いをさせていただくことが小児歯科医の仕事だと思われま。私がこれまで学んだことはほとんど通用せず、全くの異国の地を訪問してしまったかのような心情ですが、このような新参者に対して医局の先生方は暖かく迎え入れてくださりました。

また小児だけでなく障がい者への対応も学ぶ必要があります。障がい者の歯科治療に関しても全くの初心者であり、どのような対応が必要なのか検討がつかないながらも先生方の診療を見学することで、さまざまに学び考えさせられます。患者さん一人一人の強烈な個性を味わいながら、それに寄り添った治療をしていく風景を見ると、静謐に感動を覚えている自分がいることに気づいてまいります。

さて話変わって研究について話題を移らせていただきますと、私は齋藤一誠准教授の下で「乳歯歯髄細胞由来iPS細胞からの人工的幹細胞の樹

立」をテーマとした研究を行っています。少しミーハー気味に再生医療の領域へ踏み込んでしまいましたが、やはり細胞を弄ることは面白く感じます。細胞は素直なようでわがままであり、こちらが少しでも手違いをするとあっという間に駄目になり、手塩にかけたとしても望んだ結果が出るとは限らない、どことなく小児と通じるものがあるように感じてしまうところです。iPS細胞を扱って間もないですが、これから未永く仲良くさせてもらいたいという淡い希望とデータを出さなければならぬ圧迫感のなか、様々に精進していこうと思います。

大学院に入ってから数か月程度のなかで感じたことは、やっぱり大変だということです。学生や研修医のころにくらべ、臨床も研究も雑務もあれもこれも、で毎日がてんやわんやです。充実感と疲労感の狭間を行ったり来たりして、ふと訳が分からなくなってしまうこともあります。何とか頑張っていこうと思います。

最後となりますが、早崎治明教授、齋藤一誠准教授、医局の先生方、私なぞを入局させていただき誠にありがとうございます。これから幾度もご迷惑をおかけすると思いますが、ご指導のほど何卒よろしくお願いいたします。

## 入学者のことば

摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院1年  
日野 遥 香



2019年4月に本学大学院医歯学総合研究科に入学しました日野遥香です。私は、日本大学歯学部卒業後に東北大学・日本大学での歯科臨床研修、臨床研鑽を経て、今年の1月に地元である新潟に戻り、摂食嚥下リハビリテーション学分野にお世話になることとしました。

私が摂食嚥下の分野に興味を持ち始めたのは研修医の時でした。高齢の患者さんが車椅子で来院された際に移乗や移動等の対応が上手くできずに

いたところ、さらにこの患者さんが摂食嚥下障害であることから経口摂取をしていないことを聞かされてショックを受けました。大学在学中にも摂食嚥下障害の臨床を座学で学ぶことはありましたが、実際の患者さんを目の前にして何もできなかった自分をはがゆく思うとともに、これらの患者さんに対して歯科医療に何ができるのかを真剣に学んでみたいと思うようになったことがきっかけで摂食嚥下リハビリテーション学分野の門をたたきました。

摂食嚥下障害は様々な疾患に伴って生じることから、全身疾患を抱えた患者さんの状態を適切に把握して多職種で取り組むこと、患者さんの状況を把握したうえで時に共感して寄り添う、もしくは厳しく対するなどの工夫が必要です。入学してから3か月が経ちましたが、臨床も研究も駆け出しで自らの知識と経験不足を感じる毎日です。

研究では、摂食嚥下リハビリテーション学分野が培ってきた動物実験の流れを受けて、慢性動物を用いた摂食運動時の神経筋記録の手技を学びはじめました。麻酔の導入から手術、記録、解析と、実験を進める上で分からないことばかりですが、今は一つ一つの実験手技を確実にこなせるように努力していきたいと思っています。まだ臨床と研究において医局の先生方にご迷惑とご心配をかけているばかりですが、必死に学びたいと思いますのでご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

## 入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年  
古田彩佳

この度、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に入学しました古田彩佳です。3月に口腔生命福祉学科を卒業し、その10日後にはまた同じ朱鷺メッセでの入学式に出席させていただき、改めて気持ちを引き締め4か月が経ちました。

現在私は、歯科医院において歯科衛生士として勤務しています。忙しい歯科医院での毎日、学生時代の生活とはまるで違う環境に戸惑いながら、目まぐるしい日々を送っています。毎日自分

自身の知識の未熟さや物足りない技術力を実感しつつ、さまざまな患者様と接し多くのことを学んでいる日々です。

私たちの学年は、5人全て口腔生命福祉学科からの同期です。皆社会人大学院生となり、それぞれの勤務の都合に合わせて講義などで顔を合わせ、近況報告をしたり食事に行ったりすることが、ホッと出来る瞬間でもあります。そして、福祉の講義では普段歯科衛生士として働いているだけに、ふと忘れかけていた社会福祉士の資格も持っていることを改めて実感する機会となっています。せっかくのダブルライセンスを活かしていくためにも、大学院では口腔を中心とした保健・医療・福祉に関してより深く包括的に学び、全ての人々の口腔機能の維持向上の推進に努め、地域社会における健康水準とQOLの向上に寄与することを目指していきたいと思っています。研究への取り組みはまだ始まったばかりで手探り状態の私ですが、先生からご指導、ご助言をいただきながら今自分に出来ることを精一杯こなし、有意義な社会人大学院生生活を送れるよう頑張りたいと思います。

## 入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年  
石黒明日香

わたしは2017年に口腔生命福祉学科を卒業し、博士前期課程に入学しました。そしてこの春、前期課程を修了し、後期課程に進学しました。前期課程入学から修了までを振り返ってみますと、社会人として仕事をもちながら、さらに遠方への引っ越しも重なりましたが、それでも無事後期課程に進学できたのは先生方の熱心なご指導のおかげだと感じています。とても感謝しております。

この度、歯学部ニュースに「入学者のことば」を寄せるにあたり、前期課程での経験、近況、そして後期課程での抱負を述べたいと思います。

前期課程では、研究に関するものごとすべてが初めての体験でした。研究計画書の作成から、データの収集、分析と、わからないことの連続の

日々でしたが、その都度先生から助言をいただきながら研究を進めていきました。一日中院生室にこもって統計ソフトの使い方に悪戦苦闘したり、何度もプレゼン用のスライドやポスターを修正したり、「大学院生って大変だなあ」と思っていたのですが、いま少し時間をおいて振り返ってみますと、日々新しいことを勉強できてとても充実していたと思います。また、初めて訪れる土地で慣れない言葉で学会発表を行い、緊張したことを覚えていますが、このような機会に恵まれてよい刺激を受けることができ、その後の励みにもなっています。こうした前期課程でのさまざまな経験が、今後後期課程で研究に取り組むにあたって、よい道標になってくれるのではないかと思います。

さて話は変わって近況ですが、わたしは現在新潟を遠く離れ、沖縄に暮らしながら、社会福祉士として市役所にて障がい福祉分野の相談援助業務

に従事しています。気候や食べ物やことばの違いに戸惑いつつも、勤務先ではよい先輩方に囲まれて楽しく、ときにめまぐるしく日々を過ごしています。窓口や電話での相談受付、各種福祉サービス・制度の説明や申請手続きのための支援、病院への受診同行や、緊急時の対応など、業務内容は日によりけりです。沖縄というと、とてもんびりゆったりした南国らしい生活を想像されることが多いのですが、仕事をしているとそういうわけにもいかず、雪にすっぽり覆われた静かな新潟の景色が懐かしくなることもあります。

とはいえ、当分は沖縄で仕事の経験を積みながら、後期課程の3年間も悔いなく過ごせるように努力していきたいと思います。研究テーマはまだ固まっておらず、これから準備していくこととなりますが、3年後には大学院生活の集大成として自ら納得できる結果を出すことができるように取り組んでいきたいと思っています。



## SSSV報告

### ハノイ医科大学SV報告

歯学科2年 井波 茉子

ハノイの朝は本当におどろくほど早く、朝の8時からプログラムが始まるのは当たり前であるうえに、私たちが留学生として宿泊していた学生寮からしばらく歩き、スケジュールの5分前くらいに大学病院の歯科病棟に到着するころには、病院のロビーは患者さんであふれ、先生方はすでにせわしく動きまわっています。昨夜も夕食に付き合ってくれ、寮の門限ぎりぎりまで面倒をみてくれていたはずの学生たちが、まったく疲れた様子もなく笑顔で話しかけてくれます。ただただ尊敬です。引率の先生や学生に「まだ眠い？」と聞かれるたび、「全然！」と答えていました。自分でもびっくりするくらい元気に答えていたはずなのに、プログラムの最後にいただいた記念品は目覚まし時計でした。

ハノイ医科大学で出会った人たちは皆すごくパワフルで、ひたむきさと優しさにあふれていました。彼らは日々の勉強や仕事に打ち込みながら、各々のミッションに向き合うことをいつでも忘れません。自分たちの文化に造詣が深く、外国の文化に敬意と関心とを惜しみません。たくさんのお話を話しました。一年生の私にとっては、数少ない同級生の学生を除けば全員が「先生」であり「先輩」だったのですが、彼らの明るい人柄のおかげで、語弊をおそれずに言うならば、尊敬できる友人を得たような感覚でした。

ハノイ医科大学で対応をしてくださった学生、先生方、同行してくださった先輩方から多くのことを学び、あらゆる面でずっと助けていただいた2週間でした。5年の遠藤さん、4年の吉田さん

には、コミュニケーションの面でも、歯科の知識や歯科英語の面でも、私にまったく足りなかった技術と経験とを補っていただき、お二人がいなければこんなに素晴らしい時間は過ごせませんでした。改めまして、このような貴重な機会をくださった魚島先生、石田先生をはじめ、今回の派遣でお世話になった全ての方々に、深くお礼を申し上げます。



## マルメ大学SSSV報告

歯学科4年 藤 萌 華

今年3月、スウェーデンの最南端の都市マルメにあるマルメ大学への短期留学に参加させていただきました。SSSVに参加するのは1年生の3月にベトナムのハノイ医科大学に行つて以来、2度目となります。研修内容は各科での臨床実習の見学が主で、さらには講義、インプラント手術、PBLの見学、歯内療法学の専門家同士のディスカッションにも参加させていただきました。それらを通して特に印象に残ったことが2つあります。

まず1つは、教育です。マルメ大学歯学部は5年制で、スパイラルカリキュラムという年間を通して知識の繋がりと応用をきかせたプログラムになっており、基礎と臨床のサイクルで段階的にステップアップできるようになっています。そして、最も特徴的なのは1年次から患者さんを受け持つことができるということです。それにより、学生のモチベーションを上げるだけでなく、プログラムを超えた範囲で単純な症例に関わることで知識に幅と深みを持たせることができるとおっしゃっていました。このような座学と臨床実習が並行して行われているカリキュラムはデメリットも考えられるものの、早い段階で患者と触れることは医療従事者としての責任感を育み、点と点を結びつけられるような学習ができるのではないかと感じました。

2つ目はインプラント手術の見学です。スウェーデンがインプラント発祥の地であるということを知っていたため、手術見学は楽しみでした。実際に見学していると1日に何人も老若男女問わずインプラント手術を受けており、インプラント治療は一部保険適用であることが患者さんの選択肢に大きく影響を与えているのだと思いました。

滞在中は、スウェーデンの文化や現地の人々に触れることもできました。スウェーデンではFIKAという、友人や仕事仲間とコーヒーを飲んで休憩する習慣があります。先生もよく「FIKA

にしよう。」とおっしゃってくださいました。このブレイクタイムは相手のことをより知ることができ、集中力回復にも効果的な時間であると感じました。そのためなのか、マルメにはオシャレで美味しいカフェが充実しており、カフェ好きの私にとって魅力的な街でした。

今回の留学を通して学んだことはここに書ききれないくらい多く、私にとって刺激となるものばかりでした。自分の勉強不足も感じる事が多く、今後の学習に対する姿勢を改めなくてはいけないと思うきっかけにもなりました。また、マルメ大学で研究していらっしゃる日本人の先生や、マルメ大学の先生、学生と出会い、お話できたことは本当に良かったと思います。最後になりますが、このような機会を与えてくださった魚島先生、石田先生、引率して観光まで連れて行ってくださった前川先生、私の体調を心配しつつも理解し送り出してくれた両親、このような環境を整えてくださった学務の方々に深く感謝いたします。



写真1：ホームパーティーの様子



写真2：左から井川先生ご家族、神野先生、五十嵐理沙さん、園辺悠さん、筆者

## チェンマイ大学の短期留学に参加して

口腔生命福祉学科3年 本間利奈

私は2年生の春休み期間、約2週間チェンマイ大学に短期留学をさせていただきました。一緒に参加したメンバーは全体的に学年が低く、低学年向けのプログラムとなっていました。プログラムの内容は主に病院の各科の見学や地域施設の訪問でした。また実際にインプラントの手術を見学させていただき、私にとってとても貴重な体験をすることが出来ました。また、東北大学と岡山大学との合同プログラムで、ワールドカフェというディスカッションをする場が設けられており、他大学の人とも親交を深めることが出来ました。そして勉強だけでなくエレファントキャンプやナイトマーケット、お寺など多くの観光地に連れて行ってもらいました。毎日がとても充実していて10日間があっという間に過ぎていきました。

私が最も興味深かったことは日本とタイの歯科医療従事者の違いでした。日本では当たり前な歯科衛生士がタイでは存在せず、デンタルナースが存在しました。デンタルナースは免許がいらず、2年間専門学校に通うことでなれるそうです。また主に行う仕事としてスクレーピング・簡単な抜歯・充填があり、歯科医師の指示なしに処置することができます。最終日にはこれらについてプレゼンテーションを行い、日本の学生とチェンマイ

大学の教員の方と討論する機会もあり、日本と海外の歯科医療の違いを実感することが出来ました。

私は今まで海外に行ったことがなく、言語が異なる国に行くことにとっても不安がありました。また昨年からの専門の勉強が始まり歯科の知識が少ないことも気がかりでした。しかし、同行した先輩方やチェンマイ大学の学生の方が分かりやすく説明して下さい、たくさんの知識を習得することが出来ました。まだ学習していないことを知ることで今後の勉強のモチベーションが上がりました。現地の方もとても優しく、私が英語をうまく話せない時でも真剣に聞いてくれたり、ジェスチャーも取り入れてくれたり、英語が苦手な私でもたくさんコミュニケーションを取ることが出来ました。

この留学を通して、日本のことだけでなく、世界の歯科の状況も知ることは大切だと思いました。今後広い視野を持って患者に接することが出来る歯科衛生士になりたいです。そして知識の取得だけでなく、コミュニケーション力や英語力も大きく成長できたと感じています。この留学は一生忘れられない経験になりました。この経験は私の自信になり、これからどんなことにも挑戦していきたいです。最後に私たちが留学出来るように携わって下さった新潟大学の先生方、現地で対応して下さいました先生方・学生の方に深く感謝申し上げます。これからも努力していきたいです。本当にありがとうございました。





## 留学生紹介

## A DREAM THAT TURNED TO DESIRE LED ME TO A NEW BEGINNING, A FRESH START !

顎顔面外科学分野 Andrea Salazar

A dream that turned to desire led me to a new beginning, a fresh start ! Listening to the wonders of Japan from my parents made me desire to visit this fascinating country. And when I did, I was so impressed at how this place that I only imagined growing-up was more than what I thought it would be.



“Do not wait for things to happen, make it happen”, a quote befitting of what I did just to get to this point in my life. I worked doubly hard for my dream to become a reality. I believe that we all have the power to change our lives to the direction that we want.

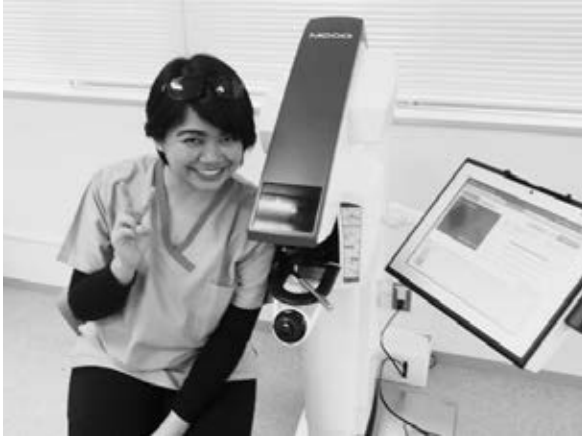
When I arrived, I was full of enthusiasm and to do list. Everything was surreal, I

made it ! I had my language lessons on my first semester. I gained new friends and discover different cultures and traditions. Together we studied Nihongo, it was difficult, but since all of us are on the same boat, I was not nervous.

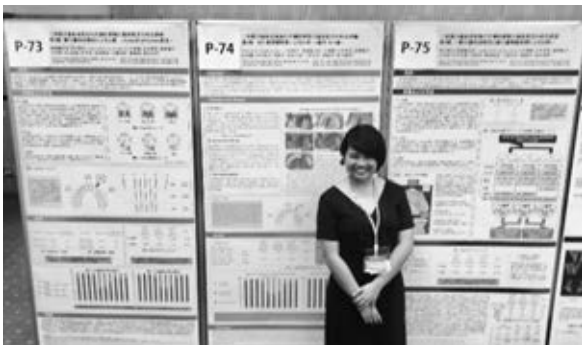


The semester passed and it was now time, to start in my department. I was jittery at first but was overjoyed when they welcomed me with open arms. I am especially lucky for my mentors are all very supportive and kind. I was super impressed by the talent and hand dexterity of my professors, awed by the approaches and instrumentations used during operations. Everything was different and the talent of my mentors are exceptional and above par.





With research I get to exercise critical thinking and observation. We had to brainstorm and read tons of books and researches. It was mind boggling but little by little, I am getting used to it. Surprisingly, I was able to do poster presentation, though nerve wracking but happy that it was over. Hopefully, I will be able to do more presentations with the help of my mentors and maybe publications in the near future.



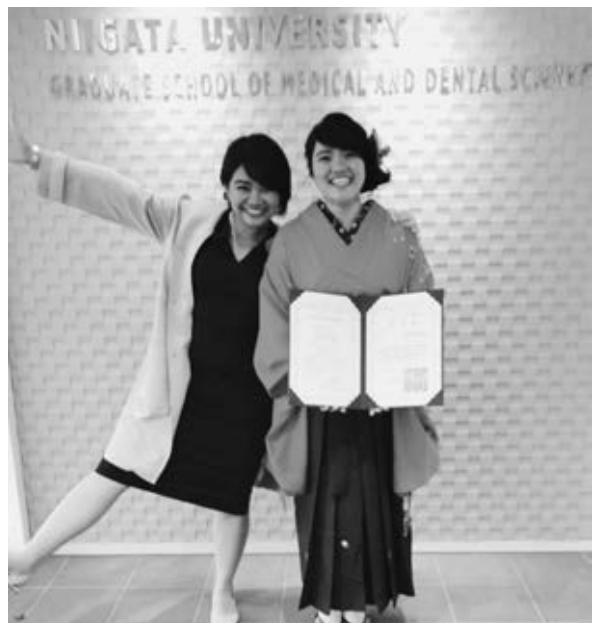
I am also deeply honored to be a part of the people who assist foreign guests whenever there are symposiums, conferences or conventions. As well as short term exchange students in Niigata University from introducing surgical practices and hospital facilities to reinforcing their knowledge about the oral surgery field. I was once shy of talking to other people but the experience honed me to be well rounded, calm and soft spoken. It is a great ex-

perience and a good training ground for me to develop self-confidence.



And lastly, as a person, I have grown by heaps and bounds. The roller coaster of emotions weaving through life here made me who I am right now- strong in character; firmer in decisions and courageous, giving me a positive outlook in life.

I came to Japan with the purpose of making a difference in the world instead it made a difference in me. I know now that for any endeavor, it starts with YOU ! The road to what I want to achieve maybe rocky but by taking it one step at a time, armed with what I have learned in Japan and the Grace of God, I will in time reach my ultimate path.



# The goal of my life changed, when I came here Niigata University.

小児歯科学分野 Orakarn Suebsamarn

My name is Orakarn Suebsamarn. I came from Thailand. Although my nickname is Lookkaew, It's quite difficult for Japanese to pronounce my nickname. So everyone here calls me Ke-o (ケーオ). I've graduated from the Faculty of Dentistry, Khon-Kaen University. After graduated, I was working as an instructor at the Institute of Dentist, Suranaree University of Technology, Nakhonratchasima, Thailand. In order to develop my potential, I applied the MEXT scholarship last year. Then I got a chance to be the 1st year postgraduate student in division of Pediatric Dentistry, Graduate School of Medical and Dental Sciences Niigata University.

In my opinion, it's very challenging for the dentist to create the first impression for child patients or manage their behaviors, seeing that it is a starting point to make a good attitude to dentists and encourage them to be good oral health. As mentioned above, this is the reason I would like to be a pedodontist. It means so much to me as being a part of this department. All the staffs are very kind and helpful. I'm really appreciated

Talking about my first year here, I have to learn and practice in the clinic about pediatric treatment knowledge and techniques. Even it's been only 9 months, I've gotten a lot of experience and have opened my eyes and ears. I've seen a lot of patients whom I've seen only in the textbook such as sev-

eral genetic disorder patients. At Niigata University, pedodontists take care not only children, but also special need care patients of all ages. This reminded me to think about the situation in my country. In Thailand, most pedodontists take care only children under 15 years old. Special needs care patients should be followed up by the same dentist since they were children. However, in Thailand, when they become adults, most general practitioners deny giving treatment to them because of the lack of potential in behavioral managements.

Those disregarded patients made the goal in my life changed. After graduated, I would like to be a pedodontist who is able to take care of special need care patients throughout their lives. Therefore, I'm looking forward to learning and practicing how to treat those patients in appropriate ways during my next three years and I'll try my best.



## 歯学部生の今

口腔生命福祉学科2年 山田麻矢

5月に元号が平成から令和へと代わり、そろそろ平成と令和を書き間違えることが少なくなってきました。今回「歯学部生の今」というテーマで徒然なるままに800文字ほどお付き合い頂きたいと思います。

4月から勉学の拠点を旭町に移して、五十嵐との変化が多々ありました。例えば、五十嵐の購買はキャンパスの真ん中に位置し、2階建てでとても存在感のある大きな建物で、コンビニのように主に食べ物が売っていました。一方で歯学部棟に併設されている購買、通称クワバラは食べ物の数より歯磨剤や歯ブラシ、歯間ブラシ等の口腔ケアグッズの品ぞろえが豊富なことに驚き、歯学部の売店としての特色を感じました。また、五十嵐キャンパスで受けていた教養の授業では自らが主体となって学習を進めるというよりも教授が講義を進めてくださり、生徒はその講義を聴き理解を深めるという受け身で受けるスタイルの講義が多かったです。一方で、旭町キャンパスで4月から始まったPBLテュートリアルという勉強方式では、少人数班に分かれ配布されたシナリオに沿って提示された「事実を確認」し→事実を基にシナリオから「疑問」を抽出し→「仮説」を立て→疑問と仮説を基に「学習課題を設定」し→各自で「自主学习」を進めて、各々で調べたことを「発表」しあい→シナリオに提示された症例に対して

「理解を深めていく」、という生徒の自主性を尊重した学習が活発に行われています。五十嵐キャンパスと旭町キャンパス距離にしては11キロの差がありますが、両キャンパスを共に経験してみて新潟大学はキャンパスごとに個々の魅力が詰まっている個性的な大学であると思いました。

私は弓道部に所属しているのですが、4月に勧誘責任者として仕事をしていました。初めてできるかもしれない後輩に対し期待を膨らませるとともに、入部希望者がいなかったらどうしよう、次の部活の部飯はどうしようなどと常に不安を抱えている1か月間を過ごし、無事5人の1年生が入部してくれたということは何事にも代えがたいほどうれしい事実です。保健学科、歯学部の先輩、後輩もちろん同期とともに弓を弾ける今がとても楽しいです。



# 3年生になって

口腔生命福祉学科3年 金子由依

歯学部に入學してからあっという間に2年が経ち、今年の春から3年生になりました。そして驚くことに残り数日で前期を終えようとしています。この前まで、遊びの予定を立てたり、昨日のドラマがどうだったなど、たわいもない会話で賑わっていた講義室が、今では実習や就職のこと、国家試験についての会話が飛び交っています。時の流れの速さと就職の身近さに驚きが隠せません。

3年生になって、大きく変わったことと言えば、実習が増えたことです。2年生までは講義が中心で、相互実習が少しあるだけだったのに対し、幼稚園での歯科保健指導や病院実習、保健センターで保健指導を行う実習も控えています。3年生前期の中で特に印象に残っている出来事が幼稚園実習でした。この実習では、みんなで歯磨きの大切さがわかる劇や、クラス別に歯磨き指導を行いました。園児がどこまで理解でき、飽きずに楽しく取り組んでもらえるか考え、指導するのはとても難しく感じました。先生方にアドバイスをいただいて指導案やシナリオを何度も修正し、昼休みや放課後に練習することは大変でしたが、それと同時にみんなでより良いものを作ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。当日、園児が劇に反応してくれたり、「きれいに磨けた！」と口の中を見せてくれたりして、自分たちの指導が相手に良い影響を与えられることへの大きな達成感と喜びを感じることができたと思います。しかし、自分の言葉で説明したり指導することはやはり難しく、戸惑うことも多くて自分の力不足をひしひしと感じました。今回の経験を後期の病院実習や保健センター指導にも生かしていきたいと思っています。

また、3年生になり社会福祉士の資格を取るための福祉に関する講義も始まりました。早期技術演習では、特別養護老人ホームや障害者交流センター、障害者リハビリテーションセンター、児童相談所など実際に社会福祉士が働いている施設を見学しました。福祉に関する知識はほとんどない状態だったため不安でしたが、社会福祉士のイメージや講義だけでは分からない実際の現場の様子や雰囲気を感じ取ることができ、これから福祉について学ぶ意欲が高まりました。福祉の講義では年金制度や児童手当、生活保護など複雑で難しく、自分の知識のなさを感じずにはいられません。しかし最近では講義やPBLなどを通し、少しずつではありますが福祉の面白さを理解できるようになってきました。

大学生生活も折り返し地点を過ぎ、自分たちの将来に不安や焦り等様々な思いを抱えています。さらに4年生になれば病院での臨床実習や福祉現場実習、加えて特論や2つの国家試験など今よりもっと忙しくなります。しかし、今まで共に頑張ってきたみんなと個性豊かな編入生を加えた23人で乗り越えて、残りの大学生活を充実したものにしていきたいと思っています。



# 歯学部生の今

口腔生命福祉学科 4年 柿崎 麻友子

「歯学部生の今」というテーマのもと恐縮ながら書かせていただきます。私自身、締め切り間近まで追い込まれないと行動に移せない性格であるためこの原稿も締め切り当日の提出となりました。さらに今日はクラス全体での飲み会があるので時間に追われながら書いています。支離滅裂な文章になるとは思いますがご了承ください。

早いもので卒業まで1年を切り、国家試験までも半年ほどになりました。大学生を楽しまなければと謎の使命感に駆られています日々特論や実習に追われている日々です。実習は病院での臨床実習と福祉実習の2つがあり、臨床実習は早くも折り返しを迎えようとしています。思い返せば実習初日は不安と緊張でいっぱいでした。この環境から解放されたい一心でとにかく時間が過ぎるのを待っていましたが、時計を見ても針が少ししか動いていないことにショックを受け、また時計を見て…の繰り返しでした。今は「もうこんな時間か」と思うほど充実した実習ができています。まだうまくいかないことも多々ありますが、先生方や歯科衛生士や看護師をはじめとする病院のスタッフの方々にご指導をいただき、成長していると実感できるようになりました。本当に感謝しています。

そのような臨床実習が月曜日から木曜日という

こともあり私自身、木曜日は「花金」ならぬ「花木」となっています。一般的に花金とは休日の前日に心置きなくお酒を飲むことを指しますが、木曜日はとりあえず実習お疲れ様、ということで反省会がてら楽しんでいます。(金曜日に講義があります)その楽しみもあり、実習を頑張っているところもあります。

他の学部の同級生はほぼ就職活動が終わり、授業は週一回だけという話をよく聞きます。羨ましいと思うこともありますが、実習や講義があるおかげでクラスの友達と会って他愛もない話ができる日々が楽しいです。卒業まであと少しですが、みんなとの思い出をたくさん作っていこうと思います。



# 歯学部生の今

歯学科2年 小泉 瑠果

こんにちは！歯学部歯学科二年の小泉瑠果です。二年生になってからは、勉強においても部活動においても一年生の頃から一変しました。

勉強においては、ほとんどが専門科目となり、歯科に関係あることも少しずつ学んでいます。今、講義を受けているものは、CBTや国家試験にも出題される内容であるので、目の前にある試験だけに目を向けずに、CBTや国家試験など、将来的なことにも目を向けながら勉強するように心がけようと頑張っています。また、やはりそれぞれの教科において、勉強する範囲は膨大なので、毎日の予習・復習をコツコツとすることが大切であることが身に染みてわかりました。CBT、国家試験まではまだまだですが、今、勉強していることを長期記憶として覚えておくためには、「〇〇という現象・事象が起こるのは、△△という理由があるからである」という風に理論的に関連づけて覚えることが大事だと思うので、意識し

て勉強していきたいです。

部活動においては、後輩ができたことにより、後輩への指導をしたり、連絡等などの自分の仕事をしっかりと真っ当することなど、先輩としての自覚をしっかりと持つことが大事であることを感じています。私は弓道部に所属しています。一年生のときに比べて、技術面・実力面において大きく成長したと思います。しかし、まだまだ改善すべき点が多くあるので、先輩方からアドバイスをいただき、改善していけるようにますます努力していこうと思います。

このように、二年生になってからは環境の変化により、二年生になり始めの頃は慌ただしく物事に取り組んでいましたが、最近になってやっと慣れてくることができました。これから、更に勉強・部活動両方において忙しくも充実したものになってくると思うので、精一杯の努力をしていこうと思います。



# 歯学部生の今

歯学科2年 坂上莉奈

入学してから早くも一年が過ぎて、二年生として新たな生活が始まりました。二年生になってからは五十嵐キャンパスでの一年生の時とは生活が大きく変わりました。そのため、二年生になって約三か月が経ち、やっとこの生活に慣れたような気がします。また、一年生の時とは違い、専門的な分野を学ぶことが出来るため、毎日の授業がとても新鮮に感じられます。また、歯学部棟で見かける先輩方の姿にとっても良い刺激を受けています。

私にとって学年が変わり一番変化したと思う点は、勉強面です。専門性の高い講義が多くなり、とても興味深い反面、習得しなければならない事が多く、予習と復習に追われています。また講義中に、国家試験によく出題されるポイントなどを先生方に提示されると、将来受験する国家試験のことを考え、とても身が引き締まります。また、微生物学の授業では、歯科治療をする際に気をつけなければならないことや、少しでも間違ってしまったら患者さんの命さえ奪ってしまうことなどを勉強し、将来立派な歯科医師として患者さんを治療できるようになるためには現在の勉強に専念をし、たくさんの正確な知識を身につけなければならないと強く思いました。

また、個人的にとっても貴重な経験をさせていただいていると思う講義がいくつかあります。それは、骨学と歯学スタディスキルズⅡという講義です。はじめに、骨学という講義では、本物の人骨を使わせていただき勉強させていただいています。このような機会は、とても貴重だと思うので、毎回の講義をしっかりと身のあるようなものにするために予習などをしっかりとして実習に取り組んでいます。

そして、歯学スタディスキルズⅡというのは、一年生の際に行った歯学スタディスキルズⅠの続

きの講義になります。歯学スタディスキルズⅠでは、ExcelやWordなどのパソコンの基礎や、論理的な文の書き方を学びました。そして、二年生になってからの歯学スタディスキルズⅡでは、その得た知識を生かし、「現代社会と歯科医療」というテーマで個々に問題点を見つけ論文を書いています。この講義では、しっかりと自分の主張を軸とした文を作るために反論をもって来たり、データをもって来たりしなければなりません。クラスのみんなも毎回、試行錯誤して悩みながら文章を書いています。この講義で身につけた情報収集力や説得力などが、素晴らしい歯科医師になるために必要だと思うので毎回の授業を大切に、しっかりと取り組んでいきたいと思っています。

二年生では、歯科医学の基礎科目を学んでいるのですが、これはこれからの歯学の勉強の土台となると思うので知識としてしっかりと定着させ、将来に繋げていきたいと思っています。そのために日々の学習をより細かいところまで学んだり、わからない点は先生や友達に質問したりして貪欲に学んでいきたいです。

また、実は二年生になり勉強面以外にも変化した点があります。それは、クラスの団結です。二年生になって二年生の教室ができ、また、五名の編入生が新たなクラスの一員になりました。今までは教室がなかったのですが、教室ができたおかげか毎日顔を合わせて挨拶をするようになり今まであまり話さない人とも仲良くなる事が出来ました。また、五月の体育祭では一年生の時よりも、もっと強い団結力が生まれ最後まで楽しく過ごすことができました。そして、リレーでは一位をとることができ、本当に嬉しく良い思い出となりました。

また、最近テストがいくつかありましたが、仲間たちがいたから乗り越えられた面がいくつか

あります。わからないところを聞いたら快く教えてくれたり、一緒に勉強したりと一人ではできない勉強の仕方ができたと思います。また、朝早くから教室で勉強しているクラスメイトの姿や、授業後に図書館へ向かうクラスメイトの姿が、刺激となり私ももっと勉強しようという気持ちになりました。このような切磋琢磨し合うクラスですが、楽しい時は思い切りふざけるなどとても

盛り上がるクラスです。このクラスメイトたちと、これからも日々成長していきたいと思います。

また、いつも私たちに丁寧に講義をしてくださる先生方、見守ってくださる学務の皆様から心から感謝をこの場を借りてお伝えしたいと思います。

一生懸命多くのことを習得していこうと思っているのでこれからもよろしくお願いたします。





# 歯学部生の今

歯学科3年 田中雅之

はじめまして、歯学科3年生の田中雅之と申します。私たちは、2年生を無事に進級し、さらに、新しい仲間も加わって、3年生になりました。今現在、3年生は計49名おり、全ての学年において最も人数が多く、昼休みや実習など、クラスの賑わいが絶えず、非常に明るい学年です。そして、3年生の前期の授業も残すところ、あと2～3週間ほどで終わり、夏休みを迎えようとしています。3年前期を終えるにあたって、私個人の感想は、率直に勉学で多忙を極め、非常にあっという間だったということです。

勉学では、前々から、多くの先生方や先輩方が仰っていた通り、解剖学実習が多忙を極めております。解剖学実習は、その名の通り、ご献体を前に解剖を進めていく実習で、多くの倫理的な問題が飛び交う中で、私たちは、一生の中でも滅多に経験することのできない貴重な経験をさせて頂いております。この実習は、4月中旬頃から始まり、そこから毎週2回実施され、7月の下旬に終了する予定です。私たちは、この実習を受けるにあたって、2年次に解剖学の基礎知識を履修して

実習に臨んでおりますが、いざ実習が始まり、ご献体を前に解剖を進めていくと、私たちが、理解しているであろう基礎知識が二次元的なものに過ぎないことを痛感させられています。さらに、教科書的な要素のみならず、ご献体による個体差という要素が加わることで、三次元的なものに加えて、より複雑性が増しており、実習毎における予習や復習が絶えない日々が続いております。そして、この実習も残すところ数回となり、改めて、この実習に対して感謝の念を示したいと思っております。この実習に際して、私たちに、ご指導およびご教授して下さっている大島先生をはじめとする、多くの先生方や、解剖学実習へのご理解とご協力を了承して下さいのご遺族の方々への感謝の念、そして、ご献体に対して畏敬の念を常に心得て、残りの実習も望んでいきたいと思っております。

最後になりましたが、3年生の前期も残すところあと僅かですが、勉学や部活動において精一杯頑張っていきたいと思っております。

# 歯学部生の今

歯学科3年 島田奏子

3年生といえば解剖！というイメージが強いですが、そんな解剖学実習もそろそろ終わりを迎えます。実際の人の体から学ぶことは多く、このような貴重な機会をいただき、大変ありがたく感じています。ただ、3年生の前期の印象深い授業はそれだけではないので、私のお気に入りの授業をご紹介しますと思います。

まず早期臨床実習Ⅱです。この実習では、グループでそれぞれの科の見学をします。現場ではどのような治療が行われているのか、基礎と臨床がどう繋がっているのか、自分の目で見て学ぶことができました。1年生の早期臨床実習Ⅰでも同じような実習をし、あの時はあの時で「歯科医ってこんな仕事してるんだ」となかなかの衝撃を受けたのですが、3年生になり、微生物学や解剖学、組織学や生化学などを学び、ちょっと歯に詳しくなった今、同じ治療の現場を見ても、注目するところが変わりました。消毒薬は何を使ってるのかな、どんな材料で歯を詰めるのかな、歯周病のメ

カニズムってなんだっけ、などと考えながら見学をしました。習った知識が実際に使われていることを確認すると、勉強しておいて良かったなと少し安心します。次にコミュニケーション論Ⅱという英語の授業をご紹介します。これは約10人の生徒と外国人の先生1人が1つのグループになって、授業ごとに決められたテーマについて英語で話し合います。面白い先生が多いので、とても楽しく授業を受けることができています。

最近、他学部の同級生から、そろそろ就活始めるんだ、という話を聞いて、ああ、もうそんな年なんだなと、なんとも言えない気持ちになりました。私も2年半後には緑衣を着て病院に立つんだと想像してみると、あまりにも現実味がなくて、なんだか不安になってしまいます。とはいえ、2年半後は必ずやってくるので、その時に自分が困らないように、患者さんにより良い医療を提供できるように、とりあえず今学ぶべきことを丁寧に勉強しておこうと思います。



# 歯学部生の今

歯学科4年 野口雅史

6年間の学生生活も半分が終わりました。学年が上がるにつれて、時間の経過をととても早く感じます。2、3年生で学んだこともつい昨日覚えたような気もしますし、ずいぶん昔のことのような気もします。また、4年生になると、学年集会や講義の中でCBT、国試について聞く機会が増え、時に漠然とした不安に駆られながら日々過ごしています。

2、3年生の講義は基礎科目中心でしたが、3年後期からは臨床系の実習も始まり、現在は全部床義歯の実習を行っています。実習は全てが初めての経験であり、失敗を繰り返し、くじけそうになることもあります。失敗から学ぶこともたくさんあり、私にとってはとても充実した時間となっています。実習を通して感じることは、講義だけではイメージできず、理解しにくかったことも、実際に触れたり、作ったりすることで理解が深まるということです。講義や教科書で学んだ治療や製作の流れ、目的や用途などの知識が実習の中で点と点がつながるように理解することができます。ただし、実習を真の勉強の場とするには予

習が重要です。小学生のようなことを言うようですが、予習をしていかなければ、自分がやるべきことが何なのか分からず、実習に全くついていくことができません。自分が何をやっているのかわからないまま、失敗をしても何も学ぶことはできません。予習をすることで、臨床に上がるための技術やノウハウを頭と体に身に付けることができると感じています。

学生生活も折り返しを迎え、順調に進級出来れば、来年にはCBT、再来年には国試があります。今、学んでいることが結果に直結していきます。試験にパスすることが最終目標ではありませんが、一つずつステップをクリアしていくために、毎回の講義、実習で多くのことを学び、4年生の一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。

初めての執筆のため、ずいぶんまじめな文章になってしまいましたが、勉強漬けの5、6年で頭がおかしくならないように（笑）、バドミントン、ゴルフ、飲み会、勉強と同じくらいしっかり遊んでいます！



# 歯学部生の今

歯学科4年 井村真美

こんにちは。歯学科4年の井村真美です。今年の春休み、無事に進級できた私たちは歯学科6年間の折り返しを迎えました。まだ残り3年もあるのか、もう残り3年しかないのか、人によって捉え方は様々だと思いますが、今までの3年と比べて、これからの3年はより濃く大変な3年になってくることは間違いありません。

私たちの学年からカリキュラムが変わり、3年生の後期から実習がスタートしました。去年の後期はクラウンブリッジという、歯に入れる詰め物を作ったり、それを被せられる形に歯を形成する実習を、今年の前期は入れ歯を作る実習をしています。週に1回、朝の10時から夕方の4時まで、休み時間を返上してぶっ通しで行う実習。予習をして挑んでも、うまくいかず、予定内に終わらない実習に、気力も体力も削られていく一方です。時間内に終わらせることが大事だと頭では分かっているけど、せっかくなら綺麗に作りたいというこだわりと、その気持ちについていけない技術力のせいで、時間がいくらあっても足りません。知識不足のせいで、最終形態に影響する部分としない部分のの区別がついていないために、時間を余計に使ってしまっている気がします。

後期からはさらに実習が増え、今よりもっと忙しくなると思います。限られた時間の中で自分の納得いくものが作れるよう、技術と知識を磨いていこうと思います。

また、4年生は勉強だけでなく、部活でも幹部学年として重要な学年です。クラスでもたくさんの人が幹部として様々な部活を引っ張っています。私も、2つの部活に所属させていただいていますが、そのうちの1つ、NEXUSで幹部を務めさせていただくこととなりました。海外の歯学部への留学や、留学生の対応を行なっているNEXUSでは、今年もたくさんの留学生を迎える他、新たな取り組みとして医学部との活動も行うこととなりました。土台作りは大変だと思いますが、みんなで力を合わせて作っていきます。医歯学合同の軟式テニス部では、今年保険学科の同期が卒業します。新体制となる秋の大会では、後輩たちを引っ張っていけるような活躍を見せられるよう頑張っていきたいです。



# 歯学部生の今

歯学科5年 柏原佳来

新潟大学での5年目が始まりました。入学当時はあまり実感が湧きませんでした。実習に追われる日々を過ごしていると歯科医師になることに気が引き締まる思いがします。さて、「歯学部生の今」ということで学校生活のことについて書かせていただきます。

5年生で一番のウェイトを占めるのはやはり実習だと思います。一つ目が様々な疾患を再現した模型を使う総合模型実習です。口腔内を一単位として模型の疾患にどういった方法で、どういう順番で治療をしていくか計画を立て実習を行なっていきます。要領が悪く不器用なので苦戦することが多いですが、臨床実習に繋がる大事な実習なので気を引き締めて取り組みたいと思います。もう一つが各診療科を回るポリクリです。模型に対して実習もありますがクラスメイトとの相互実習も多く含まれています。治療説明や問診を相互にしたり、印象を取り合うなどをするのですが実際の患者さんに分かりやすい言葉を使う、患者さんに不快感を与えない様にするなど今までの実習ではあまり気をかけられていなかったことを実感しました。10月に始まる臨床実習に向け患者さんへの気配りを心がけていきたいです。

臨床実習前の8、9月にはCBT、OSCEがあります。今までに学んできた基礎から臨床までの集大成を試されるテストですが先生方からは8割切ると国試が怪しくなると脅されながら、時には

教室で友達と問題を出し合う、教え合うなどして知識を深めていっています。下らない話で盛り上がることも多々ありますが…

実習やテスト勉強で大変な5年生ですが部活が良い息抜きにもなっています。歯学部の硬式テニス部と医学科合同のダンス部に入っていてCBTの勉強が間に合わないと嘆きながらも週4で部活動を楽しませてもらっています笑。

5年生になり医局説明会などに行かせていただくことについて考えたりもしますがまずは目の前のCBT、OSCEそして臨床実習に向けて日々の実習、勉強に精進して取り組んでいきたいと思っています。



# 歯学部生の今

歯学科5年 米山実花

はじめまして。歯学科5年の米山実花です。

この原稿を書かせていただいているのは7月頃なので、5年生になってから約3か月経っております。あれ、もうこんな時期…そうです、1か月後にはCBTが迫っています。みんなで問題を出し合ったり、面白い語呂を言い合ったりと学校で勉強していると耳が2つだけでは追いつけないくらいの知識が飛び交っている日々です。お互いを支えあいながら、時には闘争心を燃やしながら頑張っております。

5年生で特徴的な授業は、やはり、総合模型実習とポリクリでしょうか。総合模型実習はこれまでの模型実習とは異なり、自分で治療内容を決めて進めてきます。なので、隣の人とやっていることも最終的な製作物も違います。手順が分からなくなって隣の人の顔を覗いてフムフムだなんてしてられません。実際に主治医になった気持ちで、身が引き締まります。また、ポリクリではグループごとに各科を周って課せられたミッションをこなしていきます。今までの実習はマネキンが相手で、実際の粘膜であったり、唾液であったりは体験することができませんでした。時には顔中印象材まみれにしてしまうことだってありました。一方で、ポリクリでは相互実習が多く、経験値がかなり上がります。マネキンの実習でも気を付けなくてはいいませんが、友人の顔を印象材まみれにすることなんてできません。器具の扱いに不慣れで

痛い思いをさせてしまうこともありますが、お互いにアドバイスし合って技術を習得しています。「ポリクリ大変ですか？」と後輩に聞かれることがあります。とても楽しいです。今までの実習ではできなかったこと、体験できなかったこと、知らなかったことが沢山あってわくわくします。

さて、私たち51期は「真面目で大人しい学年」と言われているようですが、この場を借りて訂正したいと思います。「コンビニ行く人」と誰かが声をかければ5、6人でぞろぞろと行くのは当たり前。お昼時間にはあちらこちらから笑い声が聞こえてきますし、実習中なんてたまに奇声が聞こえてきます。少し誇張してしまった部分もありますが、とにかく、楽しく、明るい学年です。このメンバーの一員でいられて本当に良かったと思いますし、これから先の苦難もみんなで乗り越えていきたいと思っています。



# 歯学部生の今

歯学科6年 川田里美

臨床実習も3分の2が終わり、私たち50期生もとうとう後輩への引き継ぎが見えてきました。

先輩から引き継いだときは、右も左も分からず、不安でたまらない毎日でした。友人たちと臨床実習ガイドブックを片手に、先輩から引き継いだ内容を確認し合ったことを、今でも鮮明に覚えています。毎日、臨床実習の夢を見るほどに緊張していました。

そんな私たちも、当初と比べると診療に慣れはじめ、以前より患者さんと向き合う余裕が出てきたように思います。以前は、診療手技やレポートの内容を相互に確認し合う事が多くありましたが、今は技工室内で治療方針や治療内容を相談し、検討し合う姿が見えるようになってきました。

技工室での毎日は、真面目に仕事をする半面、賑やかで笑いが絶えません。誰かが旅行や留学に行くと必ず、1番後ろの使用していない机の上にお土産を置いてくれます。診療や係でお世話になれば、お菓子の応酬があります。私たち50期はそうのように楽しく過ごしています。

臨床実習では、教科書だけでは学べないことが多く、新しい知識や技術を吸収しています。それと同時に、まだまだ未熟であり、立派な歯科医師となるには、より多くを学ばなければならないと感じます。特に、患者さんの主訴に対し検査結果から診断を下し、治療計画を立てる時に未熟さを強く感じます。

私が患者さんを診させて頂いて感じたことは、

臨床実習は、将来自分がどのような歯科医師になりたいのか想像し、そのために今何をすべきかを考える貴重な機会であるということです。

このような貴重な機会を与えて下さった、優しく広い心を持ち、私たちの実習に協力して下さる患者さんと、時に厳しく私たちをより良い歯科医師へと育てようと尽力して下さる先生方、この他にも関係する沢山の方々に感謝しています。

残りの臨床実習もその先の国家試験も、50期生全員で一致団結して臨み、全員で立派な歯科医師になりたいです。



# 歯学部生の今

歯学科6年 滝澤史雄

2014年に新潟大学に入学して最高学年になるまでであったという間でした。今、私達6年生は学部学生としての最後の夏を迎えています。「歯学部生の今」が今回のテーマということなので、現在佳境に入っている臨床実習について書かせて頂こうと思います。

5年生の秋から始まった臨床実習は新潟大学歯学総合病院で行われています。私達学生が主に行う事は患者様の治療及びそのアシスト、各専門診療科での実習、受付での患者様への対応、予診と呼ばれる初診患者様のご案内のお手伝いです。掲載させて頂いた写真は総合診療部の先生、研修医の先生の下でその予診を行っている場面になります。

様々な実習を行い、勉強させて頂いておりますがやはり大きなウェイトを占めるのは患者様の診療です。一口に診療といってもその内容は様々

で、歯磨き指導や虫歯治療から歯茎の治療、被せ物、入れ歯、抜歯に至るまで各診療科の先生のご指示のもとで治療をさせて頂いています。学生がここまで参加できる臨床実習は全国でも少なく、それは協力して下さっている患者様と各診療科の先生方、スタッフの方々のおかげです。実習期間も残り少なくなってきましたが恵まれた環境に日々感謝して過ごしたいと思います。

そんな最近周りのみんなが意識し始めているのが国家試験です。私達が受験する第113回歯科医師国家試験は来年の2月初めに行われます。毎日の実習と両立しながら少しずつ準備を進めていますが、今のペースではとても間に合う気がしませんが、去年受けた共用試験の対策を一緒にしていた仲間ともまた集まって勉強をし始めました。もうすぐ始まる学生最後の夏休みは勉強に明け暮れることになりそうです…。





## 歯と口の健康フェアを終えて

歯学科6年 大 藤 南々帆

2019年6月9日（日）に、イオンモール新潟南にて開催された、新潟市歯科医師会主催の「新潟市歯と口の健康フェア」に参加させていただきました。主催者以外の参加団体は、新潟市歯科技工士会、歯科衛生士会、新潟市薬剤師会、新潟県栄養士会、新潟市保健所、新潟大学歯学部、日本歯科大学新潟生命歯学部でした。

「健康づくりはお口から！」というテーマに基づき、各参加団体により無料歯科相談、歯磨き相談、技工物製作の実演、むし歯になりにくいおやつ の提案、口臭相談、肺年齢測定等、様々な企画が催されました。毎年来場者が多いと話には聞いていましたが、想像以上の来場者の多さに驚くとともに、皆様の歯への関心の高さを感じることができました。

本学からは、歯科麻酔科の田中裕先生と、歯学科6年生7名が参加しました。本学の企画の一つである「歯とお口の健康クイズ」においては、幼稚園生、小学生、そのご家族、毎年参加しているというリピーターの方、そして買い物ついでに偶然お寄りいただいた方など、老若男女問わず多数の皆様にご参加いただきました。

このクイズはご参加いただいた皆様に、歯に対する興味を持っていただくとともに、ご自分の歯を大事にしていだけるようになることが目的です。フェア開始直後から大変好評で、皆さまが真剣に参加してくださり、効果が高いイベントだったと感じています。出題を担当した私も、やりが

いと楽しみを感じることができました。また、ご来場いただいた皆様から、数多くのお礼の言葉や、来年も是非参加したい等の言葉をかけていただき、大変嬉しく思うとともに、有意義なイベントとなりました。

短い時間ではありましたが、今回のフェアへの参加により、疾病を未然に防ぐための啓蒙活動も、歯科医師の大切な職務の一つであることを実感しました。臨床実習では歯科治療ばかりに関心が行きがちですが、歯科知識や関心の向上による歯科疾患の予防に興味を持っていただくこと、疾患に陥る前に受診により歯の健康状態をチェックいただくことを働きかけることも大きな職務です。多くの方との会話や触れ合いにより、私自身の歯科医師の活動に対する視野も広がったと感じています。

来年も多くの皆様に来ていただき、一人でも多くの人が歯への興味をもっていただき、歯の大切さを知っていただきたいと思いました。そして、誰のために、そして何のために行動すべきかを、改めて考える良い機会となりました。今後、将来の進路を決定するうえでも、この経験は大きな意味を持つと思います。

今回のフェアにあたり、関係者の皆様に大変お世話になりましたことを、深く御礼申し上げます。参加させていただき、ありがとうございました。



## 水泳部

### 歯学科4年 新城 彩世

こんにちは。歯学部水泳部です。

現在部員は10名とかなり少ないですが、医学部水泳部さんと一緒に「旭町水泳部」として総勢62名で賑やかに活動しています。

つい先月（6月9日）は長野県の長野運動公園総合市民プールにて「第73回東日本医歯薬看護学生水泳競技大会」が行われ、私たちも参加してきました。本大会は部員全員で参加する唯一の大会とあって毎年一層気合を入れて臨みます。大会新記録が出るようなハイレベルなレースはもちろん、部員同士が同じレースで繰り広げる熱い戦いや、選抜メンバーによるリレーはやはり盛り上がりました。今年は個人で入賞した選手が数名、男子400mメドレーリレー5位、400mフリーリレー3位という結果を残すことができました。

温かくなってきた6月中旬からは外プールでの練習も始まり、歯学部はオールデンタルに向けて、医学部は北保体や東医体に向けて部員同士で切磋琢磨しながら日々練習を頑張っています。日焼けの話題が尽きない今日この頃ですが、夏の大会で選手がそれぞれ自己ベストを更新したり、目標を達成できるように残り1カ月さらに本腰を入れていきたいと思います。歯学部水泳部としては昨年のオールデンタルにて計3種目で入賞という結果でしたので、今年はそれ以上の結果を残すこ

とを目標に大会に臨みたいと思います。また、今年は鹿児島デンタルということで美味しいものをたくさん食することも忘れず、楽しんできたいと思います。

最後に、毎年お忙しい中水泳部の行事にご参加頂き、激励して下さる歯学部水泳部顧問の林孝文教授はじめ各学部の顧問の先生方、大会の応援に来て下さったり寄付金をして頂いたり水泳部を支えて下さっているOB・OGの先生方、日頃のご支援に感謝申し上げます。先生方のご期待に添えられますよう、プレイヤー・マネージャー一丸となって夏の大会に挑みたいと思います。これからも応援よろしくお願い致します！



# InDeVO部活動報告「歯磨きで世界を幸せに」

歯学科2年 林 幸穂

○InDeVOとは

InDeVOは、「歯磨きで世界を幸せに」をモットーに活動するボランティア団体です。ボランティアに興味がある学生が集い、2018年に発足しました。顧問の口腔生化学分野の照沼先生のもと現在では男子3名、女子22名の計25名で活動を行っています。InDeVOでは、以下の3つを団体理念として掲げています。

- ▶『歯の大切さを新潟から世界の子供たちへ』
- ▶『地域密着型ボランティアを通して多くの人に歯への興味を持ってもらう』
- ▶『国際的な視野から世界の齲蝕を見つめる』

○活動紹介

InDeVOでは、主に子供たちを対象とした予防歯科ボランティア活動を展開しています。昨年度は、は～もに～プロジェクトさんと合同で小学校ボランティアを行わせていただきました。加えて、海外ボランティア支援の準備や歯磨き推進ポスターの作成などを行い、多くの方に歯の大切さを知っていただけるような活動を行いました。

また、歯科の分野と他分野を融合させた新しいプロジェクトも展開しています。昨年度は、予防歯科に関するビジネスアイデアをコンテストで発表し、準優勝をいただくことができました。また、歯ブラシ会社TANABE様の工場を見学させていただき歯ブラシ制作について学ばせていただきました。さらに歯ブラシ会社three horns様から歯ブラシの寄付も賜りました。今後もより幅広い範囲で活動していきたいと考えています。

○普段の活動

InDeVOでは週に1度ミーティングを行い、今

後の活動についての意見のブラッシュアップやメンバー主体で歯の勉強を行っています。また、予防歯科学分野の葎原先生からもご支援を賜り活動を行わせていただいております。

InDeVOでは少人数のボランティア団体だからこそメンバー全員で楽しくプロジェクトを行うことを大切にしています。まだまだ未熟な学生である私たちがこのような活動を展開出来るのも様々な方々からのご支援のおかげです。日頃の感謝の気持ちとともに人として大きく成長することで、今後少しでも社会貢献していきたいと思っております。



## ● 歯学部運動会を終えて ●

運動会実行委員長 歯学科5年 今井千尋

令和という新しい年号が発表された4月、歯学部運動会にも新たな風を吹かせようと、運営5年生は立ち上がりました。歯学部生らしい運動会とはどのようなものなのか、考えに考えた結果…そうだ歯牙模型を使おう！という結論に至りました。例年、1番盛り上がる種目といっても過言ではない障害物・借り物リレーの内容を、「歯の鑑別」や「白衣に着替え、手袋装着」などに一部変更し、借り物のお題自体も歯科らしさを加えたものにしました。

運動会当日は、お日様に恵まれ最高の運動会日和となりました。開会式では、バドミントン部の後輩達が、キレのあるダンスを披露してくれました。バドミントン部は、今年初めて運動会主幹部活となったので、後輩たちに負担をかけてしまったと思いますが、ダンスのクオリティーの高さには本当に驚かされました。素敵な運動会の始まりを作ってくれたバドミントン部の後輩たちに感謝したいと思います。

競技に入り、始まる前はどうなるか不安であった障害物・借り物リレーも、多きなトラブルなし

に行うことができました。白衣を身にまとい、手には手袋をつけてゴールへと走ってくる走者の人たちはとても輝いていたと思います。また今年の運動会は、新しい種目内容を取り入れただけでなく復活させた種目もありました。現5年生が2年生だった時、記憶に残る負け方をした「綱引き」です。5年生同士で綱引きのコツを伝授しあった成果が実り、1位にはなれませんでした。みごと素晴らしい結果をおさめることができました。私は運営テントの中から応援していたのですが、一生懸命綱を引っ張るクラスメイトたちの勇敢な姿に、思わず涙が出ました。

私の運動会での一番の思い出は、今まで運動ができない学年として表彰されることがなかった5年生が総合優勝を果たしたことです。普段から何事にも一生懸命に取り組み、運動会運営を頑張った5年生に起こった奇跡的な出来事だったと思います。

最後に、参加して下さった先生方、学生の皆さんありがとうございました。来年もさらに素敵な運動会になることを期待しています。



## 大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野 目黒史也

2017年4月

果たして大学院を楽しめるだろうか。

期待と不安を抱えながら、私は大学院1年目の春を迎えていた。

2019年7月。

大学院生活も折り返し、3年目の夏がきた。今、私は2年前の春に抱いた疑念に自分なりの答えを見出している。

私が見出した答えが大学院としての本質なのであれば、この2年間で私個人としてはかなりポジティブな意味で裏切られたと言える。

ここではこの2年で感じた大学院の魅力について率直に私見を述べたいと思う。

この拙文が今大学院への進学を迷っている後輩たちにとって一つのモデルとして参考になるかどうかはわからないが、大学院進学を頭の隅の選択肢として保留する程度の力になれたなら幸いである。

結論から言って、大学院への進学は人生最良の選択の一つであった、と今の私は胸を張れる。

そう思える理由、つまり大学院という環境の魅力は大きく分けて2つある。

一つは『歯科医師としての成長』である。

一般に、卒後1～2年間の研修期間が歯科医師としての『助走期間』となる。裏を返せば、研修が終わった時点で我々は既に一歯科医師として先達に遅れを取らぬよう、一人前になることが求められるのである。

しかしながら、1～2年の臨床経験は、知識も経験も技術も上回る先輩方の前ではとても十分とは言えない。当然、研鑽し続ける必要がある。と

はいえ我々の職業は患者の命や健康な生活を担う医療職であり、成長過程だからと言って失敗が許される職業ではない。

そんな葛藤を抱える若手歯科医師（つまり今の私）にとって、指導医によって治療の手技や治療計画を確認してもらうことや第三者の視点から自身の成長を評価してもらえることが非常に重要であるように思う。更にいえば、症例数の限られた大学院生であればこそ、一つの症例を考え抜いて向き合うことができる。複数の先生から様々な意見をもらうことができ、結果として、決して多くはない担当症例からも数多くの学びがある。こうした丁寧な日々の積み重ねの中でこそ、我々はじつくりと、確実に成長していくことができるのではないだろうか。事実、歯周病科に所属する私の症例数はかなり限られたものだが、その症例を通して日々確実に進歩している実感があり、臨床医としての大学院生活に満足している。

2つ目の大きな魅力は『研究がとにかく楽しい』ということである。

1つ目に比べ、あまり万人に適応できるものではないが、個人的にはこの魅力だけでも大学院進学をする価値があると信じているため、少しお付き合いいただきたい。

私は卒後の進路を考えるに当たり、ひょんなことから基礎研究の世界に興味を持った（字数の関係上、詳細は割愛する）。当初はあやふやだった動機も研究の世界を知れば知るほど明確な意志となり、やがて決意と変わった。幸いにも、学部生時代から歯科薬理学講座で研究をさせていただくこととなり、その後紆余曲折を経て現在は歯科薬

理学講座に加えて、口腔解剖学分野の先生にもご指導をいただきながら研究を行っている。

では、私にとって研究の面白さとはなにか。

それは、誰もがもつ疑問や好奇心にとことん向き合い、考え抜き、実証し、解明するという一連のプロセスの面白さにある。平たく言えば、全部楽しいということだ。私は実験結果をまとめながら、自分なりの仮説を考え、次の実験計画を立てている時間が至福の一時である。研究指導の先生とディスカッションをしている時間には、脳が音を立てて駆動している感覚に陥り、楽しい。初めて見る実験結果を確認するときの高揚感もたまらなく楽しい。その事象を解明するのは、自分が世界で初めてかも知れないというロマンには心が躍る。これ以上に面白いものが一体どこにあるというのだろうか。

とはいえ、研究を好きになれるかどうかは、自分の研究テーマにどれだけの好奇心を持てるかに

よって左右されるところも大きい。大学院を志す後輩たちには、大学院に入る前に、是非とも自分の興味関心の『琴線』を探ってみてほしい。探る方法は何でもいい。琴線に触れた研究は毎日を豊かにしてくれる。

私は大学院進学という選択肢を当時提示してくれた先生、研究の世界を教えてくれた先生、そして、現在指導して下さっている先生に心から感謝している。これまでの人生のどんなタイミングよりも、今の環境が私のいるべき環境なのだと思うからだ。

当然、楽しい分だけ辛いこともある。そんなとき励ましあえる仲間にも、私は恵まれた。

もし、今大学院進学を考えている後輩がこれを読んでいてくれたら、声を大にしてこう伝えたい。

君の選択は間違っていない。大学院は楽しい、と。



# 大学院へ行こう

小児歯科学分野 鈴木 絢子

私は秋入学の大学院生のため、今年の9月で卒業となります。

私が大学院への進学を決意したのは小児歯科学分野に入局後でした。当時は研究よりも臨床に興味があり、大学院に進む道は考えていませんでしたが、入局後に、「研究」とはどういったことをするのか、人生で一度は経験しても良いかもしれない」という、好奇心により、秋入学での大学院進学を決めました。

私は、臨床では小児・障がい者歯科を専門としましたが、研究内容としては生体組織再生工学分野で再生医療に関する研究を行うことにしました。

基礎系での研究は、最初は右も左も分からない初心者でした。大学生の頃、授業で習う基礎系分野は難しいイメージが強く、少し苦手意識がありました。研究を始めた当初は、出来ないことや分からないことがたくさんありすぎて、不安の方が大きかったかもしれません。しかし、泉教授をはじめ、先輩の先生方から丁寧に教えていただき、3か月～半年程度で細胞培養や実験に必要な手技習得し、実験をスタートすることが出来ました。

そこからは、実験の楽しさが徐々に芽生えてきました。私の研究テーマは再生医療に役立つような新しい移植材を開発するというもので、他大学や企業と共同で研究を進めていきました。新しい移植材を開発する、という一つの目標に向かい、普段は異分野の研究者達が集まることで、思いもよらない発想や知恵が出てくることも多々ありました。共同研究者の熱い想いや研究に没頭している姿をみて、憧憬を抱くと共に、研究チームの一人としての責務を果たすことへの使命感が生まれました。研究途中では、結果が思うようにならない日々もありましたが、その結果を踏まえた上

で、さらなる改良につながったこともありました。

再生医療の学会発表では、私の研究で扱う材料や研究に関して関心を持ってもらうことも多く、製品化を待ち望んでいる方がいることにも気づきました。その後は、製品化され世に出た時に、多くの救われる患者さんがいることを思い描くことで、さらに研究へのやる気が強まりました。現在は、大量生産化も視野に入れて、製品化を目指し研究を進めています。

臨床の現場で患者さんとface to faceで向き合い、治療を行うことに比べたら、医学研究は間接的になりますが、もしかしたら臨床以上に多くの患者さんを救うことのできる仕事かもしれません。

大学院生の4年間では、アクティブな経験ができ、視野が広がる良い機会です。私は、企業や他大学の方との交流もあったので、異業種との連携や産官学について考える機会があり、そこから、特許申請を行うこともできました。そして、海外での学会発表や留学生との交流で、苦手だった英語も少しは克服できた気がします。もちろん、歯科医師として臨床で治療も行っていましたし、プライベートでは大学院生中に結婚もしました。

歯学部卒業後は、人生の岐路に立つ時期かもしれませんが、大学院生は意外となんでもできます。そして、いろいろなことを挑戦することで、人としての深さも養えます。

楽しそうな方へ、興味がある方へ進むのが自身にとって正しい道だと思います。何か興味がわくものがあれば、まずはやってみてから考えても遅くはないと思います。

人生に一度は、研究を行ってみるのも、良い経験になるかもしれませんよ。





# 大学院という選択～ステップアップのために～

う蝕学分野 鈴木 裕 希

この原稿のテーマの通り、私は大学院への進学をお勧めしたいと思います。4年間の大学院への進学はなかなか勇気のいる決断かもしれませんが、今進路に悩んでいる学生や研修医のみなさんに参考になれば幸いです。

私は大学院を機に、う蝕学分野（歯の診療科）に入局し、早いもので3年が経ちます。大学院としてもまとめの時期となりました。振り返ってみると、実際は学部を卒業して研修医になるまで大学院という選択肢はありませんでした。なぜ大学院進学を決めたかという、研修医時代に進路で悩んでいたときに、学生時代にお世話になった当科の先生から、一緒に研究もしてみないかと声をかけていただいたことがきっかけでした。う蝕学分野を選択した理由は、元々保存修復分野に興味があったこと、研修医時代に根管治療の難しさを感じもっと勉強して根管治療が上手になりたいと思ったことでした。

大学院生活で印象に残っていることは、やはり学会発表でしょうか。私の研究テーマは口腔内バイオフィルムで、いわゆる歯垢、プラークといったものを扱っています。このバイオフィルムは水と細菌が付着できる足場さえあればどこにでも存在できるという性質上、医学系のみならず、農学系、工学系分野でも数多く研究されています。実際に私は、“日本バイオフィルム学会学術集会”という学会にて発表をさせていただきました。発表はとても緊張しましたが、自分の研究に対して多方面から貴重な意見やアドバイスをいただき、今後の研究に大いに活かすことができました。また、普段なかなか関わることの少ない歯科以外の分野の研究者の方とも交流することができ、人間性の幅、視野が広がったと実感しております。若

いうちに学会発表を通してこのような貴重な経験ができるのも、大学院生ならではの醍醐味だと思います。

とは言っても、大学院に入って研究をすると開業医で働いている同期生と比べて、臨床に遅れを取ってしまうのではないかとという危惧が頭につきまといまいます。でも視点を変えれば、研究で培った、情報の取捨選択、問題解決能力、論理的思考が臨床の場でも大いに役立ってくると思います。また臨床では常に、早くて確かな治療が求められると思いますが、まだ歯科医師として経験年数の浅い今だからこそ、大学で一つ一つの症例をしっかり考えながらEvidence Based Medicineを実行していくことが大切なのではないかと考えます。

日々の臨床と細菌に振り回される研究で忙しくも充実した日々を送っています。辛いときもありますが、大学院でのこの経験はいつか必ず自分の糧となり、ステップアップの土台となってくれることは間違いないと確信しております。みなさんもぜひ大学院で将来の飛躍のための自分磨きはいかがでしょう。



福岡県久留米市で行われた日本バイオフィルム学会にて

# 大学院へ行こう

組織再建口腔外科学分野 竹内涼子

私は、組織再建口腔外科学分野に所属する大学院4年の竹内涼子と申します。院4年目になった今、改めて振り返ると入学前に想像していた生活とは中身も長さも随分違うものだなあと感じています。ここでは大学院に入るきっかけや現在までの生活について少しお話をさせていただきます。

大学院に入ろうと思ったのは、卒後研修後半の時で最初から決めていたわけではありませんでした。東京の病院で研修をしていましたが、いざ大学を離れてみると母校の存在の大きさを強く感じるようになり、大学に所属することでお世話になった母校に恩返しする機会があるのではないかと考えたことがきっかけです。また臨床の毎日が続く中で、何か目標を持って取り組める環境に身を置きたいと思い、学位取得のために博士課程に進学しました。分野としては、大学病院だからこそ経験できる口腔外科領域の疾患を学びたいことから口腔外科を選択しました。

組織再建口腔外科での大学院生活（私の場合）について紹介します。当分野での1年目は臨床漬けの日々で、外来、病棟、手術、歯科麻酔科での研修を経験しました。1年間で実際にできるようになるのは小手術程度ですが、指導医の先生方とともに口腔外科領域の様々な疾患に触れることができ、1年を通して刺激のある日々を過ごせました。2年目からは学位研究へと進んでいきますが、私の場合は歯学部より短期留学の機会を与えていただき、アメリカ国立衛生研究所（NIH: National Institutes of Health）にて約3か月間勉強させていただきました。ラボの先生方の熱心なご指導のもと手を動かす毎日がとても新鮮でした。知識が追い付いてきたのは後になってからですが、研究におけるものの見方や姿勢を学び、かけがえのない充実した経験となりました。そして

帰国後、2年次後半からいよいよ学位研究が始まりました。3年目はラットを用いた動物実験が続く、紆余曲折しながらも少しずつデータが集まっていく成果にやりがいを感じながら、なんとか4年目の今日にいたります。また当分野は臨床の科ですので、研究をしながらも外来や小手術など臨床を学び続けることができることが魅力の一つです。一方で、研究においては自前の設備が至らないところもあるため、他分野の先生方に沢山の知恵やご協力をいただいて実験をおこなってきました。他分野との交流があると、新しい発見や学びが多く日々の生活にも刺激を与えてくれます。さらに、研究が進めば学会発表の機会もいただけます。これまで国内外での発表を何度か経験させていただきましたが、発表する機会があることは一つの目標となって研究生活にメリハリがつかみずし、大学で研究する醍醐味であると思います。

大学院は学生と社会人のどちらの一面も持ち合わせており、自分次第で色付けできる部分が多いものと感じます。私自身大学院に入って良かったと思いますし、これを一つのステップとした卒後の生活も楽しみです。ぜひ一緒に大学院で学びましょう。



# 学会受賞報告

日本小児歯科学会 町田賞優秀論文賞

## 日本小児歯科学会 町田賞優秀論文賞を受賞して

小児歯科学分野 中 島 努

この度、Pediatric Dental Journalに掲載されました「Reconsidering the treatment plan for traumatized teeth - a case of lateral luxation with severe displacement -」が2019年6月に開催されました第57回日本小児歯科学会大会および総会におきまして、町田賞優秀論文賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。

町田賞は、元東京歯科大学教授町田幸雄先生の日本小児歯科学会へのご寄付を原資に平成26年度に新設された賞です。小児歯科における咬合誘導に関する臨床研究の推進、発展を願われた町田先生のご意思が込められた賞であり、受賞させていただいたことを名誉に感じております。

本論文は、外傷を受けた乳歯に対し、咬合誘導を行った症例報告です。

乳歯では外傷による重度の側方脱臼症例において「抜歯が第一選択である」とThe International Association of Dental Traumatologyのガイドラインに記されています。しかし、咬合の維持、審美性、歯列弓の成長、そして乳歯喪失に起因する悪習癖の防止のため、外傷歯であったとしても患歯が正常な成長発育を阻害しない限りにおいて乳歯の保存治療を試みることは、小児の咬合管理を行う上で意義は高いと考えられます。本論文では下顎左側乳犬歯側方脱臼により、咬合異常を示していた患児において、

動的咬合誘導を併用し歯の保存を行い、良好な経過が得られたため論文報告をさせていただきました。

末筆ではございますが、本論文の作成にあたり、ご指導いただきました小児歯科学分野の早崎治明教授、齊藤一誠准教授をはじめご指導いただきました当分野の先生方に心から厚く御礼申し上げます。



## 日本医学シミュレーション学会 優秀論文賞を受賞して

歯科麻酔学分野 岸本直隆

この度、2019年1月12、13日に大阪医科大学で開催されました第14回日本医学シミュレーション学会学術集会にて、優秀論文賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。この賞は国内施設で行われた医学シミュレーションに関する研究で、申請時から過去3年以内に出版された論文に対し、日本医学シミュレーション学会から授与されるものです。受賞論文のタイトルは「Simulation training for medical emergencies in the dental setting using an inexpensive software application. (Kishimoto N et al. Eur J Dent Educ. 2018;22:e350-e357.)」で、歯科治療時の全身的偶発症（血管迷走神経反射、アナフィラキシー）対応シミュレーションコースを開発し、その短期的な教育効果を評価した研究です。これまで歯科治療時の偶発症対応に関する論文報告はいくつかありましたが、いずれも高価なシミュレーターやロボット患者を使用しており、その購入や開発に費用がかかる事が問題でした。われわれのコースでは、iPhone/iPad用アプリ「SimMon」を利用することで、スマホがあれば簡単かつ安価に患者のバイタルサインをシミュレートすることが可能となりました。費用を抑えて、教育効果の高いコースが開催できれば、広く受講機会を提供することへつながり、患者急変時に適切に対応できる歯科医療従事者が増えることが期待されます。今回、本研究の独創性、および意義を評価していただき、受賞へつながったことを大変光栄に思っております。

私は2012年より歯科麻酔に関するstudy group「AneStem（アネステム）」を立ち上げ、歯科医療従事者へ向けたバイタルサイン、全身的偶発症など患者全身管理に関する教育活動を行ってまいりました。この研究もAneStemの活動の一環であり、今後は長期的な教育効果について調査していきたいと考えております。

最後になりましたが、研究、論文作成へ協力して頂いた前勤務先である大阪医科大学の先生方、優秀論文賞へ推薦して頂いた歯科麻酔学分野教授・瀬尾憲司先生にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。



右は筆者、左は日本医学シミュレーション学会・副理事長 野村岳志先生

## 日本補綴歯科学会 奨励論文賞を受賞して

生体歯科補綴学分野 冠ブリッジ診療科 井田 貴子

この度、私達の論文、“Extracellular matrix with defective collagen cross-linking affects the differentiation of bone cells. PLoS One. 2018;13 (9):e0204306.” が、平成30年度日本補綴歯科学会 奨励論文賞を受賞し、2019年5月10日北海道札幌市で開催された同学会第128回学術大会にて表彰を受けましたのでご報告致します。

本論文は、骨のコラーゲン架橋に注目し、その変化が骨代謝に関わる細胞活性に及ぼす影響について報告したものです。骨の有機成分の90%以上はI型コラーゲンが占めていますが、その安定性に寄与するのが分子間架橋構造であるコラーゲン・クロスリンクです。クロスリンクは骨質（骨密度以外の、骨の機械的強度に影響を与える因子）を規定するだけでなく骨代謝にも影響を与える因子としての可能性が示唆されています。しかしながら、クロスリンクが骨関連細胞にどのような影響を与えるかについての詳細な検討はこれまでされていませんでした。そこで本研究では、クロスリンク阻害剤を用いて、クロスリンクの変化が骨代謝に関わる細胞の分化に及ぼす影響を解析したところ、クロスリンクを起点とした細胞活性制御メカニズムの存在が示唆されました。従来、骨の評価は骨密度によるものがほとんどでしたが、骨質の一因子であるクロスリンクに着目した本研究の新規性を評価して頂けたことが受賞に繋

がったのではないかと考えております。骨基質の違いに起因する、局所的な骨代謝動態を理解することは、インプラント治療を始めとして、補綴歯科治療の予後を予測する上でも重要な情報となることが期待されます。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、魚島勝美教授、加来賢准教授をはじめ、本研究にご協力頂きました先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また、今回はコラーゲン架橋における研究で実績のある、ノースカロライナ大学の山内三男先生にも共同研究としてご指導いただきました。重ねて御礼申し上げます。



## 第57回 日本小児歯科学会大会優秀発表賞を受賞して

小児歯科学分野 大 島 邦 子

このたび、2019年6月に札幌にて開催されました第57回日本小児歯科学会大会におきまして、「歯根切除が歯の再植・移植後の歯髄歯根膜治癒過程に及ぼす影響について」と題した発表で、優秀発表賞を受賞致しました。

小児歯科臨床では外傷処置の頻度が高く、その長い予後を考えると苦慮することが多いのが現状です。中でも永久歯の完全脱臼ではできるだけ再植を試みますが、根未完成歯では歯髄再生が期待されるのに対し、根完成歯ではその可能性が低いことが知られています。そこで今回、歯根が完成しているマウスを用い、根尖をカットする手法に再植/他家移植の実験を組み合わせることで歯髄の治癒を検索したところ、歯根切除が早期に血行を回復し、歯髄幹細胞の維持および象牙質形成に促進的に働くことを明らかにしました。

多くの素晴らしい基礎研究の中から選んで頂いたことを励みに、今後も臨床の視点を忘れずに基礎研究を進めてまいりたいと思います。



表彰式にて日本小児歯科学会理事長とともに

## 日本小児歯科学会 学会優秀発表賞受賞のご報告

小児歯科学分野 野 上 有紀子

この度、2019年6月に開催されました第57回日本小児歯科学会大会におきまして「小児の口唇閉鎖力のトレーニング効果に影響を与える因子」という演題にて、優秀発表賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。

昨年の歯科診療報酬の改定により、新病名「口腔機能発達不全症」に対して小児の口腔機能管理加算が保険導入されました。小児期の臨床においては、「ハビリテーション」という概念が重要で、

今後は、診断のための定量的な検査や機能訓練に対するエビデンスが必要となります。そこで私共は、口腔周囲筋のトレーニング実施により口唇閉鎖力が増加するか、およびその影響因子について検討を行い、本大会で報告いたしました。

最後に、発表に際しご指導くださいました早崎治明教授、齊藤一誠准教授、共同演者の先生方、医局の先生方、調査にご協力いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

## 第57回日本小児歯科学会大会優秀発表賞受賞報告

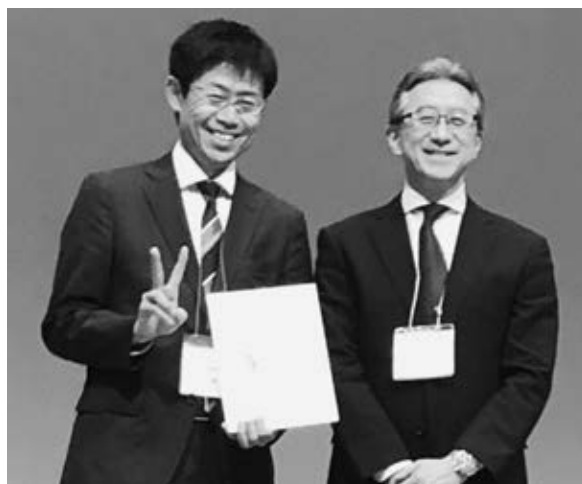
小児歯科学分野 准教授 齊藤 一誠

発表演題名：ヒト乳歯由来歯髄細胞における繰り返し  
の初期化因子遺伝子導入はiPS細胞形成能  
を増強した多能性中間細胞を生成する

平成30年度日本小児歯科学会大会および総会に  
て、優秀発表賞を受賞しましたのでご報告いたし  
ます。

我々の研究グループでは、永久歯への交換によ  
り脱落した乳歯の歯髄細胞を、全身の様々な組織  
などへ応用する再生医療研究を展開しています。  
今回の発表では、歯髄細胞を全身へ応用するた  
めに最も重要な細胞のリプログラミング（RPG）  
の過程において、iPS化に抵抗性を示す歯髄細胞  
に初期化因子を繰り返し遺伝子導入することで、  
部分的なRPGが生じ、最終的にiPS細胞が樹立  
ができることを証明しました。また、RPGの過  
程で多分化能、抗造腫瘍性を持つ組織特異的幹細  
胞特性を有する中間細胞が存在することを示し、

induced tissue-specific stem cell-D  
（iTSC-D）と命名しました。このiTSC-Dは口腔  
組織だけでなく骨や神経への再生研究に非常に有  
用な細胞で、今後の研究の発展が大いに期待でき  
ると考えています。



写真左が本人



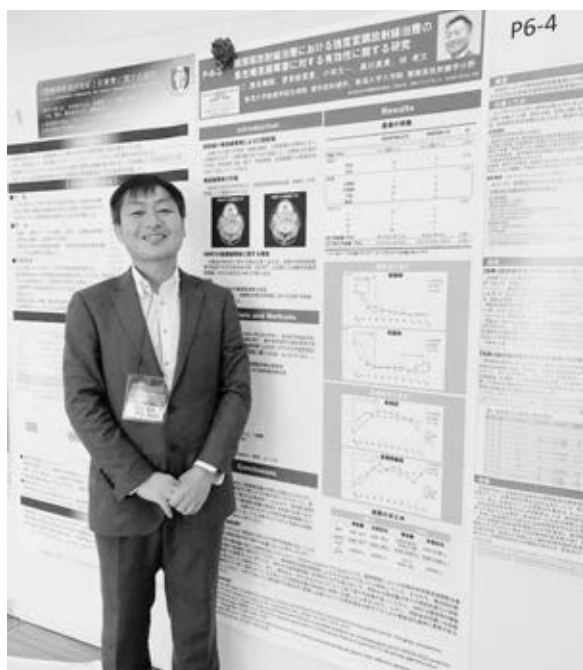
## 日本口腔腫瘍学会 優秀ポスター賞 受賞報告

顎顔面放射線学分野 勝 良 剛 詞

日本口腔腫瘍学会は口腔腫瘍の診断・治療・支持療法を発展させることを目的とした学会で、歯科放射線科だけでなく様々な分野の先生が参加されています。演題名は、「頭頸部放射線治療における強度変調放射線治療の急性唾液腺障害に対する有効性に関する研究」で、きっかけはある研究会で耳にした「強度変調放射線治療（IMRT）によって放射線唾液腺障害は解決した」でした。IMRTにより治療中の唾液腺障害は改善されていないと感じていたため、この発言の疑問からです。治療中の口腔乾燥は患者QOLを下げただけでなく治療成績も低下させます。文献検索しても疑問を解決できず、実際にどうか明らかにするため研究を開始しました。結果は私の実感どおりIMRTは急性唾液腺障害に寄与しないことがわかりましたので、IMRTでも治療中の口腔乾燥対策は必須であると強調し報告しました。その後、耳下腺線量と唾液機能との関係を検討し、治療中と後で唾液腺障害の機序が異なることが示唆されたため、サンフランシスコで追加報告しました。

研究を通して感じたことは、患者を真面目に診ること・疑問への探求・医療者間の輪の大切さです。これらは、この記事を読んでいる全ての人に伝えたいです。

最後に、ご指導頂きました林教授、データ解析に協力頂きました放射線治療科の棚邊先生、データ収集に協力してくれた医局の先生に心から感謝申し上げます。



受賞ポスターの前で笑顔の筆者



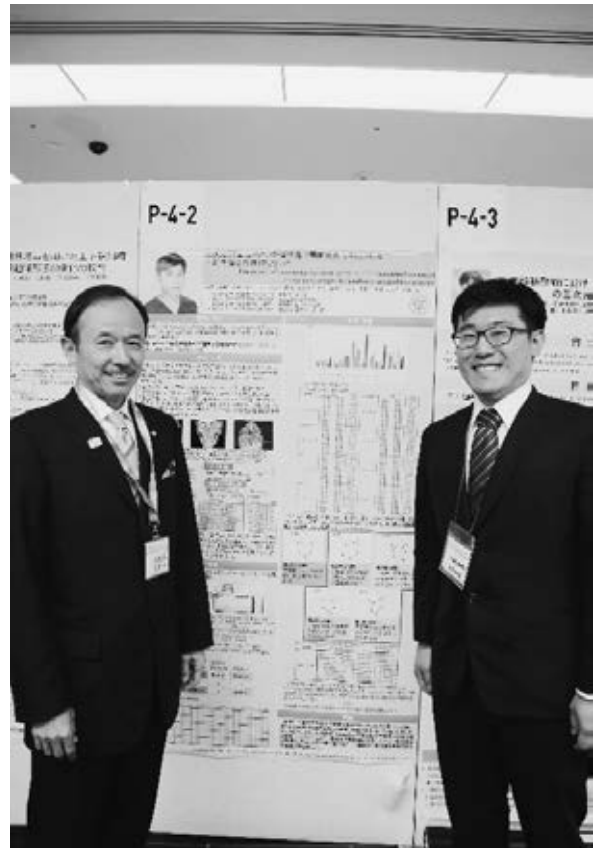
MASCC/ISOOの発表にて質問に答える筆者

## 日本顎変形症学会総会・学術大会 優秀ポスター賞受賞報告

歯科矯正学分野 大澤 知朗

この度、第29回日本顎変形症学会総会・学術大会において、優秀ポスター賞を受賞致しましたので、ご報告致します。演題名は「三次元CT画像を用いた骨格性下顎前突症患者における下顎骨偏位の様相について」です。骨格性下顎前突症患者の下顎骨偏位の指標に、Meが用いられてきたが、下顎骨の偏位様相は多様性に富み、Meでは評価困難な偏位があるのではと考え、本研究を立案しました。結果は、対象の約半数に下顎骨形態、下顎頭の付着位置に何らかの非対称を認め、またMeの水平偏位量は下顎骨形態と相関するが、下顎頭の付着位置との間に相関を認めず、偏位の指標に下顎頭の付着位置も有用である可能性が示唆されました。今回の受賞を励みに、臨床・研究に精進したいと思います。

最後となりますが、ご指導を賜りました齋藤功教授、高木律男教授、小林正治教授、西山秀昌先生、丹原惇先生、高橋功次朗先生、ご意見を頂きました先生方に心よりお礼申し上げます。



## 第77回 日本矯正歯科学会学術大会優秀発表賞 受賞報告

歯科矯正学分野 坂 上 馨

この度、第77回日本矯正歯科学会学術大会において発表しました、「骨格性下顎前突症患者の顎矯正手術後における嚙下時舌圧発現様相の分析」が優秀発表賞を受賞致しました。私は過去の論文で、顎矯正手術前の骨格性下顎前突症患者における嚙下時舌動態の解析を行い発表しました。本研究はその継続研究であり、顎矯正手術後の新たな顎顔面形態に口腔機能が適応変化をする傾向にあるのかを目的として検索しました。結果として、舌動態は適応変化をしており正常咬合者と近似し

た動きを示しましたが、正常咬合者と同等のレベルには達していないことが明らかとなりました。今後はこの結果をもとに、「形態と機能の適応」を目的に顎矯正手術後患者に対する新規筋機能療法の確立を検索し、研究成果を様々な場で発表できたらと考えています。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、小野高裕教授、堀一浩准教授に心から厚く御礼申し上げます。

## 第77回日本矯正歯科学会・学術大会 優秀発表賞を受賞して

歯科矯正学分野 阿 部 遼

この度、2018年10月に横浜で開催された第77回日本矯正歯科学会・学術大会にて優秀発表賞を受賞致しましたので、ご報告致します。

演題名は『超音波診断装置を用いた骨格性下顎前突症患者の嚙下時舌運動様相の検討』で、口演発表させていただきました。

本研究では、骨格性下顎前突症患者と個性正常咬合者を対象とし、超音波診断装置を用い、ゼリー嚙下時の舌運動様相を測定し比較検討しました。その結果、骨格性下顎前突症患者では、上下顎骨の形態的不調和により舌全体を口蓋へと挙上させることに時間がかかり、さらに舌周縁部における特徴的な上下動を示す波形と嚙下時間の延長が生じていることが示唆されました。今後は、術後における舌運動様相がどのように変化していく

かを調べていきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、林孝文教授、坂上馨先生、小林太一先生、ご意見をくださいました歯科矯正学分野の先生方に心よりお礼申し上げます。



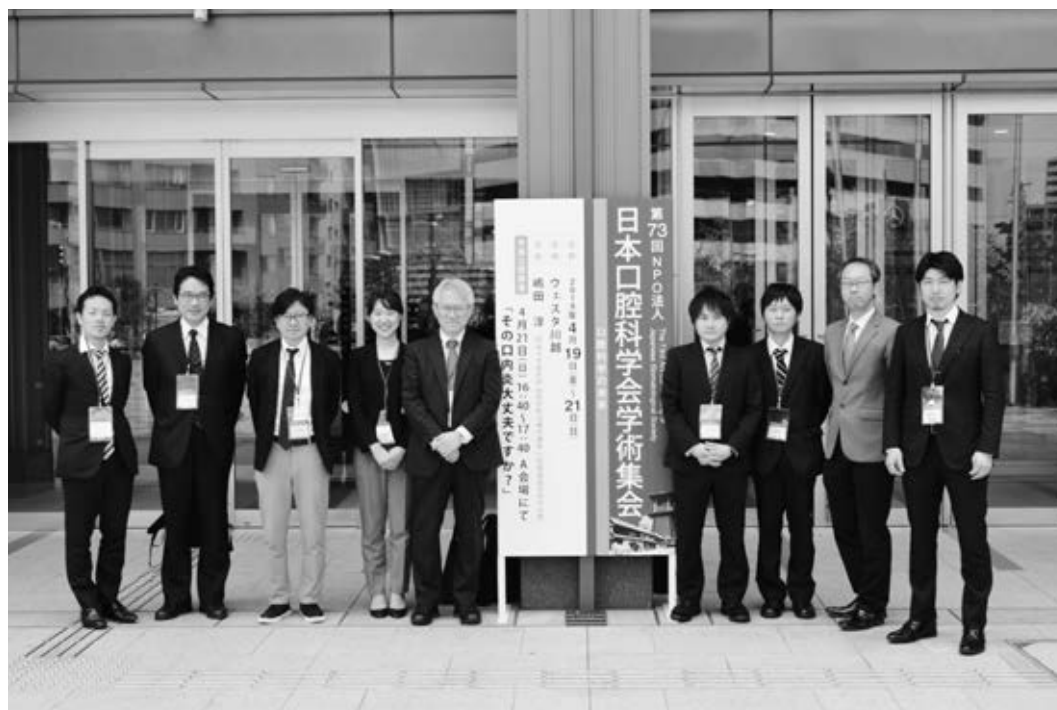
## 第73回 日本口腔科学会学会賞 優秀ポスター賞 受賞報告

顎顔面口腔外科学分野 永井孝宏

2019年4月、埼玉川越で開催された第73回 NPO法人日本口腔科学会学術集会で受賞致しましたので、この場を借りて御報告致します。演題名は「下顎形成におけるmicroRNAの役割」です。顔面形成におけるmicroRNAの研究は大学院から継続しているテーマで、今回の発表は下顎の形成に注目し、形態学および分子生物学的検索を行いました。Dicer (microRNAが精製される際に働く酵素) が欠損することで、下顎の正中の形成が抑制 (ヒトで稀に認める下唇裂の様な形態) され、その結果、下顎正中のPtch1の発現

を抑えることでShhシグナルが活性化され、正常な正中形成を誘導している可能性を導きました。

今回の研究発表を行うに際し、大学院時代から引き続き、口腔解剖学分野の大峽教授をはじめ医局員の皆様の御指導の末、口腔外科系学会基礎分野で評価を頂き受賞に至りました。顎顔面領域における先天性疾患は、口腔外科の臨床現場で遭遇する場面は少なくありません。遺伝学的研究を継続し、今後さらなる知見を得ることができればと考えています。



学会会場前、集合写真 (筆者は右から4番目)

# 新潟歯学会報告

## 平成31年度 第52回新潟歯学会総会報告

平成31年度新潟歯学会集会幹事  
顎顔面口腔外科学分野

永田昌毅

平成31年度（令和元年度）新潟歯学会の集会係は本年度も顎顔面口腔外科学分野が担当させていただいております。

平成31年4月13日（土）に第52回新潟歯学会総会を例年通り歯学部講堂にて開催いたしました。10時20分からの総会議事では、平成30年度の会計決算報告および会計監査報告が行われ、続いて今年度（平成31年：当時）の事業計画案ならびに予算案が承認されました。福島正義先生が名誉会員として承認され、同会員証が授与されました。新潟歯学会賞は微生物感染症学分野の永井康介先生に、新潟歯学会奨励賞がう蝕学分野の長谷川泰輔先生にそれぞれ授与されました。総会議事に続き11時から6題の一般演題の発表が行われ、活発に討論がなされました。午後に行われた特別講演は生体組織再生工学分野の泉健次教授のご推薦により、国立研究開発法人理化学研究所 生命機能科学研究センター 器官誘導研究チーム チームリーダー 辻孝先生を講師にお迎えし、「次世代器官再生としての口腔器官の機能再生を目指して」と題する再生医療の基礎的、臨床応用にむけた興味深いご講演をいただきました。

本年度の参加総数は100人近くに及び、座長をしていただいた先生方をはじめ演者の方々、学内外から参加をいただいた会員の皆様のご協力により、第52回新潟歯学会総会を無事に終了できましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください (<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)。令和

元年度第2回例会は11月9日（土）に同じく歯学部講堂で開催予定です。令和元年度の新潟歯学会賞の応募締め切りは令和2年3月末の予定です。で奮ってご応募ください。

一、議長選出	議長
一、開会の辞および会頭挨拶	会頭
一、報告事項	会務幹事
会計報告	会計幹事
平成30年度会計決算報告	会計幹事
平成31年度会計監査報告	会計監事
一、議事	庶務幹事
平成31年度事業計画案	庶務幹事
平成31年度予算案	庶務幹事
一、名誉会員の承認	会計幹事
一、名誉会員証授与	庶務幹事
一、新潟歯学会賞の授与	会頭
一、新潟歯学会奨励賞の授与	会頭
一、閉会の辞	准議幹事

写真1 第52回新潟歯学会総会 次第



写真2 微生物感染症学分野  
永井康介先生 新潟歯学会賞授与



写真3 会場風景

# 研修医プログラムを修了して

## 研修医プログラムを経験して

予防歯科学分野 田村浩平

私は新潟大学歯学科48期で卒後2年目の現在、新潟大学予防歯科学分野にて大学院生として1年目、研究調査や地域活動、予防歯科外来、一般開業医院や病院歯科でのアルバイトなど、もがきながらも充実した日々を過ごしています。とはいえほぼほぼもがいていますが、そのような時の助けとなるのは、上級の先生方や大学院の先輩方、友人、そして昨年1年間の研修で教えていただいた事です。

研修医プログラム先に新潟大学臨床研修Aコースを選択したのはいくつかの理由がありました。大学院に進学する前に総合的に歯科診療についてトレーニングをしたいということが第一にあり、Aコースでは恵まれた環境で各分野専門の指導医の先生方の元、幅広く研修することができること。患者担当制であり、治療計画から一貫して診療を行うことができること。このようなイメージを研修前から漠然と持っていましたが、実際に1年間の研修を経て、それが非常に貴重なことだったと心から感じています。

指導医の先生方からは、診療手技以外にも、患者様との向き合い方、ものの考え方、進路など、多くのことを教えていただき、指し示していただきました。医員の先生、レジデントの先生、大学院の先生は、指導医の先生に何うには少しためら

われることも、親身になって聞いてくださり、数え切れないほど助けていただきました。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2018年4月、ともに研修を送ることになる先生方と出会いました。その中でペアが組まれ（私はトリオ、3人組でした）、お互いに慣れない中、ぎこちなくも励ましあいながら研修がスタートしました。人間ですからぶつかり合うこともありますが、すべてのことが今となっては良い思い出です。お互いに異なる分野に進みましたが、これからも助け合える仲であればと願っており、またそのためには自分自身成長を続けなければと、良い意味での刺激になっています。

日々にもがきながら書いておりますので、まとまりのない文章になってしまい申し訳ありませんが、最後まで目を通していただきありがとうございました。



## 研修医プログラムを体験して

包括歯科補綴学分野 善本 佑

この度、歯学部ニュースの執筆を賜りました、本学48期生の善本です。

臨床研修が修了してから半年になりましたが、ここで自分の一年間の研修医生活について触れさせて頂きます。これから研修先を選ぶ学生の皆さんには、進路を選択する参考に少しでもなれば幸いです。

私の場合は、6年生の後半になってもAコースに行くかBコースに行くか決めきれずにいました。その頃は、外部の研修先に行くことに少なからず抵抗感のようなものがあつたようにも思います。ただ、臨床実習最後の義歯科のライターの先生との飲み会で後押しされたのをきっかけに、最終的にはBコースでの研修を選択しました。

前半は、義歯診療科でお世話になりました。義歯・Cr-Br・保存症例を中心に多くの診療に携わらせていただいたのと同時に、補綴のエキスパートである指導医の先生の診療を間近で見ることができたことや、技工を通して、学生の頃には理解が未熟だった義歯製作の勘所を学ぶ事が出来ました。

もしも、専門科の診療に興味がある、または、

その分野で分からない事が多いなら、大学にいる間にその専門分野に半年間でもドブプリと浸かってみてもいいのではないのでしょうか。

後半は、地元の兵庫県の開業医の「かい歯科医院」でお世話になりました。

こちらでは、新潟大学からの研修医の受け入れは、私が初めてだったので、先輩からの情報も無く不安だったのですが、実家から通えるという安易な理由で決めてしまいました。ただ、結果的には、勤務されている先生方やスタッフの皆さん、医院の雰囲気と私と相性がよく、とても有意義で楽しい半年間になりました。大学との違いは、担当する診療件数がさらに多い事、小児から高齢者まで幅広い年齢や診療内容の患者さんを診る事ができた事に加え、初診や急患の患者さんの対応をさせてもらった事で、大学での課題だった一口腔単位から診査・診断をする良い機会になりました。

今から思い返すと、行き当たりばったりな所もありましたが、研修医歯科医師として多くの事を経験する事ができ、充実した1年となりました。ご指導いただきました先生方、衛生士、関係各位の皆様には感謝しても仕切れません。

この経験を次に活かせる事ができるよう、今後も邁進していきます。

## 令和元年度 科学研究費助成事業の内定について

4月1日付けで令和元年度科学研究費助成事業の内定が行われました。歯学系の採択状況（新規のみ）は以下の通りです（挑戦的研究などは含まれていない）。歯学部の科学研究費新規採択状況は好調で、件数ベースで全学の18.9%、金額ベー

スで16.42%を占めています。また本年度の特筆すべき実績として、若手研究の新規採択率が70.97%（院：71.43%、病院：70.59%）と史上最高となったことがあげられます。

種目	基盤研究(A)		基盤研究(B)		基盤研究(C)		若手研究		全体	
	件数	直接経費 (1年目)	件数	直接経費 (1年目)	件数	直接経費 (1年目)	件数	直接経費 (1年目)	件数	直接経費 (1年目)
歯			5	26,000,000	13	18,000,000	10	16,600,000	28	60,600,000
病歯					8	11,900,000	12	16,100,000	20	28,000,000
歯計			5	26,000,000	21	29,900,000	22	32,700,000	48	88,600,000
全学：総計	4	41,800,000	35	206,000,000	137	177,000,000	70	98,000,000	254	539,700,000
全学に対する割合 (%)		0	14.3	12.62	15.3	16.89	31.4	33.37	18.9	16.42

## 口腔病理学、組織学、口腔組織発生学実習への バーチャルスライドシステムの導入について

マルチディスカッションルーム（E棟1階）で行われている口腔病理学、組織学、口腔組織発生学実習では高精度の光線顕微鏡を用いられていますが、観察すべき構造が学生（標本）ごとに異なること、また組織標本が劣化することや全学生同一な教育を行うことが難しいことから、学生および教員からバーチャルスライドシステムの導入の要望がありました。このたび、口腔病理学分野の

田沼教授、口腔解剖学分野大峽教授のご尽力により、オリンパス社製バーチャルスライドシステムを導入しました。このシステムの導入により、教育、研究、診断業務の高度化が図られることが期待されます。なお、詳細については田沼教授が「iPadと連携させたバーチャルシステムの導入」として寄稿して降りますので、それを参照下さい。



## インドネシア・Trisakti大学歯学部、Professor Dr. Moestopo大学歯学部との部局間交流協定について

かねてより、姉妹校締結の依頼が寄せられていたインドネシア・トリスアクティ大学歯学部ならびにインドネシア・モエストポ大学歯学部との部局間交流協定の締結を行いました。7月1、2日に前田歯学部長、魚島副学部長（国際担当）がインドネシア・ジャカルタ市を訪問し、歯学部長ほか歯学部執行部の参列のもと、部局間交流協定式

が行われました。この2つの歯学部はインドネシアの私立大学で、特にトリスアクティ大学歯学部は本学歯学部と同じく1965年に開設されたインドネシアで一番歴史のある私立歯学部です。両大学歯学部には日本に留学し、学位を取得した教員もおり、学生交流のみならず共同研究を希望しています。



モエストポ大学歯学部の調印式の様子



新潟大学歯学部の概要を講演する魚島教授



トリスアクティ大学歯学部との調印式の様子



記念品（カトラリーセット）の贈呈

## 台湾・台北医科大学口腔医学院との 部局間交流協定について

一昨年度、昨年度と新潟大学歯学部は台湾の歯学部と国際シンポジウムを開催してきましたが、このシンポジウムに参加していた台北医科大学口腔医学院から部局間交流協定締結の強い要望があり、7月30日に前田歯学部長、多部田教授が台北市を訪問し、部局間交流協定締結を行いました。

台北医科大学口腔医学院は台湾で古い歴史をもつ医療系総合大学で、メインキャンパスは台北101に近いところにあります。口腔医学院は歯科医師養成に加え、歯科衛生士、歯科技工士の養成も行っており、本学と学生交流の強い希望をもっています。



台北医科大学との記念品交換の様子

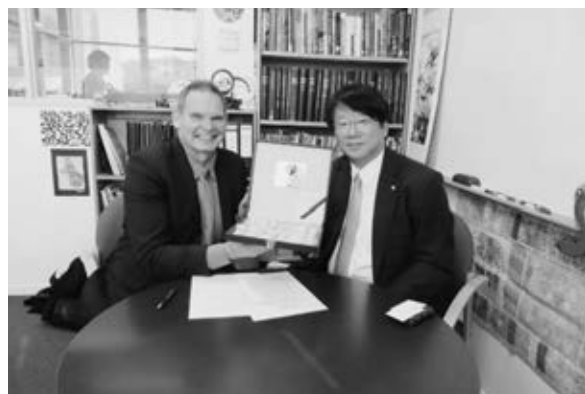
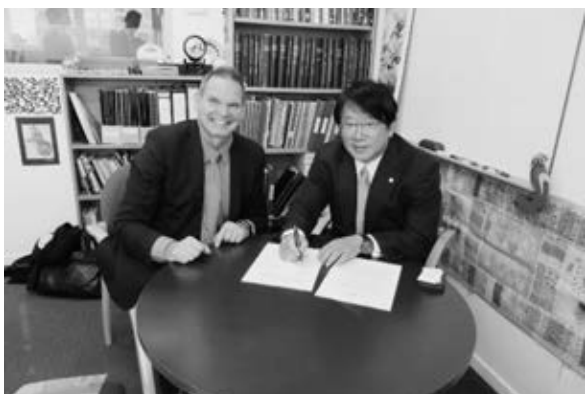


調印式後の記念撮影

## ニュージーランド・オタゴ大学歯学部との 部局間交流協定について

新潟大学歯学部はニュージーランド・オタゴ大学歯学部と部局間交流協定の締結を行いました。8月28日に前田歯学部長、井上誠教授、真柄仁講師が同歯学部を訪問し、K.M Lyons歯学部長と部局間交流協定書に署名を行いました。オタゴ大学歯学部は1907年に設立されたニュージーランドで唯一の歯学部であり、QS世界ランキングでは27-34位にランクされています。この協定締結は本学摂食嚥下リハビリテーション学分野井上誠教

授とオタゴ大学歯科矯正学分野M. Farella教授の交流によるもので、摂食嚥下に関する共同研究が期待されます。また、オタゴ大学歯学部のあるダニーデン市は人口の約20%が教育関係者、学生という学園都市で、また治安もよいので、JASSOの留学生交流支援制度を活用した学生交流も期待されます。オタゴ大学歯学部の様子は以下のURLを参照して下さい。<https://www.otago.ac.nz/dentistry/index.html>



左：オタゴ大学歯学部長との調印、右：記念品（カトラリーセット）の贈呈

## 韓国・延世大学歯科大学校との 部局間交流協定について

新潟大学歯学部は韓国・延世大学歯科大学校と部局間交流協定の締結を行いました。4月5日前田歯学部長が訪韓した際、韓国・延世大学歯科大学校を訪れ、部局間交流協定書に署名を行いました。

韓国の歯学部との部局間交流締結は初めてであり、本交流協定締結は同歯科大学校とのダブルディグリープログラム開設に向けたもので、現在、同歯科大学校と最終打合せを行っています。

## タイ・タマサート大学歯学部との学術、 コンケン大学歯学部との学術交流について

新潟大学歯学部はタイ・タマサート大学歯学部およびコンケン大学歯学部と部局間交流協定を締結しています。この度、両大学歯学部長からの依頼を受け、若手研究者による研究ネットワークの構築を目指し、6月19日にタマサート大学歯学部で、6月21日にコンケン大学歯学部で学術講演会

を開催しました。この講演会には多部田康一教授、真柄仁講師、山田友里恵助教が講師として参加し、最近の研究成果を講演しました。両大学スタッフ、前田歯学部長、若手研究者を交えた懇談会で、今後も研究者交流を継続していくことが合意され、国際共同研究の進展が期待されます。

## 歯学部納涼会の開催について

恒例の歯学部納涼会が7月3日（水）にオークラホテル新潟で開催されました。この会は数年前までは教授会納涼会として開催されていたものですが、准講会、助教会の先生方、さらには大学院生にも参加を呼びかけ、本年は歯学部事務室の

方々を含め約100名の参加者となりました。教員、大学院生、事務職員との親睦を深めるため席順は抽選とし、短い時間ながら職種を超えた会話が進み、有意義なひとときを過ごすことができました。

## 新潟高等学校生の歯学部訪問について

令和元年8月2日（金）、新潟県立新潟高等学校理数科メディカルコース2年生40名ならびに教諭2名が歯学部を訪問されました。新潟高等学校は創立120年を超える県内随一の伝統校で、「けんたか」の愛称で親しまれています。新潟高等学校理数科には2007年よりメディカルコースが設置され、翌2008年から課題研究の一環として、2年生の夏に新潟大学医学部および歯学部を訪問しています。

今回の訪問では、はじめに前田健康歯学部長による挨拶および歯学部の概要、歯科を取り巻く諸問題、医学・歯学教育の流れに関する説明がありました。説明の中では医療人に求められる資質・能力や医療人を目指すにあたって学ぶべきことについても触れられ、高校生は時折メモをとるなどしながら、真摯な態度で聴講していました。

続いて、2つの模擬講義が行われました。1つめは微生物感染症学分野の寺尾豊教授による「分

子微生物学：肺炎と歯周病」で、科学的根拠に基づいた歯科診療のために基礎系歯学を学ぶ必要があることを解説されました。2つめは摂食嚥下リハビリテーション学分野の辻村恭憲准教授による「摂食嚥下障害とその治療」で、高齢社会におけるQOL維持のために歯科臨床が担う役割の一端が紹介されました。高校生はそれぞれの講義に熱心に耳を傾け、講義後には質問をするなど積極的に学ぶ姿勢をみることができました。

最後に新潟高等学校出身で新潟大学歯学部歯学科卒業生である歯科臨床研修医・大学院生を招いての懇談が行われました。大学生活や進路選択に関して活発な質疑応答がなされました。

今回の歯学部訪問が、自らの将来を考える有意義な時間になったことを願うとともに、彼ら、彼女らの将来が輝かしいものになることを期待しています。



## 歯学部オープンキャンパス2019

今年度のオープンキャンパスが令和元年8月9日（木）、10日（金）の2日間にわたり、歯学部校舎を会場として行われました。昨年度に引き続き、参加する高校生の皆さんが自分の興味に従って主体的に参加でき、また歯学科と口腔生命福祉学科のどちらを希望していても楽しんでもらえるよう多くの選択プログラムを用意しました。

まず、副学部長の大内章嗣教授からの挨拶に続き、歯学部の概要に関する説明を大内教授（9日）、学務委員長の小野和宏教授（10日）が行いました。次に入試実施委員長の野村由一郎教授による入試概要説明を行いました。2つの説明の後に設けられた、何でも質問コーナーでは、カリキュラムや入試に関する質問だけでなく、歯科医療人に求められる資質や新潟での生活についてなど、様々な質疑が行われました。

次に2つの模擬講義を行いました。1つは摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授による「食べることの大切さを知る」、もう1つは口腔保健学分野の葭原明弘教授による「お口の健康で元気に長生き」で、いずれも超高齢社会における口腔保健・歯科医療の重要性や課題が盛り込まれた内容でした。

午前中のプログラムは以上で終了しましたが、昼休憩の時間に希望者を対象とした校舎内見学ツアーを行いました。ツアーのガイドは歯学科5・6年次の学生が務め、普段の講義や実習で使用している部屋を紹介しました。

午後は参加者が自由に参加できる3つのプログラムを実施しました。学生との懇談会では、現役の歯学部学生と話をしたい多くの高校生が集まり、学生生活や受験勉強などの話題で大いに盛り

上がっていました。デンタルトレーナーを用いたシミュレーション実習では、高校生だけでなく、付添いのご家族も含めて多くの参加者がバーチャル・リアリティで歯を切削する体験をしました。また、短期海外派遣プログラム報告会では実際にプログラムに参加した学生が自らの体験を発表

し、海外留学に関心のある参加者が発表に耳を傾けていました。

35℃を超える猛暑のなかでの開催となりましたが、両日とも高校生、保護者の方、高校の先生など約200名の来場があり、大盛況のオープンキャンパスとなりました。



## iPadと連携させた バーチャルシステムの導入

組織・病理学実習は顕微鏡を用いて組織標本を観察することを通して正常な組織を理解した上で、病態の疾患概念を定着させることを目的として実施しています。これまでの実習では顕微鏡を用いたガラス標本を用いていましたが、① ガラス標本の経年劣化、紛失、破損が発生するとそれに対応することを求められ、稀少例では補充が困難なこと、② 学生の人数分のガラス標本作製が必要なこと、③ 学生ごとに少しずつ所見の異なる組織標本になること、④ ディスカッション顕微鏡による検鏡が全学生同時には行えないことなどから、学生の正常組織、病理組織の理解、学生同士のディスカッションが時に困難でした。

そこで、上記の問題点を一気に解決するために、本年4月より国立大学歯学部で初めてアップル社iPad (54台) と連携させたバーチャルスライドシステムを病理学講義・実習だけでなく、組織学に導入しました。このシステムは24時間学内外を問わずどこからでも組織像のデータベースにアクセス可能であり、組織切片や細胞を貼り付けたスライドガラスを対象にして、組織・細胞の画像情報（アナログデータ）を高精細のデジタルデータに変換したのち、iPadのディスプレイ上でビューアソフトを用いることにより、ルーペ像から弱・強拡大までの組織・細胞画像の観察・解析が可能となっています。

### 1) 教育

バーチャルスライドの導入により、ガラス標本に関する諸問題が一気に解消されるとともに、通常のHE染色のみならず、数に限りのある特殊染色、免疫組織化学標本なども供覧が可能になりました。学生が同一のデジタル組織画像を観察し、

教員・学生間で、画像をみながらディスカッションできること、参加型学習として発表形式の学習が可能になりProblem based learningの要素をより多く盛り込めること、それにより学生の病理学、組織学に関する理解や興味が高まったと考えている。

### 2) 病理データベース作成

口腔病理学分野では、従来、膨大な量のガラススライドを長年にわたり保管してきた。しかし、保管に要する場所・スペースの制約、ガラススライドの耐用性には限界があるため、ガラススライドの破損、紛失、脱色などによる経年劣化が避けられず、さらにスライドガラス、カバーガラスの仕様の差異等により、再利用が困難になることがありました。しかし、バーチャルシステムでは、ガラススライドを高解像度でデジタル化して保管でき、膨大なデータベースとして幅広い施設間で共用、あるいはライブラリ構築が可能です。

また現在、日本病理学会では、AMEDプロジェクト「AI等の利活用を見据えた病理組織デジタル画像（P-WSI）の収集基盤整備と病理支援システム開発」のもと、病理組織デジタル画像（Pathology-Whole Slide Imaging: P-WSI）のビッグデータを全国の研究参加施設より収集・集約し、これを活用してNational Clinical Database (NCD) との共同作業で病理診断精度管理ツール、病理診断支援ツールの開発を進めています。同時に、国立情報学研究所（National Institute of Informatics: NII）と連携して、AIを活用した病理診断ツールの開発を企図しています。近い将来、これらのビッグデータを活用して病理診断支援ツールが開発されると、地域医療に

◆  
◆  
における病理診断の精度管理や地域医療への貢献が可能になり、さらに最も期待されることは、歯科医師・学生への教育および医学研究に大きく展開されることが期待されます。

### 3) 研究および臨床

さまざまな分野の研究において、組織の形態学的解析、組織計測を含めた画像解析が必要になることがあります。このシステムは研究における画像定量解析に威力を発揮することができます。組織計測では検索対象となるガラス標本全体をスキャンしたうえで、組織全体あるいはアトランダムなROIを設定し、ImageJなどを用います。特に多種類の免疫染色・特殊染色標本を多重化しての解析、ソフトウェアを駆使した組織計測、放射線画像、分子生物学的データなどを統合して、より精度の高い分子病理学的診断を行っていくうえで有用なツールになるのではないかと考えています。

また、外科や放射線科との合同カンファレンス(CPC)、病理診断システムの精度・質管理、迅速化、コンサルテーションやコラボレーション、

遠隔診断、画像解析、病理医の負担軽減、コストの削減効果などに貢献すると考えています。

最後に現状では今回の導入は教育目的が主たるものであるが、本稿で紹介したように、今後は研究・臨床への応用が大いに期待されています。さらに国内外的に、当該システムは、教育・研究分野に導入されて以来、その活用が進むとともに、教育・研究の方法論を劇的に変貌させ、臨床現場でさらに大きく貢献することが予想されます。





## 口腔病理学分野・歯科病理検査室

口腔病理学分野 教授 田 沼 順 一

### 1. はじめに

本分野は、歯学部創立とともに1966年に故石木哲夫教授によって「口腔病理学講座」として開講され、その後大学院部局化にともない、「口腔病理学分野」の名称に変わり、歯学部・大学院医歯学総合研究科において病理学・口腔病理学に関する教育・研究・診断を担当してきました。1990年に朔敬教授（現名誉教授）が引き継いで2016年に定年退職し、2018年に田沼順一が第三代目教授として就任しました。

一方、診療科については、1992年当時の病院長・故原耕二先生のご理解によって、非常勤病理技師の配置、1993年に歯学部附属病院内に病理検査室が設置されましたが、2004年10月の医学部附属病院と歯学部附属病院との医歯学総合病院への統合に伴い、歯科病理検査室は新潟大学医歯学総合病院病理部の中に置かれ、診断業務に適應する最新設備を整え、本学では3名の日本病理学会認定の口腔病理専門医（指導医3名）と日本臨床細胞学会認定の細胞診歯科専門医の2名による、常勤の専門医が中心となって、歯科診療各科で取り扱う炎症から嚢胞、腫瘍までの多様な疾患について、細胞診・組織診、手術中の迅速診断や剖検を担当しています。定期的な分野内および口腔外科・歯科放射線との診断検討会を開き、治療方針の決定から治療効果判定までに必要な口腔病理診断業務を担って、科学的根拠に基づいた精度の高い病理診断を通して本学医歯学総合病院と地域の歯科医療に貢献するべく日々努力を重ねています。本年度より、バーチャルスライドとiPadを取り入れたシステムを導入し、国際的にも先進的な資料管理と病理・臨床資料の共有環境を構築できたことと自負しています。また、歯科病理検査室で

は、歯学部学生の臨床教育も担当し、「病理検査のオーダーができる歯科医師」を育成するために病理学臨床実習の場としても機能しています。

### 2. 教育の概要

歯学科3年生に対しては病理学の基礎的事項（病理学総論）を、歯学科4年生に対しては口腔病理学（病理学各論）の臨床的事項を講義・実習で行っています。歯学科5年生に対しては統合科目やPBLといった分野横断的な授業に参画し、さらに6年生にかけて、病理学の標本作製など実技に関係したポリクリと臨床実習を担当しています。特に、講義や実習のための以前から利用していたwebサイトによる学習方法や今年度からは国立大学歯学部では初めて第三世代のバーチャルスライドシステムを導入し、学生一人ひとりにApple社のiPadを購入して講義・実習の予習・復習や確認、自己学習に配慮した授業形態をとっています。加えて、歯学科・口腔生命福祉学科学生に対してはスタディスキルズの一部を担いつつ、歯学科2年生のインターネットチュートリアルや口腔生命福祉学科の演習・実習の一部を担い、歯学教育全般に幅広く関与しています。大学院生への教育としては、時間と場所の制約を排したe-learningシステムMoodleなどのオンライン学習システムを導入しつつ、研究課題に即した柔軟な対応を行っており、学位研究に結び付けています。こうしたシステムは社会人大学院生にも積極的に門戸を広げることに役立っています。

### 3. 研究の概要

研究においては、「病理学を総合的生命科学とすること」を目標にし、主に行われてきた内容は、1) 口腔領域ではもっとも頻度の高い口腔が

んにおいて、その発生メカニズムの解明に舌癌多段階発がんモデル動物を用いた研究、2) このためには、ヒト口腔扁平上皮癌から樹立した細胞株を用いて、増殖・浸潤・転移を制御している分子機構の解明を目指した研究を展開し、特に癌組織において死細胞が果たす役割の解明に取り組んでいます。また、3) 扁平上皮癌に加えて唾液腺腫瘍・歯原性腫瘍由来細胞を多数樹立し、それらの細胞の中で、特に唾液腺多形腺腫から樹立した細胞株をもちいたて低酸素環境下における細胞外基質ECM合成やエネルギー代謝調節機構を基軸に、癌の微小環境としての低酸素環境実験モデルを確立し、腫瘍の生存・増殖を制御している分子機構をミクロレベルで解明し、さらに歯胚の発育機序とも関連づけ、4) マクロの視点から口腔がんの発生要因を解明してその予防を目指した研究は、中国（北京大学口腔医学院）、台湾（国立台湾大学歯学部）、ミャンマー（マンダレー大学歯学部）のアジア諸国からアメリカ（NIH）やEU諸国（イタリアがんセンター研究所）との国際共同研究として展開しました。そのほか5) 口腔細胞診、液状化検体細胞診（LBC）を用いた研究により、

新潟県歯科医師会による口腔がん検診の実現化のための講習会などに貢献しております。これら研究成果は、国際専門誌に発表された多数の論文として記録され、今後もさらなる展開が期待されています。

#### 4. 終わりに

令和元年7月現在、スタッフは7名で、教員3名（教授 田沼順一、講師（病院）丸山 智、助教 山崎 学）、大学院生3名（社会人大学院生；秋森 俊行、口腔外科；笠原 映、再建口腔外科；河原 田壮史）、技術補佐員の高橋由紀さんです。全員が献身的に結束して、従前以上の高い成果を目指していますが、病理診断業務の仕事量増加による慢性的な人手不足のため、思うに任せない状況もあります。頑張っていきたいと思えます。

またこのたび、このような誌面にて当分野を紹介させて頂く機会を頂戴しましたことに心より感謝申し上げます。今後とも口腔病理学分野、歯科病理検査室をどうぞよろしくお願い申し上げます。



iPadを用いた口腔病理学実習の風景



2019年7月現在の口腔病理学スタッフ

## 顎関節治療部の紹介

顎関節治療部 准教授 荒井良明

### 1 はじめに

顎関節治療部は、いわゆる顎関節症患者を中心に診査・診断・治療を統括する中央診療部門として、2006年4月に設置され、13年間に渡ってチーム医療を行ってきました。我々が現在行っている臨床・教育・研究についてご紹介いたします。

### 2 臨床について

顎関節症状を訴えて来られた患者は、すべて総合的に顎関節治療部にて世界標準のプロトコールDC/TMDを用いて診査されます。年間約200～300名の新患が来院しています。およそ半分が院外からの紹介患者となります。診査は問診に始まり、筋や顎関節の触診、下顎の可動性検査を経て、パノラマによる画像診査をします。これら身体的因子（第一軸）の診査だけではなく、心理社会的因子（第二軸）のスクリーニングも行っています。

すべての症例が、毎週水曜日に行われる「診断と治療方針の検討会」において検討されます。この検討会では、顎関節症を専門としている補綴医、口腔外科医、画像診断医を中心として、各症例の担当医と診断と治療方針の妥当性について検討し、診断と治療方針を決定します。さらにMRIやCT、筋電図等の検査を追加すべきかが検討されます。

治療は診断に基づき、初期治療として患者教育、セルフケア指導、理学療法、薬物療法、口腔アプライアンス療法が行われます。6ヶ月を目安としたこれらの初期治療で、90%の患者は症状が改善し、日常生活に支障が無い程度に回復し予後観察に入ることになります。症状に改善が認めず治療が長期間におよぶ症例は、習癖がコントロー

ルできず筋症状が消失しない症例や心理社会的要因が大きい症例が主体となります。顎関節内障で痛みが改善しない症例、開口量が増加せず日常生活に支障が残る症例では外科的療法が選択されますが、数は少なく年間2～3名に適應されています。初期治療後に障害は改善したが、開咬が残存した症例は、咬合調整や補綴治療あるいは矯正治療が選択されます。精神心理面の要因が大きいケースでは、ペインクリニックや心療内科を併診していただくこととなります。

地域医療を携わっている近隣の歯科医院の多くの先生方にMRI装置のある連携医療機関として当院で施設申請をしていただいております。顎関節の画像診断までを当院で行い、それぞれの歯科医院にて治療をするという流れも非常に増えています。今後も、地域医療に携わる先生方に積極的に情報提供を行って、有効な連携により多くの患者が一日も早く機能障害から開放され、これまで以上に地域医療に貢献できればと考えております。

### 3 学生教育と臨床研修について

学生の講義は、5年生の統合科目の中の2コマで基礎的なことを中心に、毎年6～7問出題される国家試験も見据えて講義を行っています。卒前教育が少ない分、歯科医師臨床研修を利用して卒後教育に力を入れています。2名ずつの研修医が1週間交替で顎関節治療部にて研修をしています。診査・診断、検討会での症例の報告、さらに口腔アプライアンスと理学療法の相互実習、薬物療法の座学と初期治療の一連の流れを学んでもらいます。1週間と短い研修期間ではありますが、終了時には自信をもって顎関節症の患者に接することができるようになっています。

## 4 研究について

主に顎関節症とインプラント治療関連の臨床研究を行っています。臨床研究は倫理申請や研究参加の説明と同意を得るのに大変苦労しますが、日々の臨床の中で感じた疑問に対する答えを見つけられるべく、鋭意取り組んでおり、その中からいくつかご紹介いたします。

### 1) 咀嚼筋痛障害患者の咬筋の硬さの研究

これまで筋痛障害患者の咬筋は硬いことは知られていましたが、客観的に硬度を測定する方法がありませんでした。我々は最新の超音波エラストグラフィを用い、筋痛障害患者の咬筋は正常者の2倍硬いことが明らかとなり、今後診査や治療効果の判定に有用と考えています。

### 2) 顎関節症患者の心理社会的因子の研究

顎関節症患者の心理社会的因子（第2軸）について様々な研究を続けています。咀嚼筋痛障害患者は抑うつ度が有意に高く、第2軸診査の必要性和心理社会的アプローチの重要性が明らかとなりました。また、顎関節症の素因として自我状態の関係を調べたところ、自己否定・交流回避を特徴とする自我状態の患者は病脳期間が長いということが明らかとなりました。この論文は、顎関節学会の平成30年度の論文における学術奨励賞最優秀賞に選ばれました。

### 3) 日中のブラキシズムに関する研究

我々は日中のブラキシズムに注目しています。女性の咀嚼筋痛障害患者の咬筋に小型筋電計を貼付して24時間測定したところ、夜間よりむしろ日中に持続的なブラキシズムをしていることが明らかとなりました。

### 4) 歯科衛生士によるTCHの是正指導

上下歯列接触癖（TCH）の是正指導を歯科医師の代わりに歯科衛生士が行っても十分な効果があることが明らかとなり、歯科衛生士の新しい役割として注目されています。

### 5) 抗菌マウスピース材料の開発

マウスピースは長時間使うと細菌が付着したり

歯の表面を脱灰させたりする副作用が認められますが、これらを防ぐ抗菌剤を配合したマウスピースを開発しました。マウスピース表面にはブラークが付かず、歯の脱灰を防ぐ効果が明らかとなりました。この研究はスポーツ歯科学会にて研究奨励賞を頂き、今後の臨床応用が楽しみな材料です。

### 6) インプラントブリッジの清掃方法について

インプラントブリッジの清掃方法は未だ確立されておらず、メンテナンス時にスクリューを外してクリーニングした方が3か月後のインプラント周囲の細菌数が有意に少ないことが明らかとなりました。この研究はインプラント学会で歯科衛生士優秀発表賞を頂きました。

### 7) 無歯顎患者のインプラント治療の予後

上顎のインプラントオーバーデンチャーであることと男性であることが、無歯顎患者のインプラントの喪失リスクであることが解りました。

## 5 おわりに

高木部長のもと、下記の専任と各診療科からの数名の応援を頂いて活動しております。今後も顎関節治療部をよろしくお願い致します。

部 長 高木律男（併任）

副 部 長 荒井良明

医 員 高嶋真樹子、河村篤志、山崎裕太  
レジデント 松崎奈々香、土屋健太郎

歯科衛生士 横山奈央（診療支援部）



2019年7月 顎関節学会（東京）にて

## 大橋 靖先生を偲んで

新潟大学顎顔面口腔外科学分野教授 高木 律 男

故・大橋 靖先生とは、大橋先生が新潟大学歯学部サッカー部で後援会長をされていたころからのお付き合いで、部員であった私は後援会からの寄附金をいただくのに、「後援会長の一言」をいただきに何度か教授室に伺っていました。また、サッカー部の先輩が第二口腔外科（現・顎顔面口腔外科）にいたことと合わせて、口腔外科の道に進むきっかけとなりました。とは言え、入局後の大橋先生の態度は、サッカー部はサッカー部、口腔外科は口腔外科ということで、当然ですが、誰にも厳しく、また患者さんを思っただけの指導をしてくださいました。臨床における診断の重要性、しっかりと症例を診ることから出る疑問が研究課題となること、などなど思い起こせば、今の自分の全てにしみこんでいると感じます。特に、ご略歴の表に示します通り、1982年にご家族でヨーロッパに留学され、帰国後に始められた「Hotz床併用二段階口蓋形成法」は、現在も教室で引継ぎ、「世代を越えて」の口蓋裂患者さんに対する新潟大学医歯学総合病院のチーム医療として誇ることのできる体制となっています。

本年は4月20日で88歳を迎えられたということで、令和に移行した5月3日に療養中の病院でお会いした時には、ご指導いただいた大学時代と変わらぬ鋭い目つきで迎えてくださいました。戦後

の昭和から口腔外科の創世記を生き抜き、長年にわたる教授生活、そして6年にもおよぶ闘病生活はさぞや大変であったと思います。最後の6年は先生が大変な中でも頑張っておられることが、そして奥様をはじめご家族が見守ってくださったことが、すべて私の生きる張りでもありました。亡くなられた5月21日は、まさに「巨星落つ」の気持ちで訃報をお聞きしました。

大橋先生が亡くなられた翌週5月29日から新潟市朱鷺メッセにおいて第43回日本口蓋裂学会を主催させていただくことになっており、無事終了して大橋先生にご報告する予定でした。残念でありませんが、大会における理事会、代議員会、総会において、それぞれ大橋先生への感謝の気持ちを込めて、黙祷が行われました。

大橋先生、先生からいただいた多くの思い出、教訓はいつまでも大切に残し引き継ぎたいと思います。誰もが身がすくむような存在であった新潟大学の教授時代から、退職後のご活躍のご様子を見やすいように表にしました。お酒を飲むのが好きだった先生を思い出しながら、表や写真を見ながら仲間たちと語り合う機会になればと思います。長い間、本当にありがとうございました。心より御冥福をお祈りいたします。合掌。

大橋 靖先生のご略歴

西暦(年)	元号(年)	出来事
1958	昭和33	東京医科歯科大学歯学部卒業、第一口腔外科入局
1965	昭和40	歯学博士（東京医科歯科大学）
1969	昭和44	岩手医科大学歯学部教授（口腔外科学第二講座）
1973	昭和48	新潟大学歯学部教授（口腔外科学第二講座）
1982	昭和57	文部省在外研究員（西ドイツ、オーストリア、スイス、アメリカ） Hotz床併用二段階口蓋形成法
1983	昭和58	第7回日本口蓋裂学会 大会長 （その他、退職までに日本口腔腫瘍学会、日本口腔科学会などの大会長）
1985 －1989	昭和60 －平成2	新潟大学歯学部附属病院長（第9代）
1995 －1996	平成7 －平成8	日本口蓋裂学会理事長（第5代）
1995	平成7	第48回 新潟日報賞（科学部門）受賞
1998	平成10	新潟大学退官、新潟大学名誉教授
2001 －2011	平成13 －平成23	新潟医療福祉大学・医療技術学部言語聴覚学科教授（退職後：新潟医療福祉大 学名誉教授：岩手医科大学・新潟大学・新潟医療福祉大学の教授歴39年）
2012	平成24	叙勲：瑞宝中綬章
2019	令和元	5月21日ご逝去、叙位・叙勲 位階「正四位」

右：瑞宝中綬章 叙勲祝い

2012年7月

下：国際口蓋裂学会（オランダ）

2013年5月（受傷直前）

右下：新潟日報賞（科学部門）

表彰状

2019年5月通夜・告別式にて



# 素 顔 拝 見



義歯診療科

大 川 純 平

令和元年5月1日、改元という素晴らしい日に義歯診療科の助教を拝命いたしました、大川純平と申します。この度、「素颜拝見」の執筆という貴重な機会をいただきましたので、自己紹介をさせていただきます。

出身は福井県の鯖江市で、なんとといってもメガネで有名な町、「めがねのまちさばえ（公式）」です。大学進学を期にコンタクトレンズになることもなく、メガネをちょっとしたアイデンティティに、新潟大学に44期生として入学しました。卒後研修はBコースとして新潟大学義歯診療科と新潟市民病院歯科口腔外科にて勉強をさせていただきました。確か歯学部生時代には、「卒業したら地元福井に戻って歯医者さんするんだ」と意気込んでいたのに、いつの間にか大学院に進学を決め、包括歯科補綴学分野に入局し、昨年度に博士課程を修了しました。鯖江のメガネは素晴らしいのですが、さすがに未来までは見通せませんでした。

そんなこんなで新潟に腰を据えている？のですが、最近ホットなワードがあります。「医食同源」と「酒は百薬の長」です。新潟の食文化・酒文化に最適な素敵ワードですね。私の大学院での研究としても、レトロネーザルアロマと呼ばれる食事中の香りに注目したものであったため、いざ研究！それ研究！と美味しい食べ物・飲み物をいただき続けております（付き合ってくれる先生方あ

りがとうございます）。やはり日頃のツカレを発散するためには、美味しい食事はすごく健康に寄与していると思います。そしてちょうどいま健康診断の結果待ちで、血液検査のあれこれの値もエンゲル係数に比例して高めとなったんじゃないかと戦々恐々としておりますが、この2つのワードで心の健康も保っている幸いです。ほんと素敵ワードです。このように、食事には高い積極性を見せますので、みなさまとご一緒させていただける機会を楽しみにしています。

さて、文字数制限が近づいてまいりましたので、アカデミック寄りのお話もさせていただきます。

大学院での研究はレトロネーザルアロマを主とし、咀嚼や嚥下の研究をしておりました。大学院を修了してからは、趣味が実益になってほしいとAI（人工知能）の研究も進行中です。AI後進国とも言われる日本ではありますが、医療分野でもその実践が見られるようになってきました。私としても、筋電図や各種センサーの数値データから口腔内外写真、顕微鏡写真までなんでも取り扱う＝気持ち＝だけはありますので、みなさまのおメガネにかないましたら、ご一報いただけますと幸いです。

メガネのステルスマーケティングと最後は研究のダイレクトマーケティングになってしまいました。研究・臨床・教育と歯学部および歯科界のため尽力していく所存ですので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願いいたします。





高度口腔機能  
教育研究センター

原 実 生

令和元年6月1日付で高度口腔機能教育研究センターの特任助教を拝命いたしました原実生（はらみき）と申します。今年大学院を卒業し、臨床、教育、研究と様々な機会で学生の皆さんや他科の先生方と関わらせていただく機会をいただくことも増えてまいりましたのでこの場をお借りして簡単ではありますが自己紹介させていただきます。

私は新潟市東区の出身で、実家は最寄駅から徒歩15分ほど、田んぼの中の住宅街です。小学校から高校まで、電車とバスを乗り継いで本学の近くまで通学していました。小中学校では競泳に打ち込み、高校では野球部のマネージャーをしていましたので毎年夏は真っ黒で驚かれるほどに日焼けをしていました。矯正治療を受けたことをきっかけに歯科に興味をもち、毎年春になると本校の歯学部の花を見て育ってきましたので、自然と新潟大学歯学部への進学を目指していました。しかし残念なことになかなかご縁をいただけず、浪人を経て北海道大学歯学部へ進学しました。

学部時代は学費を自分で支払うことを条件に進学したので、様々なアルバイトを経験しました。そのなかでもたまに近所ということで応募したインド・ネパール料理屋さんで長く働かせていただきました。当時札幌にはスープカレーに続き、インドカレーブームが到来していました。このアルバイトをきっかけにインド料理にはまり、今でも週末には車を走らせカレー屋をめぐり、旅行先でもご当地料理だけでなくおいしいカレー屋を求めてしまうようになりました。全国各地でおいしいカレー屋さんをご存知でしたらぜひ教えてください。勉強そっこのけでアルバイトに明け暮れ、成績はいつもぎりぎりの学生時代で、某基礎教室の教授室で面談をしたこともありました。それでも何とか卒業できたのは様々な場面で支えてくれた同期や先生方のおかげと思っています。

その後研修医から新潟大学に所属させていただいております。大学院では歯周病と全身疾患の関連や、歯周病発症・進行のメカニズムをテーマに研究を行いました。6月からは薬理学教室で、骨の代謝に注目した新たな研究に携わらせていただき、これまでと異なる実験や解析に四苦八苦しながらも、研究・臨床・教育にと充実した日々を過ごしています。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えていただきました歯周診断・再建学分野の多部田康一教授、高度口腔機能教育研究センターの前田健康教授、歯科薬理学分野の佐伯万騎男教授をはじめ、関連する分野の先生方に心より感謝いたします。未熟者ではありますが、新潟大学歯学部への発展に貢献できるよう日々精進してまいります。皆様どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。



組織再建口腔外科学分野  
助教

齋 藤 直 朗

2019年4月1日付で組織再建口腔外科学分野の助教を拝命致しました、齋藤直朗（さいとう なおき）と申します。素顔拝見執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は近年何かと話題の埼玉県です。埼玉でも、県中部に位置する比企郡川島町という電車も通っていない田舎町です。今では圏央道が通り、インター近くには工場が多くなりましたが、当時は田んぼばかりで、見渡して一番高い建物は学校というようなところでした。高校4年目を池袋分校（駿台予備校）で過ごした後、新潟大学歯学部歯学科に入学しました。本学41期生になります。歯学部卒業後は、長岡赤十字病院歯科口腔外科、新潟大学医歯学総合病院口腔再建外科での臨床研修を経て、組織再建口腔外科学分野に大学院生と



して入局しました。大学院卒業後の2年間は富山県立中央病院歯科口腔外科に勤務し、2018年4月に医員として大学に戻ってまいりました。

趣味はカメラです。オリンパス社製OM-D EM-5 mark IIが私の愛機です。もともと写真を撮るのは好きな方でしたが、コンパクトデジカメの域を超えることはなく、SONY RX100を使用していました。しかし、OM-D EM-5 mark IIを手にしてからは、それまでとは違った写真撮影の楽しみを知ってしまい、そこそこに没頭しています。大学を卒業してから運動する機会もめっきり減ってしまいましたが、涼しい時期には写真を撮りに散歩に出かけたりするなど、運動するよいきっかけにもなっている気がします。カメラ購入に際して、迷っていた私の背中をおしてくれた、某M先生にはこの場をお借りして感謝申し上げます。

他の楽しみとしては、月9を見ながら晩酌をすることです。月9といってもコードブルーやラジエーションハウスなどの世間一般で言われているフジテレビ月曜9時枠のドラマではありません。私にとっての月9は、BS-TBSの月曜9時枠「吉田類の酒場放浪記」です。酒場ライター、画家、作家、歌手と幅広く活躍する吉田類さんが、地域のおすすめスポットと居酒屋を紹介するという内容ですが、この番組をつまみに酒がすすむのですから、どうにもやめられません。最近はややタイムリーに見ることができないため、毎回予約録画をしています。これを見ながらの晩酌は大きな楽しみのひとつです。あとは日本酒の四合瓶集めでしょうか。ちょっと日本酒にこだわった居酒屋さんに並んで置いてあるような感じに、我が家にも空いた四合瓶が棚の上に並べてあります。日本酒を飲むのはもちろん好きですが、ラベルも酒蔵ごとになかなか味があり、部屋の飾りにはもってこいです。富山勤務に際して、一度大量の瓶を廃棄したのですが、どうもやめられないようで、最近になりまた集め始めています。

このまま終わってしまうと、埼玉出身の酒とカメラ好きの人になってしまうので、最後に仕事についても簡単に。診療では大学での口腔外科診療に従事し、日々新しい手技を学べることにやりが

いを感じています。また、4月から教員の立場となりましたので、より一層学生教育にも貢献できるようにと意識しています。高校時代には教師になることも考えていたので、人に何かを教えるのは嫌いではありません。学生さん達に鬱陶しがられない程度に丁寧な指導を心がけていきたいと思っています。研究では、学部生時代にお世話になった先生方の影響もあり、骨に関する研究をしています。歯科臨床でも問題となることが多い薬剤関連顎骨壊死は、私のこれまでの臨床経験でも何度か苦い思いをしたことがあり、その発症メカニズム解明につながるような発見ができればと考えています。

自己紹介といいつつも、思いつくままに雑多な内容を書いてしまいましたが、皆様今後ともどうぞよろしくお願い致します。



顎顔面口腔外科

上野山 敦 士

2019年4月より顎顔面口腔外科の助教を拝命致しました上野山敦士と申します。この度、「素顔拝見」への原稿依頼をいただきましたので、この場をお借りして、ご挨拶をかねて略歴と自己紹介などをさせていただきます。

名字の「上野山」が珍しいらしく、よく「かみのやま？どちらの出身？」と聞かれますが、生まれも育ちも新潟市です。また、自分としては物心ついた時から「うえのやま」なので、なぜ「かみのやま」と呼ばれることのほうが多いのか不思議です。それに東京の「上野」もあるので、まずは「うえのやま」って読まないかな？といつも思っています。「うえのやま」です。

さて、出身大学は北の果て北海道大学です。大学入学当初はすすきでの毎晩の夜遊びと華やかなキャンパスライフを夢見ましたが、入った部活は高校からやっていた空手でむさ苦しい男が中心

の部活でお世辞にも爽やかなキャンパスライフとは言えない学生生活でした。北大歯学部には空手部はなく全学の空手部で練習は週6日で厳しくと、さらに年に3回1週間くらいの合宿があり、道場に泊まり込んで練習するのですが、夏合宿が毎年歯学部の試験期間と被るので死にそうになりながら練習と試験勉強をやっていました。まあ、普段から勉強しとけて話なんですけど、追い込まれないとやらない性格なので。ただ、全学の部活のため農学部や工学部、理学部、水産学部、法学部や文学部など様々な学部の連中がいたのでとても楽しかったですし、そういった違う分野の連中と今でも交流できているのは財産だなと思います。

そんな学生生活を歯学部での数少ない友達の力を借りて何とか無事に6年間で卒業し、研修医まで札幌で過ごしました。研修医終了後は思い切って大都会横浜の開業医に就職しましたが、都会の荒波に勝てず、というのは半分冗談で開業医で改めて口腔外科の知識技術の重要性を感じたため、それなら新潟に戻って口腔外科を学ぼうと大学院に入り、現医局にお世話になることにしました。大学院では臨床で口腔外科を学びながら、基礎研究として現在の生体組織再生工学分野の泉教授（当時は口腔解剖学の准教授）のご指導の下で口腔粘膜細胞を使用して培養粘膜の研究を行い、学位を取らせていただきました。大学院修了後は新潟中央病院、長岡赤十字病院にそれぞれ1年間出向したのち大学病院に戻ってきて現在3年目になります。

あとは無難な所で趣味ですが、マラソンです。もともと長距離はとてもきらいでしたが、入局一年目で半強制的に出された新潟マラソンですっかりはまってしまいました。ただ、最近は医局内でマラソンをする人が減り、とても寂しい思いをしています。どなたか顎外科に入局して一緒に走ってくれる方を心よりお待ちしております。

とりとめもないことを書き進めてきましたが、最後にまだまだ至らぬ点の多い未熟者ではありますが、精進して参りますので今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。



## 顎顔面口腔外科学分野

永井孝宏

2019年4月1日付で顎顔面口腔外科学分野の助教を拝命した永井孝宏です。このような場で、ご挨拶させて頂く機会は初めてですので、恐縮ではありますが、自己紹介させていただきます。

私は新潟県上越市出身で、1984（S59）年から続いた「3年豪雪」（県内出身の方はご存知と思います）の最後の年、1986年の2月に生まれました。近年は上越市、新潟市ともに小雪が続いていたものの、2017年の冬は豪雪地方新潟を彷彿とさせる雪景色となった事は、記憶に新しいところだと思います。そのような環境で育ったこともあり、幼少よりスキーは嗜んでいました。小学生の頃は活力に溢れていましたので、雪山での骨折も経験しました（泣）。中学・高校では陸上競技に熱中しましたが、両親からのフィジカルの遺伝子は色濃く、低身長・短足というハンデは越えられず、大学ではあっさり硬式庭球部に転向しました。ただ、大学時代も結局、テニス<酒の生活だったと記憶しています。

卒業後は新潟大学の研修プログラム（Bコース）を希望し、2012年4月より新潟大学医歯学総合病院臨床研修歯科医となりました。学生時代には歯科矯正学に興味を持って勉強していましたが、口腔外科は野蛮なイメージ（怒られそうですが笑）で、自分が関わる事は無いだろう、くらいの印象でした。短い研修期間で今後の専門診療を決めるなら、少しでも幅広く学ぼうと思い、保存科（歯の診療科）と口腔外科（新潟労災病院）を選択しました。保存診療では残存する歯に対する、う蝕治療・根管治療の手技と考え方を勉強させて頂きました。口腔外科研修先の新潟労災病院 歯科口腔外科（上越市）は地元でもあり、小手術を中心とした口腔外科の基本と周術期管理、全身麻酔管理を学び、私にとって有意義な研修であったとともに、現在の仕事に繋がる人生の転機とな

りました。同病院の部長方の薦めもあり、2013年4月に顎顔面口腔外科学分野に大学院生として入局しました。

院1年目に口腔外科・麻酔科研修、2年目の10月から慶應義塾大学微生物学・免疫学教室で「HIV感染症」に関わる基礎研究、3、4年目に口腔解剖学分野で「頭蓋顔面形成におけるmicroRNA」をテーマに基礎研究を行い、院卒業後、長岡赤十字病院歯科口腔外科に1年間長期出張の後、2018年4月より大学病院へ復局しました。研修医から現在に至るまで、半年～1年毎に生活スタイルが変化するため、ある意味マンネリ化する事無く、適度？に刺激のある生活が継続できているのだらうと思います。

現在は顎顔面口腔外科で口蓋裂・変形症班に所属し、臨床を中心とする生活で口腔外科診療に邁進しています。また、今回歯科医師8年目となるタイミングで顎顔面口腔外科の助教を拝命したことをきっかけとし、今後はさらなる研鑽を積む必要があると考え、関係各所より御支援賜りながら、今年（2019年）10月よりInselspital, Bern University Hospital Department of Cranio-Maxillofacial Surgery（スイス）へ留学を予定しています。最後になりますが、口腔外科を通じて、これまでに関わった先生方はより一層、そして今後、診療や研究を通して、様々な方と関わる機会が多くなると思いますので、何卒よろしくお願ひ致します。



## 歯周診断・再建学分野

### 野 中 由香莉

2019年4月1日付で歯周診断・再建学分野の助教を拝命しました野中由香莉と申します。この度「素顔拝見」の執筆という貴重な機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は新潟市南区（旧白根市）です。小学校、中学校とも田んぼの真ん中に位置し、中学まで約5kmの農道を自転車で爆走していました。中学・高校では、吹奏楽部でホルンを演奏していました。「オーケストラ楽器別人間学」（茂木大輔/新潮文庫）によれば、ホルン奏者は忍耐強く、熟考癖があり、“ホルンの音域は極めて広く、それもまた奏者の性格に幅と余裕をあたえることになる。細く張りのある高音は強い意志力を、鳴りわたる中音は人間的な幅の広さを、グロテスクな低音は若干のサディスト的傾向をもたらす。”とのこと。当たっているような、いないような。ホルンは、社会人になってからも細々と続けていた私の数少ない趣味の一つです。楽器を吹き鳴らし、周囲の音と一体となるのが、音楽の世界に浸る最高の瞬間です。

大学も地元新潟で過ごし、卓球部に所属しておりました。運動神経、反射神経および動体視力の致命的な欠落により、戦力としては到底活躍できませんでしたが、周囲の皆さまのおかげでなんとか6年間在籍させていただきました。卒後はそのまま本校の歯科総合診療部にて研修医を行いました。先生方の丁寧なご指導のおかげで歯周治療の面白さに目覚め、また、学部生の頃から研究に興味があったことから大学院に進学し、歯周診断・再建学分野に入局しました。大学院生活は心から楽しく、非常に濃密な時間でした。歯周炎と全身疾患の関連や、歯周病原細菌の病原因子についての基礎研究を行いました。そのような中で、ありがたくも研究留学のお話をいただき、大学院卒業

後にアメリカへ渡りました。ラボはカリフォルニア州立大学サンディエゴ校の医学部にあり、そこで私は大学院の時に携わったT細胞の研究を行いました。初めて新潟を離れた地がリゾートサンディエゴだったので、気候が人間に与える影響の大きさを身にしみて感じ、充実した日々を過ごさせていただきました。経験は何にも代えられません。行かなければできなかったこと、出会えなかった人々が私の財産です。

帰国後は歯周診断・再建学分野で再度お世話になり、臨床の経験も積ませていただきました。育休からの復帰後には、日本学術振興会の特別研究

員に採用され、引き続き研究に従事して今に至ります。特別研究員の交流会では秋篠宮妃紀子様と直接に面して、自身の研究内容についてお話をさせていただくという大変貴重な機会も頂きました。今後も多部田康一教授のご指導のもと、自身の仕事が少しでも社会に還元され役に立つ日がくるよう尽力して参ります。

最後になりましたが、歯周診断・再建学分野、歯学部的发展に貢献できるよう、微力ではありますが精一杯努めてまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。





# 同窓会だより

## 同窓会の出来事

副会長 野内 昭 宏

1. 慶事（令和元年春の叙勲での受章と教授就任）

令和元年5月21日付けで発令されました令和元年春の叙勲で、当会関係者が2名受章されました。

- ・野田 忠 先生（名誉教授、元小児歯科学講座）  
教育研究功勞にて瑞宝中綬章を受章
- ・佐藤 金彦 先生（歯学科3期生） 保健衛生  
功勞にて旭日双光章を受章

また、野村 務先生（歯学科15期生）が4月に明海大学教授に、そして7月には山賀孝之先生（歯学科27期生）が松本歯科大学教授に就任されました。

当会からも先生方に祝意をお伝えしました。益々のご発展をお祈りしています。

2. 山形県支部創立20周年記念総会

4月28日、山形県支部設立20周年記念総会が山形市蔵王温泉で開催されました。本部からは有松同窓会長が出席しました。

組織再建口腔外科学分野小林正治教授（歯学科13期生）による基調講演、ならびに懇親会が行われ、20周年記念をお祝いするとともに同窓生で親睦を深めました。

当会では、全国に19の支部が結成されており、既に三十有余年の歴史のある支部もあります。各々独自の活動を行っており、会員相互の親睦を深めるとともに自己研鑽にも努めています。



講演をされる小林教授



山形県支部の方々

3. 同窓会説明会

歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生の皆さんを対象として、4月5日に同窓会説明会を開催し、同窓会活動について役員が説明をしてきました。その後の懇親会では、同窓会に対する質問や、卒業後・研修修了後の就職などへの疑問などにお答えしながら、親睦を深めました。





#### 4. 研修歯科医支援塾

「新大病院で研修されている研修歯科医を対象として、研修修了後の進路決定に資するように、若手の先生の話聞く会を設けてはどうか？」今は名誉教授となられた福島先生の、このような鶴の一声で始まったこの会も、回数を重ねて今回で第10回。記念すべき第10回目の研修歯科医支援塾はこの5月30日に開催されました。



今回の講師は、開業医としてご活躍の歯学科38期生・高橋 希先生と、研究者としての道を選んだ歯学科42期生・山田友里恵先生のお二人。第10回にふさわしい情熱に満ちたお話しをしていただきました。それぞれの道を選択するに至ったきっかけなどもお話ししていただき、研修歯科医からは「とても励みになった」といった感想が聞かれました。



\*\*\*\*\*

3. の同窓会説明会、4. の研修歯科医支援塾、ともに卒業前後の若手の方を対象にした事業です。そこには、躓きやすい学部卒業～就職・進学時での情報提供の場を設け、卒後5年程度の期間で決まると言われている各自の生き方の道しるべを形作るうえでの参考にしてもらいたいという思いがあり、開催しております。

## 咀嚼の診える化～「咀嚼を測る」ことから何が見えてくるのか？を拝聴して～

歯学科21期生 鈴木利枝

小野高裕先生「咀嚼を測る」ことから何が見えてくるのか？を拝聴した。

2018年の診療報酬の点数改正で歯科疾患管理料口腔機能管理加算、咀嚼能力検査、咬合圧検査、舌圧検査という新たな項目が加わった。近年、要介護状態の前段階の全身のフレイルの出発点の一つであり加速要因の一つでもあるオーラルフレイルの概念が導入された。このオーラルフレイルを早期発見し、一般の歯科診療所において治療や指導によって改善するために作られた疾患概念が65歳以上の高齢者を対象にした口腔機能低下症という新しい病名である。測定に必要な新たな機器がいくつか必要になることもあり算定は見送ってはいないものの、詳細を知らないのもどうかとずっと思っていたところの講演であったので、ありがたく拝聴させていただくこととした。

口腔機能低下症は7つの下位基準がある。①口腔衛生状態不良②口腔乾燥③咬合力低下④舌口唇運動機能低下⑤低舌圧⑥咀嚼機能低下⑦嚥下機能低下がそれである。対象は65歳以上で、下位基準のうち、咀嚼機能低下、咬合力低下または低舌圧のいずれかの項目を含んで3項目以上に該当する

者、が算定要件となる。

7つの項目は大きく分けると口腔の環境と機能が含まれているが歯科において一番専門性の高い項目は咀嚼である。

改めて感じたが、この職業は日々咀嚼にとらわれているのであった。数十年の間、毎日患者様から言われることは、歯が痛くて咬めない、咬むと顎が痛い、咬むとしみる、入れ歯が合わなくて咬めない、…咬めない、…咬めない…咬めない…。その度に、目の前にある歯、顎関節、装置としての義歯と格闘するのだが、全ては最良の咀嚼機能を得るためであったのだと改めて気付かされた。

咀嚼機能を測る、ということは咀嚼能力を客観的に把握することであり、治療の成果を客観的に評価したり、治療に関するエビデンスを作り、治療のゴールを患者様と共有することにつながる。ただ新義歯を作り、よく咬めるようになった、よかったね、と会話する漠然としたものとは明らかに違うのだ。

さて、咀嚼機能低下の検査項目としてグルコース測定装置による咀嚼能力検査とグミゼリーによる咀嚼能力スコア法があり、グミゼリーによる診断は簡便で患者様にも視覚的にわかりやすく指導に取り入れやすいものである、と感じた。

まだまだ新たな項目の算定件数は少ないと聞いている。自分自身縁遠い項目と考えていたが、今一度その意義を学び見つめなおすよい機会となったことに感謝している。

有床義歯の基礎、臨床、口腔外科分野、老年摂食嚥下リハビリ、口腔生理と、とても広く深く研究されてきた小野先生のお話はお聴きしていて面白く、どんどん引き込まれ、アツという間の時間でした。RYUTistという新潟で当地アイドルグループの一員の「ののこ」さんという方が心の支えだ、とおっしゃるお茶目さも素敵で、とても楽しく聞かせていただき感謝申し上げます。

\*\*\*\*\*



## セミナーを受講しての感想

歯学科48期生 松崎 奈々香

私は今年で歯科医師2年目になりますが、今回のテーマであるインプラント治療は昨年まではほとんど目にする機会がなかったため、特別な治療のイメージがありました。以前まではインプラントや手術というと患者さんが少し不安に思うこともあったようですが、最近では数歯欠損の場合は患者さんの方からインプラントを希望されることが多くなっていると聞き、自然に選べる選択肢となっているようで興味を持ち、病院内でもよくお名前を耳にする佐藤孝弘先生の講演とのことで、全くの初心者ではありましたが、ぜひと思いき参加させていただきました。



まず日本の歯科医院の35.6%、およそ3万か所でインプラント治療が行われていることに驚きました。2014年のある1カ月間では2万5千件のオペが行われたとの報告もあるそうで、自分で思っていた以上にインプラントはポピュラーな治療になっているのだと知りました。ただ、多くの先生が治療を行うようになると、それだけトラブルも増えている現状もあるそうです。そこで先生が仰っていたのはコンセンサス（意見の一致、合意）に基づく治療です。インプラントだけではなく、他の歯科治療や他分野においても正しいとされる規準や考え方というのは時代によって少しずつ変化していきます。佐藤先生はITI (The International Team for Implantology) という国際的な学術組織に所属し、数年に一度、各国からインプラントの有識者が集まり様々な項目について意見の摺り合わせが行われ、その結果であるコンセンサスを元に行っていると話されていました。新しく移り変わっていく情報に常にアンテナ







を張り、自らの知識や考え方をアップデートしていく大切さを感じました。

上記のトピックの中で印象的だったのは、MI (Minimal Intervention) でした。患者さん主体の考え方で出来るだけ低侵襲に、外科をしない方針で、骨が少ないからと言って骨造成を第一に考えるのではなく、骨のあるところにガイドで傾斜埋入を行ったり、場合によっては6mm以下のショートインプラントも十分に選択肢になり得るとのことでした。より細く短いインプラント体を選択し、既存骨の温存と侵襲の大きい骨造成の回避を図ることが現在のスタンダードであるということは、少ないながらも持っていた知識が覆され、とても印象的で興味深い内容でした。

インプラント治療は当然ではありますが、高度な知識や技術が必要で、安易に行うべきではないことを再度認識するとともに、今まで学んできたものとは違った新たな分野として、これからもっと知識を増やしていきたいと思いました。佐藤先生はじめ関係者の先生方、貴重な機会をありがとうございました。



# 教 職 員 異 動

## 学 部

### 【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
昇任	H31. 4. 1	土 門 久 哲	微生物感染症学分野准教授	微生物感染症学分野助教
昇任	H31. 4. 1	川 崎 真依子	口腔解剖学分野准教授	口腔解剖学分野助教
昇任	H31. 4. 1	前 川 知 樹	高度口腔機能教育研究センター准教授	高度口腔機能教育研究センター助教
昇任	H31. 4. 1	石 田 陽 子	歯学教育開発室特任講師	歯学教育開発室特任助教
採用	H31. 4. 1	久保田 悠	予防歯科学分野助教	医歯学総合病院予防歯科助教
採用	H31. 4. 1	野 中 由香莉	歯周診断・再建学分野助教	医歯学総合病院歯周病科医員
採用	H31. 4. 1	齋 藤 直 朗	組織再建口腔外科学分野助教	医歯学総合病院口腔再建外科医員
採用	H31. 4. 1	高 波 里 帆	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	
採用	H31. 4. 1	阿 部 遼	歯科矯正学分野教務補佐員	
採用	H31. 4. 1	河 村 智 子	歯科矯正学分野教務補佐員	
採用	H31. 4. 1	小 川 友里奈	口腔生命福祉学科教務補佐員	
退職	H31. 4. 30	藤 原 茂 弘		包括歯科補綴学分野助教
採用	R 1. 5. 1	SALAZAR SIMONNE	包括歯科補綴学分野特任助教	
採用	R 1. 6. 1	原 実 生	高度口腔機能教育研究センター特任助教	
退職	R 1. 6. 30	白 石 成		摂食嚥下リハビリテーション学分野助教
採用	R 1. 7. 28	小 川 友里奈	口腔生命福祉学科助教(育休代替)	口腔生命福祉学科教務補佐員

### 【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	H31. 4. 1	本 間 和 世	医歯学系歯学部事務室総務係	
配置換	H31. 4. 1	井 部 達 也	医歯学総合病院管理運営課副課長	医歯学系歯学部事務室長
配置換	H31. 4. 1	近 藤 正 一	医歯学系歯学部事務室長	医歯学系脳研究所事務室長
配置換	H31. 4. 1	小 林 江 里	総務部労務福利課副課長	医歯学系歯学部事務室総務係長

配置換	H31.4.1	中澤典子	医歯学系歯学部事務室総務係長	医歯学系歯学部事務室学務係長
配置換	H31.4.1	鈴木寛則	医歯学系歯学部事務室学務係長	医歯学系歯学部事務室総務係主任
配置換	H31.4.1	鈴木香織	医歯学系歯学部事務室総務係	総務部総務課広報推進係
退職	R1.5.31	増田さおり		医歯学系歯学部事務室総務係派遣職員
採用	R1.6.1	布川友美	医歯学系歯学部事務室総務係派遣職員	



## 病 院

### 【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
所属換	H31. 4. 1	小 川 信	輸血・再生・細胞治療センター特任助教	生命科学医療センター特任助教
採用	H31. 4. 1	須 田 大 亮	口腔再建外科医員	魚沼地域医療教育センター（歯科口腔外科） 特任助教
採用	H31. 4. 1	北 村 厚	顎顔面口腔外科医員	
採用	H31. 4. 1	新 垣 元 基	顎顔面口腔外科医員	
採用	H31. 4. 1	氏 田 倫 章	歯科麻酔科レジデント	
採用	H31. 4. 1	平 原 三貴子	小児歯科・障がい者歯科医員	（学系特任助教）
採用	H31. 4. 1	山 本 悠	冠・ブリッジ診療科レジデント	
採用	H31. 4. 1	長谷川 泰 輔	歯の診療科医員	歯の診療科医員（パート）
採用	H31. 4. 1	高 昇 将	冠・ブリッジ診療科医員	冠・ブリッジ診療科レジデント（パート）
採用	H31. 4. 1	小 野 喜 樹	冠・ブリッジ診療科レジデント	
採用	H31. 4. 1	菊 地 さつき	義歯診療科医員	義歯診療科医員（パート）
採用	H31. 4. 1	設 楽 仁 子	義歯診療科医員	義歯診療科医員（パート）
採用	H31. 4. 1	佐 藤 拓 実	歯科総合診療部医員	歯科総合診療部医員（パート）
採用	H31. 4. 1	浅 野 佐和子	歯科総合診療部レジデント	
採用	H31. 4. 1	田 島 稜 子	歯科総合診療部レジデント	
採用	H31. 4. 1	土 屋 健太郎	顎関節治療部レジデント	
採用	H31. 4. 1	松 崎 奈々香	顎関節治療部レジデント	
採用	H31. 4. 1	三 谷 咲 貴	インプラント治療部レジデント	冠・ブリッジ診療科レジデント
採用	H31. 4. 1	加 藤 祐 介	魚沼地域医療教育センター（歯科口腔外科） 特任講師	口腔再建外科特任助教
採用	H31. 4. 1	永 井 孝 宏	顎顔面口腔外科助教	顎顔面口腔外科医員
採用	H31. 4. 1	上野山 敦 士	顎顔面口腔外科助教	顎顔面口腔外科医員
採用	H31. 4. 1	小 林 太 一	歯科放射線科助教	（学系助教）
採用	H31. 4. 1	荻 野 奈保子	口腔再建外科医員（パート）	口腔再建外科レジデント（パート）
採用	H31. 4. 1	竹 内 涼 子	口腔再建外科医員（パート）	口腔再建外科レジデント（パート）
採用	H31. 4. 1	小 林 亮 太	顎顔面口腔外科レジデント（パート）	
採用	H31. 4. 1	清 水 志 保	顎顔面口腔外科医員（パート）	顎顔面口腔外科レジデント（パート）
採用	H31. 4. 1	内 藤 絵里子	顎顔面口腔外科レジデント（パート）	
採用	H31. 4. 1	清 川 裕 貴	小児歯科・障がい者歯科レジデント（パート）	

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	H31. 4. 1	五月女 哲也	小児歯科・障がい者歯科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	築野 沙絵子	小児歯科・障がい者歯科レジデント(パート)	小児歯科・障がい者歯科レジデント
採用	H31. 4. 1	朴沢 美生	小児歯科・障がい者歯科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	新井 萌生	矯正歯科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	深町 直哉	矯正歯科医員(パート)	矯正歯科レジデント(パート)
採用	H31. 4. 1	水越 優	矯正歯科医員(パート)	矯正歯科レジデント(パート)
採用	H31. 4. 1	三村 俊平	矯正歯科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	吉田 智美	矯正歯科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	田村 浩平	予防歯科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	鈴木 裕希	歯の診療科医員(パート)	歯の診療科レジデント(パート)
採用	H31. 4. 1	木村 龍弥	冠・ブリッジ診療科レジデント(パート)	冠・ブリッジ診療科レジデント
採用	H31. 4. 1	高岡 由梨那	冠・ブリッジ診療科医員(パート)	冠・ブリッジ診療科レジデント(パート)
採用	H31. 4. 1	三井田 慶斗	冠・ブリッジ診療科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	上原文子	義歯診療科医員(パート)	義歯診療科レジデント(パート)
採用	H31. 4. 1	兒玉 匠平	義歯診療科医員(パート)	義歯診療科レジデント(パート)
採用	H31. 4. 1	堀 頌子	義歯診療科レジデント(パート)	義歯診療科レジデント
採用	H31. 4. 1	吉村 将悟	義歯診療科レジデント(パート)	義歯診療科レジデント
採用	H31. 4. 1	善本 佑	義歯診療科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	小貫 和佳奈	口腔リハビリテーション科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	日野 遥香	口腔リハビリテーション科レジデント(パート)	
採用	H31. 4. 1	吉原 翠	口腔リハビリテーション科医員(パート)	口腔リハビリテーション科レジデント(パート)
採用	H31. 4. 1	西田 洋平	歯科麻酔科医員(パート)	歯科麻酔科レジデント(パート)
採用	R1. 5. 1	大川 純平	義歯診療科助教	義歯診療科医員(パート)
採用	R1. 5. 1	浅見 栄里	口腔再建外科レジデント(パート)	
採用	R1. 5. 1	野村 みずき	歯科総合診療部レジデント(パート)	
採用	R1. 5. 1	磯野 俊仁	歯の診療科レジデント(パート)	
退職	R1. 5. 31	村上 智哉		小児歯科・障がい者歯科助教
退職	R1. 5. 31	星名 秀行		インプラント治療部講師
退職	R1. 5. 31	堀 沙耶香		予防歯科医員
退職	R1. 5. 31	原 実生		歯周病科医員(パート)
採用	R1. 6. 1	佐久間 英伸	口腔再建外科特任助教	口腔再建外科医員
退職	R1. 6. 30	山賀 孝之		予防歯科講師

## 【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	H31. 4. 1	山野井 敬彦	歯科技工部門歯科技工士長	歯科技工部門主任歯科技工士
命	H31. 4. 1	長谷川 健二	歯科技工部門主任歯科技工士	歯科技工部門歯科技工士
採用	H31. 4. 1	川 島 美 咲	歯科技工部門歯科技工士	
採用	H31. 4. 1	倉 又 七 海	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	R 1. 6. 1	藤 石 美 穂	歯科技工部門歯科技工士	
任期満了	R 1. 6. 30	小 林 実可子		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	R 1. 7. 1	齋 藤 菜 月	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	H31. 4. 1	伊 藤 緋奈野	東3階病棟看護師	
採用	H31. 4. 1	倉 島 柊	東3階病棟看護師	
採用	H31. 4. 1	品 田 瑞 季	東3階病棟看護師	
採用	H31. 4. 1	袖 山 美 花	東3階病棟看護師	
所属換	H31. 4. 1	川 村 都 子	外来（歯科）看護師長	外来 エントランス・1階看護師長
所属換	H31. 4. 1	若 槻 友 理	東3階病棟看護師	外来 エントランス・1階看護師
所属換	H31. 4. 1	長 橋 雅 代	東3階病棟看護師	高次救命災害治療センター看護師
所属換	H31. 4. 15	村 田 真奈美	外来（歯科）看護師	手術部看護師
所属換	H31. 4. 15	島 田 直 美	外来（歯科）看護師	西4階病棟看護師
所属換	R 1. 5. 7	佐々木 薫	東3階病棟副看護師長	西9階病棟副看護師長
育児休業	R 1. 6. 19	星 野 苑 美		外来（歯科）看護師
育児休業	R 1. 6. 27	田 邊 小百合		東3階病棟看護師
育児休業	R 1. 7. 7	堀 舞		東3階病棟看護師
所属換	R 1. 7. 16	飛田野 奈美	東3階病棟看護師	東8階病棟看護師
育児休業	R 1. 8. 27	稲 田 綾 子		外来（歯科）看護師

## 【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	H31. 4. 1	土田 秀樹	総務課長	自然科学系総務課長
配置換	H31. 4. 1	八百板 正樹	基礎・臨床研究支援課長	財務部財務企画課副課長
配置換	H31. 4. 1	伊藤 和美	総務課専門職員	人文社会科学系総務課主任
配置換	H31. 4. 1	滝沢 美穂	総務課専門職員	総務部企画課主任
配置換	H31. 4. 1	今村 尊博	総務課専門職員	医事課救急医療係長
配置換	H31. 4. 1	大熊 忠	経営企画課副課長	管理運営課副課長
配置換	H31. 4. 1	井部 達也	管理運営課副課長	医歯学系総務課副課長(歯学部事務室長)
配置換	H31. 4. 1	青山 由紀代	管理運営課薬品材料係長	人文社会科学系総務課会計係長
配置換	H31. 4. 1	井関 慶喜	基礎・臨床研究支援課研究管理係長	管理運営課臨床研究支援係長
配置換	H31. 4. 1	横山 康之介	基礎・臨床研究支援課臨床研究係長	管理運営課専門職員
配置換	H31. 4. 1	木伏 哲夫	基礎・臨床研究支援課外部資金係長	医歯学系総務課学系研究支援係長
配置換	H31. 4. 1	渋谷 孝巳	医事課副課長	経営企画課副課長
配置換	H31. 4. 1	片桐 孝昭	医事課専門員	医事課副課長
配置換	H31. 4. 1	丸山 浩一	医事課医事総括係長	学術情報部学術情報企画課情報企画係長
配置換	H31. 4. 1	戸松 真紀	医事課専門職員	医事課主任
配置換	H31. 4. 1	田澤 由紀子	医事課審査係長	医事課専門職員
配置換	H31. 4. 1	目黒 恵美	医事課救急医療係長	医事課付
配置換	H31. 4. 1	平賀 智之	医事課医療安全係長	医事課主任
配置換	H31. 4. 1	小海 松男	医歯学系事務部長	総務課長
配置換	H31. 4. 1	吉田 恵太郎	人文社会科学系総務課長	医事課副課長
配置換	H31. 4. 1	杉野 ゆかり	自然科学系農学部事務室フィールド科学教育研究センター係長	医事課医療安全係長

## 平成31年度歯学部内委員会

平成31年 4月 1日

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考	
—	前田 健康	系列長		任期 H31.4.1～R3.3.31	
総務委員会	前田 健康	歯学部長		総括	
	小林 正治	副病院長		歯科担当	
	大内 章嗣	副学部長・評議員		学務	
	小野 高裕	副学部長・歯学科長		副学系長	
	大峽 淳	副学部長		研究・施設	
	魚島 勝美	副学部長		国際交流・広報	
	井上 誠	学部長補佐(オブザーバー)		総括	
	照沼 美穂	学部長補佐(オブザーバー)		研究	
	小川 祐司	学部長補佐(オブザーバー)		国際交流	
	多部田 康一	学部長補佐(オブザーバー)		施設・広報	
	葎原 明弘	口腔生命福祉学科学科長			
小野 和宏	学務委員会委員長				
学務委員会	小野 和宏	学務委員会委員長		総括	
	井上 誠	教務委員会委員長		教務	
	野村 由一郎	入試委員会委員長	入試実施委	入試	
	山村 健介	学生支援委員会委員長		学生支援	
	藤井 規孝	臨床実習委員会委員長		臨床実習	
	葎原 明弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科	
	大内 章嗣	副学部長・評議員		学務	
教務委員会	井上 誠	教務委員会委員長		総括	
	小野 和宏			オブザーバー	
	林 孝文			教育課程(歯学科系)	
	大内 章嗣			教育課程(口腔生命福祉学科系)	
	スガコク・ロクサーナ			教育課程(口腔生命福祉学科系)	
	大峽 淳			◎共用試験(CBT)	
	石崎 裕子			◎共用試験(OSCE)	
	多部田 康一	(臨床実地試験 総括)		◎共用試験 (診療参加型臨床実習後 客観的臨床能力試験)	
	吉羽 邦彦	(一斉技能試験 総括)		◎共用試験 (診療参加型臨床実習後 客観的臨床能力試験)	
	臨床実習実施委員会 (歯学科第50期)	藤井 規孝	委員長		
田中 裕		50期ヘッドインストラクター			
竹中 彰治		歯の診療科			
杉田 典子		歯周病科			
五十嵐 直子		義歯診療科			
秋葉 奈美		冠・ブリッジ診療科			
三上 俊彦		口腔再建外科			
小山 貴寛		顎顔面口腔外科			
丸山 智		口腔病理検査室			
池 真樹子		歯科放射線科			
伊藤 晴江		歯科総合診療部			
佐久間 充子		看護部門			
高野 綾子		歯科衛生部門			
倉田 行伸		歯科麻酔科			
久保田 悠		予防歯科			
渡邊 賢礼		口腔リハビリテーション科			
中島 努		小児・障がい者歯科			
竹山 雅規		矯正歯科			
臨床実習実施委員会 (口腔生命福祉学科第13期)		藤井 規孝	歯科総合診療部		
		山賀 孝之	予防歯科		
	大墨 竜也	歯の診療科			
	高橋 直紀	歯周病科			
	三上 俊彦	口腔再建外科			
	小山 貴寛	顎顔面外科・病室			
	稲川 さゆり	東病棟3階			
	秋葉 奈美	冠ブリッジ診療科			
	五十嵐 直子	義歯診療科			

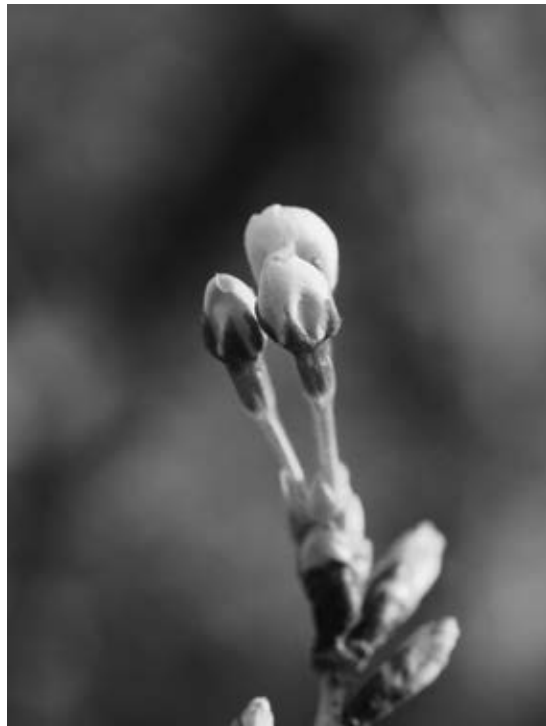


委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
	高橋 功次朗	矯正歯科		
	大竹 正紀	矯正歯科		
	大湊 麗	歯科言語治療室		
	岩瀬 陽子	小児歯科		
	羽田野 政義	歯科撮影室		
	倉田 行伸	歯科麻酔科		
	荒井 良明	顎関節治療部		
	星名 秀行	インプラント治療部		
	勝良 剛詞	歯科放射線科		
	伊藤 加代子	口腔リハビリテーション科		
	真柄 仁	摂食嚥下機能回復部		
	黒川 孝一	お口の健康室		
	奥村 暢旦	歯科総合診療部		
	川村 都子	歯科外来		
	遠藤 千佳	歯科外来手術室		
	後藤 早苗	歯科衛生部門		
	吉羽 邦彦	口腔保健学分野		
	柴田 佐都子	口腔保健学分野		
	諏訪間 加奈	口腔保健学分野		
	米澤 大輔	福祉学分野		
小田島 あゆ子	口腔保健学分野			
小川 友里奈	口腔保健学分野			
共用試験委員会	大峽 淳	CBT (副学部長)		必要な都度委員を指名
	石崎 裕子	OSCE		必要な都度委員を指名
	多部田 康一	臨床実地試験 総括		必要な都度委員を指名
学生支援委員会	吉羽 邦彦	一斉技能試験 総括		必要な都度委員を指名
	山村 健介	学生支援委員会委員長	学生相談室相談員・学生相談連絡会議	総括
	依田 浩子			歯学科
	小松 康高			歯学科
	秋葉 奈美			歯学科
	諏訪間 加奈			口腔生命福祉学科
	佐伯 万騎男		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
学生相談員	伊藤 晴江			研究科
	山村 健介			
	依田 浩子			
	前田 健康	学部長		
入試制度委員会	大内 章嗣	副学部長 (学務)		
	小野 高裕	副学部長 (歯学科長)		
	葭原 明弘	口腔生命福祉学科長		
	野杵 由一郎	入試実施委員会委員長		
	小野 和宏	学務委員会委員長		
	山村 健介	学生支援委員会委員長		
入試実施委員会	野杵 由一郎	入試実施委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	高橋 英樹	前入試実施委員会委員長		補佐
	佐伯 万騎男			
	田沼 順一			オブザーバー
研究科学務委員会	井上 誠	学部長補佐		総括
	葭原 明弘			教務
	泉 健次			学生支援
	石田 陽子			オブザーバー (留学生支援)
施設環境整備委員会	小野 高裕	副学部長		総括
	大峽 淳	副学部長	動物実験倫理委員会	
	佐伯 万騎男		施設整備専門委	
	齊藤 一誠			
	寺尾 豊		遺伝子組換え実験安全委	
	加来 賢		総合博物館検討専門委	
共通施設専門委員会	堀 一浩			
	小野 高裕	副学部長		
部局環境安全衛生管理室	前田 健康	学部長		役職指定
	永田 昌毅			環境安全管理担当者
	近藤 正一			事務室長
	林 尚人			衛生管理者

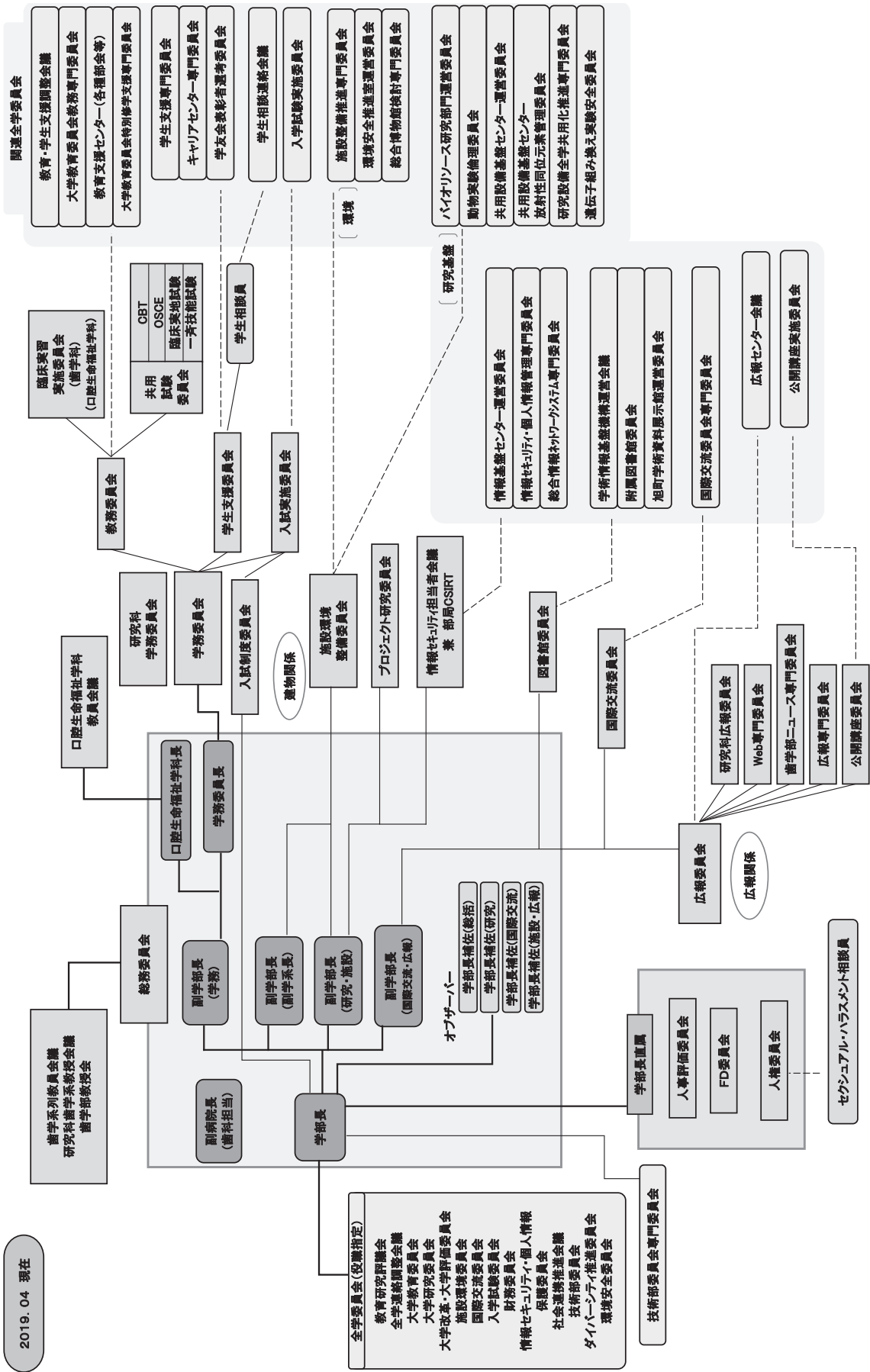
委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
情報セキュリティ担当者会議兼 部局CSIRT	西山 秀 昌		情報基盤センター運営委	総括
	鈴木 一 郎			IT一般
	黒川 孝 一			
	丹原 惇 一			
図書館委員会	寺尾 豊 一	医歯学図書館長	附属図書館委員会	
	土門 久 哲			
	吉羽 邦 彦			
国際交流委員会	魚島 勝 美	副学部長		
	大 峽 淳	副学部長		
	照 沼 美 穂	学部長補佐		
	小 川 祐 司	学部長補佐		
	泉 健 次			
	長 澤 麻 沙 子			
	柿 原 嘉 人			
広報委員会	石田 陽 子	オブザーバー		
	魚島 勝 美	副学部長	歯学部ニュース専門委	総括
	多部田 康 一	学部長補佐		
	大 島 勇 人		研究科広報委web担当	◎
	スガコク・ロクサーナ		広報委員会（学部）	◎
	吉羽 邦 彦		広報委員会（研究科）	◎
	黒川 孝 一		口腔生命福祉学科・学 部広報web専門委	◎
辻 村 恭 憲		公開講座実施委員会	◎	
研究科広報委員会 （Web担当）	大 島 勇 人			◎
	鈴木 一 郎			◎
歯学部広報委員会 Web専門委員会	黒川 孝 一			◎
丹原 惇 一				
歯学部ニュース専門委員会	魚島 勝 美	副学部長		他の委員は准講師、助教層 からローテーションで選出
広報専門委員会	多部田 康 一	学部長補佐	学部	
	吉羽 邦 彦		研究科	
歯学部公開講座委員会	辻 村 恭 憲		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	大 峽 淳	副学部長		
	小 野 高 裕	副学部長		
	泉 健 次			
	岡 本 圭 一 郎			
	片 桐 涉			
臨床系実習室管理委員会	前 川 知 樹			
	小 野 高 裕	共同技工室、実習準備室		
	吉 羽 永 子	臨床基礎実習室、臨床技 能評価室、臨床示説室		
	小 林 哲 夫	臨床基礎実習室		
	魚 島 勝 美	臨床基礎技能実習室		
	加 来 賢	臨床技能自習室		
人事評価委員会	藤 井 規 孝	臨床実習技工室		
	黒川 孝 一	歯科行動科学相互実習室		
	前 田 健 康	系列長		
	山 村 健 介	任期制教員で基礎系の教授		任期 H30.4.1～R2.3.31
	林 孝 文	任期制教員で臨床系の教授		任期 H30.4.1～R2.3.31
	丹 原 惇 一	任期制教員である准教授、講 師及び助教のうちから2人		任期 H31.4.1～R2.3.31
FD委員会	竹 中 彰 治			任期 H30.4.1～R2.3.31
	秋 葉 陽 介	委員長		
	吉 羽 永 子			
	新 美 奏 恵			
	真 柄 仁			
	伊 藤 晴 江			
	米 田 博 行			
	高 橋 直 紀			
	川 崎 真 依 子			
前 田 健 康	顧問			
小 野 和 宏	オブザーバー			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
	井上 誠	オブザーバー		

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成31年4月1日から令和3年3月31日まで  
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員



# 《歯学部各種委員会》



## 編集後記

まず初めに、この度はお忙しい中原稿執筆にご協力いただいた先生、学生さん、締め切りまでにご投稿くださり、感謝申し上げます。私自身のこの編集後記が締め切りまでに間に合っておらず大変恐縮です。歯学部ニュースは、寄稿させていただく機会はありませんでしたが、依頼する側として編集に携わることで、多くの方がこの充実した広報誌を作り上げるために尽力していることを改めて実感しました。学生さんの日常や、先生方の素顔など、歯学部の情報をぎゅっと詰め込んだ貴重な情報源として、これからも私自身楽しませていただこうと思います。

う蝕学分野 大墨 竜也

この度は、大変お忙しい中、原稿執筆にご協力いただきました先生方、学生さんにこの場をお借りして感謝申し上げます。今回、初めて歯学部ニュースの編集に関わらせていただき、冊子ができるまでの過程を知ることができたことは、大変貴重な経験となりました。また、原稿を確認する中で、改めて知る、初めて知る活動も多く、歯学部や学生さんの明るい未来を感じることができました。今後もこの歯学部ニュースが活発な情報発信の場となることを心より願っております。

小児歯科学分野 黒澤 美絵

この度、初めて歯学部ニュースの編集を担当させていただきました。原稿の依頼を快くお引き受けくださいました先生方ならびに学生の皆さん、本当にありがとうございました。編集業務を通じて、学生さんの生き生きとした学生生活や、先生方の歯科医療・研究・教育への真摯な情熱をうかがい知ることができ、とても心強く感じました。読者の皆様に、活気溢れる新潟大学歯学部の様子を感じていただけたら嬉しいです。

高度口腔機能教育研究センター 山田 友里恵

新潟大学歯学部に来た当初、歯学部ニュースが年2回発行され、この厚みのある冊子としてみなさまのもとに届けられ続けられるということは大きな衝撃でした。これも偏に、執筆、編集に携わる様々な方々の思いがあってこそのものであったと思います。まさか3年目にして、そのような歯学部ニュースの編集委員に自身が参加することになるとは予想もしていませんでした。改めて編集長および編集委員の先生お疲れ様でした。また、原稿執筆に快くご協力いただいた先生および学生さんに深く御礼申し上げます。

包括歯科補綴学分野 米田 博行

今回、歯学部ニュース135号の編集および取りまとめを担当させていただきました。コンテンツに関しては昨今の事情を鑑み一部内容の見直しは行いましたが、「主役は歯学部生」であることを念頭に編集させていただきました。そんな中で頂戴した原稿を拝読しますと新潟大学歯学部のもつ強力なパワーを感じずにはいられません。是非これからの歯学部ニュースも楽しみにお読みください。最後に、不慣れな私を最後まで助けてくださった歯学部の諸先生方、事務の方、そして編集委員の先生方、本当にありがとうございました。お陰様で円滑な作業ができました。心より御礼申し上げます。

組織再建口腔外科学分野 片桐 渉

## 歯学部ニュース

令和元年度第1号（通算135号）

発行日 令和元年10月17日  
発行者 新潟大学歯学部広報委員会  
編集責任者 片桐 渉、魚島 勝美  
編集委員 大墨 竜也、黒澤 美絵  
山田友里恵、米田 博行  
印刷所 (株)ウィザップ

#### 表紙・裏表紙写真の説明

##### 表紙の撮影データ

撮影地：清津峡（十日町市）

撮影日：2019年5月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F 7.1・シャッター速度：250分の1秒

##### 裏表紙の撮影データ

撮影地：笹川流れ（村上市）

撮影日：2019年9月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F 10・シャッター速度：400分の1秒

コメント：今回は地元新潟の観光スポットを選んで、山と海を題材としてみました。いずれも標準ズームの広角端（35mm版換算で24mm相当）を使用して絞りを絞り気味にして全画面にピントが合うように撮影しました。表紙は清津峡渓谷トンネルですが、色調バランスが表紙に合うように天地を反転してみました。そもそも非現実的に見える景色なのですが、さらに幻想的な光景になったのではないかと思います。裏表紙は笹川流れ遊覧船から観賞できる雄獅子岩と呼ばれる景観ですが、船に集まってくる無数のカモメの羽が構図的にいい位置に来たので撮影しました。

##### 本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS E-M5 Mark II, PEN-F, E-P5

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0, M.ZUIKO DIGITAL 25mm F1.8, M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro

撮影者：林 孝文



リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。